
IS <インフィニットストラトス> 女神が創成した世界

タケケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS<インフィニットストラトス>女神が創成した世界

【Nコード】

N2129T

【作者名】

タケケ

【あらすじ】

エヴァに乗りサードインパクトを起こした碇シンジ。ネウロイとの戦闘で撃たれた宮藤芳佳。気付けば二人は別の世界にいた。そこは《IS》という女性にしか扱えない兵器が存在する世界。二人はこの世界で生きていけるのか？

IS、エヴァ、ストパン転生小説です。更新はかなり遅いですがよろしく願います

もう一方のISリリカルまどマギ小説『時の少女と機械の少女』
とは別世界です

第零話 プロローグ（前書き）

芳佳「まだ一夏さん達は出ないよ」

シンジ「この話にカヲル君も出ないよ!」

カヲル「えっ」

第零話 プロローグ

世界は壊れつつあった。

第10使徒の襲来により第三新東京市は壊滅、ジオフロントを守る計24層の特殊装甲もあっさり破壊された。

無断で2号機の凍結を解き、真希波・マリ・イラストリアスは単独で出撃した。

裏コード『ザ・ビースト』で一時は優勢になるが触手のような攻撃で活動不能に陥った。

そして入れ代わるようにファーストチルドレンこと綾波レイが乗る零号機がN2爆弾を抱えて使徒に突撃し、自爆を諂った。

だがこれも失敗に終わり、零号機とレイは使徒に取り込まれた。それにより識別信号が零号機になった使徒は一気にセントラルドグマを下降して司令室へ突入した。

避難していた碇シンジはマリの誘導で再び初号機に乗り、使徒に挑む。

片腕を失いながらも使徒を追い詰めるが活動限界に達し、動かなくなった。

「綾波を……返せ！」

シンジの心に反応した初号機は覚醒し、再び使徒に挑んだ。
圧倒的な力で使徒を撃滅し、レイを救うことに成功した。

.....

「数が揃わぬうちに初号機をトリガーにするとは………碇指令、
ゼーレが黙っちゃいませんよ」

加持リヨウジが見上げながら呟く。

視線の先に浮かぶのは初号機と使徒の残骸で形成された綾波レイ。

碇ゲンドウと冬月コウゾウも同じように仰いでいた。

「やはりあの二人で初号機の覚醒はなったな」

「ああ、我々の計画にたどり着くまであと少しだ」

覚醒した初号機をミサト達は呆然と眺めていた。

「この世界の理を超えた新たな生命の誕生。代償として古の生命は滅びる」

「翼…… 15年前と同じ」

「そう、セカンドインパクトの続き。サードインパクトが始まる、世界が終るのよ」

「綾波、父さんのことありがとう」

「ごめんなさい。何もできなかった」

「いいんだ、もう。これでいいんだ」

シンジはそつとレイを抱き寄せた。

そして、二人を残して古の生命は全て滅した。

シンジとレイは何も無い空間をウォーターライダーのように流されていたがお互いを離さないように必死に耐えていた。
しかし、レイの温もりが薄らいでいく。姿も砂の塔が風化するように崩れていく。

「綾波！」

「碇く——」

声は遠ざかるように掻き消えて、温かさも完全に失せた。
手を伸ばして求めるが空を切るように何も触れられなかった。

「綾波い——！」

.....

「攻撃開始！！」

ミーナの号令と共に第501航空団ことストライクウィッチーズは引き金を引いた。

ロマーニヤ上空にネウロイが出撃し再び戦場へ駆り出されることになった。

今回のネウロイは今までに無い大きさを誇っていた。ネウロイを米びつのサイズとするなら人は米粒くらいの大さき。誰もが「いくらなんでも馬鹿げてる……」と口にしたくなるほど巨大だ。

更に厄介なのは車サイズの分身ネウロイが200体以上いることだ。

「全方位からネウロイは攻撃してくる。油断するな」
「はい」

宮藤芳佳は銃をギュツと握りしめ、分身ネウロイに接近した。芳佳に気づいた分身ネウロイは蟻の軍隊のように囲み始める。端からネウロイに狙いを定め引き金を弾いた。

簡単に貫通し、消えていく分身ネウロイ。

しかし本体にはまだ近づけない。本体からは分身と比べものになら

ない攻撃でウィッチ達を追い詰めていく。

「このままだとじり貧だ。弾が尽きたら死ぬぞ」

「その前にあの本体を叩かないと……ロマーニヤが」

余るほどいた分身は10分の1にまで減り、ウィッチ達が優勢になった。

「宮藤、ペリーヌ、リーネ！突撃するぞ！」

「はい！」

「了解！」

「分かりました！」

「援護するわ。気をつけて！」

坂本美緒に率いられ三人はネウロイ本体に突撃した。

ネウロイの攻撃は威力を増し、シールドを展開しても押し返される

くらいになった。なるべく張らずに間を縫うように四人はネウロイのコアへ近づく。コアは分かりやすいことに大きく剥き出しになっていた。

「撃て！」

三人は一斉に放った。
しかし少し距離があり中々命中しない。

「宮藤後ろ！！」
「！」

完全にコア破壊に集中していた芳佳が振り向くと撃滅し損ねた分身ネウロイがいた。

「こんなもの！」

芳佳は接近した分身を確実に撃った。

そして背後から撃たれた。

「え……っ」

「宮藤いいい!!」

芳佳が撃墜した分身は囷だった。気を取られていた芳佳が本命の分身に背中を見せる形になっていた。

力を失った芳佳は銃を手放し真っ逆さまに墜ちていった。

シャーロット達は急いで助けようと向かうが分身が道を阻んだ。

「邪魔だ!」

「芳佳を返せ!!」

墜ち行く芳佳に止めを刺そうと分身が一体近づいた。死を覚悟した芳佳は静かに目を瞑った。

「さよなら……」

再びネウロイの攻撃が芳佳の華奢な身体を撃ち抜いた。

続く

第零話 プロローグ（後書き）

これから他のキャラも参戦（転生）してきます

第巻話 虚無の中のニンジン（前書き）

シンジ「ニンジンと言えばうなぎ」

芳佳「うなぎと言えばあの人」

第巻話 虚無の中のニンジン

「う……ん……？」

シンジが目を覚ますと白い空間にいた。床はあるのでしっかりと踏み締めることができる。

シンジは状況が飲み込めずしばらく呆然と虚空を見つめていた。

「僕は、死んだのかな……？」

手を握り、広げる動作を繰り返して自分が生きていることを確かめた。幽霊ではなかったことに少し安心した。

ドサッ

何か落ちた。唐突な出来事に思わずビクツと縮こまった。
恐る恐る振り向くと少女が倒れていた。

「!？」

シンジは少女に駆け寄り腕に触れて脈を確かめた。ゆっくり均一なリズムで血は流れていた。
シンジは胸を撫で下ろすと少女に呼び掛けた。

「もしもし、大丈夫ですか？」

「……………」

「大丈夫ですか？」

仰向けの状態にして少女の頬を軽く叩いた。少女はピクリとも動かない。

「もしもし！」

「……………」

「生きてるんですね！」

「……………ん？」

少女は漸く目を覚ました。

「あ、あれ私、死んだはず……？」

「君は生きてるよ」

「……貴方は？」

「僕は碇シンジ。僕もサードインパクトで死んだと思ってたけど」

「サードインパクト？」

「いわゆる……爆発事故だよ」

少女は住んでいる世界が違つらしく、よく分かってないらしい。シンジも似たような言葉でごまかした。

「あ、私は宮藤芳佳です」

「宮藤さんか」

「はい」

シンジの手に捕まり、フラフラしながら立ち上がった。

二人の周りには何も無い。

「ここはどこですか？」

「分からない、死んだと思ってたらここにいて……心臓も動いてるのに」

シンジと芳佳はまっすぐ歩き出した。どこかに出口があるはず、と二人は信じていた。

「疲れた……」

「まだ……見えない」

かなり歩いた。しかし景色は何一つ変わっていない。右に曲がり左に曲がってもただ白い世界が広がっているだけ。まるで出口の無い迷宮に閉じ込められた雰囲気だ。

「少し休憩しませんか……」

「そうだね……」

二人は白い地面に座り込んだ。

触り心地は柔らかくない、しかし固くない、不思議な感触だった。

「宮藤さんって事故で死んだの？」

「まあ、事故というより戦争です。ネウロイと戦っていたら撃たれて……」

「……撃たれた？」

「私第501航空団に所属している軍人なんです」

「へー凄いね」

「そ、そんなこと………？」

芳佳は後ろを見た。そこにあつたものに目を丸くした。

「シンジさん、後ろ見てください！」

「？」

シンジが振り返ると後ろには巨大なニンジンが浮いていた。普通のニンジンではなくオブジェのような輝きを放っている偽物だ。そもそもこんなニンジンがあるわけ無い。

「なんだろう………？」

シンジはコンコンと軽く叩いた。

すると二つに割れて中からウサギが飛び出した。

「ヤッホー、始めまして。この空間を作り出した天才篠ノ之束さんだよ」

「……………」

「……………」

シンジと芳佳はポカンと口を開けた。

「あれー？シラけちゃった？」

「……………作った？」

「そ、たまたま不良品のコアを弄ってたら暴走して、物理法則を擦曲げちゃうような空間が生まれたの。ただ単に異次元の世界かと思いきや、なんと！」

束は二人の目の前にいくつものモニターを展開して見せた。

「私の開発したIS。そのISの適正值がずば抜ける人が迷い込む空間。その名もISホイホイ！」

「……………」

「……………」

Gが引つ掛かりそうな名前だと二人は思った。

「という訳で君達はISの操縦者としてここに呼び出したの」

「つまり、どこかで死んだ人でISっていうのが使える人がこの空間に生き返って戻ってくるのですか？」

「そ、時々生きたアンモナイトやホホジロザメ、果てには見知らぬ未確認生物や宇宙人がやってきてびっくりしたもん」

簡単に言えば三人がいるのは死んだ後にIS適正值が高ければここに来ることができるらしい。

束の言う通り何度か入ってきたが全て生き物であり人間では無かった。

人間が来たのは今回が初めてだという。

「とりあえず君達はラッキーなことにISを動かせる。始めて人間がやって来たからISを造ってあげるよ」

「そもそもISってなんですか？」

「そつかそつか。異世界から来たからIS知らないんだ、ゴメンね」

二人は束に連れられて空間から彼女のラボへ移動した。ゴチャゴチャと配線が床を這うように並び、所々に資料の山が築かれている。

「ミサトさんの部屋より汚い……」

「ハルトマンさんの部屋より汚い……」

「まあまあ、とりあえずこれ読んで」

束は二人の呟きを気にせず、電話帳並の厚さの本を渡した。

「これは」

「IS学園の入学参考書とISのルールブック。一昔前だからちょっと変わってるかもしれないけどだいたい変わってないから大丈夫かい」

束はラボの奥に入っていた。

数時間後

レンチやペンチを指で振り回しながら束が戻ってきた。

「そっぴや名前聞いてなかったね」

「あ、そっぴでしたね。私は宮藤芳佳です」

「僕は碇シンジです」

「年は？」

「15歳」

「14歳」

「めんどいから二人とも高校生ね、あと生まれた年は？」

「1930年」

「2001年」

「えっ!？」

「えっ」

「えっ？」

三人は互いに顔を見合わせた。

「1930年って80年も前だけど……？」

「2001年って何十年も先の未来ですけど」

「因みに今は2010年だよ。さすが異世界からの人間」

束はうんうんと勝手に納得している。

「とりあえず二人の入学申請しとくね。ちーちゃんに頼めば引き受けてくれるし」

「入学って？」

「ああ、よっちゃんとシンちゃんはIS学園で過ごしてもらってから」

……………。

「「えええっ!?!」」

二人の阿鼻叫喚な声がラボに響いた。

「IS学園で基礎をみっちり学んで活躍してもらうのが当たり前。そのためにもその分厚い参考書を読ませてる訳」

「拒否権は？」

「ある」

「じゃあ拒否します」

芳佳は真っ先に辞退した。

「何でかな？」

「一度死んで生き返ったなら私、元の世界で戦いたいんです。みんなの為にまた戦わなくちゃいけないんです」

「でも、この世界から戻る方法なんて……」

「あるよ」

「じゃあ、早速おねがいし」

「だけど死ぬよ」

束は笑顔から一変し真剣な表情で芳佳に告げた。

「よっちゃんって死んでさっきの空間に来たんだよね？」

「はい、ネウロイに撃たれて……」

「じゃあ生きて帰れないよ」

「どうしてですか!？」

「今、一時的によっちゃんがいた世界は時間が止まってるの。それにその身体はこの世界のために再構築された言わばもう一人の自分さ。だから戻る場合、この身体から魂だけ分離して魂だけ元の世界の自分に戻る。だからほぼヒヤクパーの確率でよっちゃんは死んじゃうの」

「……………どうにかありませんか」

「こればかりは天才の束さんにも難しいなあ……………」

束は珍しくうん、と唸った。絶望した芳佳は膝をついてうなだれた。

「そん……………な」

「あ、でも仲間と過ごすことはできるよ。時間が止まってる時間が長くなるほどよっちゃんを中心に世界がああ空間と繋がってドンドン掃除機みたいに吸い込まれるから」

「でも……………世界が」

「分からない?世界はよっちゃんが戻らない限り動かない。つ・ま・り、よっちゃんが言うえーとネウなんとかも戦うことはない。世界平和が永久に続くんだよ」

芳佳の中では二つの未来が天秤にかけられている。

片方には自分が戻らず、元の世界の時間や争いを止めたままにすること。

もう片方には自分が戻り、仲間や家族、友人の時間を動かすこと。

前者を選べば人々は二度と動かない。また後者を選べばネウロイとの戦いは続く。

どちらにもメリットとデメリットがあり芳佳に苦渋の決断を迫る。

芳佳は決断を下した。

「……………それでも、私は戻ります」
「分かった。じゃあ空間に戻ろう」

「はいじゃ、これ」

「これって……」

「私のストライカーユニット？」

束が両脇に抱えていたのは芳佳のストライカーユニットだ。

「これを基礎によっちゃんのISを作ろうとしたけど……あ、出力がちょっと上がったくらいだから問題ナッシング」

「ありがとうございます」

芳佳はストライカーユニットを受け取り足に装着した。普段通り起動し、魔導エンジンも正常に作動した。

「とにかく速く上へ行けば元の世界に戻れるよ」

「分かりました」

芳佳は終わりの無い天井を見上げた。一旦振り返り二人に頭を下げた。

「シンジさん、束さん、ありがとうございました」

「気をつけてね……」

「バイバイ」

芳佳は出力を最大限に引き上げ、天井へ突き進んだ。下を見下ろすと二人の姿が小さくなっていった。

再び正面を向くと白い空間に黒い霧もやが浮かんでいる。

芳佳は更に出力をあげて霧に突っ込んだ。

「シンちゃんはどうするの?」

「……僕はいいです。戻っても世界は無くなってますから」
「そう、じゃあ早速改造しよう」

シンジはふと気づいた。

芳佳が死ぬ間際まで使っていたストライカーユニットが彼女と一緒にこの世界までやってきた。
そしてシンジは死ぬ間際まで初号機に乗っていた。

「まさか、改造って……」

「かなりおつきくてボロボロだったけど東さんの手にかかれればあっという間に新品のISに！」

「ちょ、ちよつと待ってください！」

「大丈夫！壊さないし、コアも大きいからコピーしてIS用に造るから」

「大丈夫かなあ……」

初号機の運命はいかに。

続く

第壱話 虚無の中のニンジン（後書き）

シンジ「宮藤さん帰っちゃいましたね」

芳佳「そのまま死んで出番終了らしいです……」

束「鬼畜過ぎるねー」

第貳話 改造、そして真実（前書き）

一夏「なかなか出番が無いな」

篤「まさか姉さんがでしゃばっているとか……」

シャル「僕とラウラはいつになるやら」

ラウラ「全くだ」

第貳話 改造、そして真実

「つつつ!!?」

芳佳は突然の激痛に襲われた。束の空間から黒い靄に入った直後、あの撃たれたような痛みが再発した。

「み、宮藤が生き返った!?」

「芳佳ちゃん!」

「っあぁっ……」

力を振り絞って名前を呼ぼうとするが痛みには妨げられ、苦しみの悲鳴が漏れる。

「喋るな宮藤!今すぐ助けてやる!」

「しっかりして、芳佳ちゃん!」

「っう……」

激痛の余り、再び意識は闇の中へ沈んだ。

「そっぴやさつきシンちゃんって帰る世界が無いつて言つてたけどどうしてなのー？」

束は初号機のコアのデータに目を通しながらシンジに尋ねた。コンソールを操作する指は素早く動き一瞬たりとも止まらない。

「僕はそのエヴァ初号機でサードインパクトを起こして世界を滅ぼしたんです。だから誰もいない世界に戻っても意味が無い気が……」

「へー、じゃあいざとなったらサードインパクトを起こせる機能を付けておくね。イメージ的にはビックバンもどきだけど」

「やめてくださいー！」

シンジはコンソールをいじってる束の腕を必死で取り押さえた。

「冗談冗談だつて」

「心臓に悪いですよ」

「にゅふふ」

束はコアのコピーを終えると、初号機に駆け寄って特殊装甲を切り取り始めた。

「こりや固いなあ。どんな作りになってるの？」

「1万2千枚の特殊装甲です」

「わお！さすが巨大なだけあるね。けど束さんがそう簡単に諦めるとでも？」

束はクレーン車を動かして装甲をこじ開けはじめた。メキメキと音を立てて紫色の装甲が剥がされていく。

剥がされた装甲の裏にはべったりと赤黒い液体がこびりついていた。

「ロボットから血？」

「あ、初号機はロボットじゃなくて人造人間なんです」

「へー……人造人間ねえ」

何か悪事が閃いたらしく束は口の端を吊り上げた。

クレーン車から飛び降りて奥から巨大な道具をフォークリフトで運び出した。

「こんなこともあろうかとあつてよかつた手術道具！」

「ま、まさか」

「早速オペスタート！あ、シンちゃんは見ちゃダメ、グロいから」

シンジはクレーン車に吊り下げられ隣の部屋に放り込まれた。

扉を閉めているにも関わらず、グロテスクな効果音が束のラボに響き渡った。

「……………」

芳佳が目を覚ますと見覚えのある天井が見えた。

生きている。

帰って来れた以上に生きていることに喜びを感じた。

意識が喪失する前に感じた激痛は大分引いたがまだ若干痛みは感じる。

芳佳はベッドから起き上がり、部屋から出た。今は夜中。廊下も静まり返っている。

芳佳はフラフラと覚束ない足取りのままハンガーへ向かった。

ハンガーの中央ではシャーリーは整備中の自分のストライカーユニットに寄り掛かって眠っていた。

芳佳は起こさないようにこっそり自分のストライカーユニットにたどり着いた。

束によって改造されたらしいがじっくり見てもよく分からない。

「ん？」

ストライカーユニットの間に小さな四角い板が挟まっていた。芳佳はそっと取り出してみた。どうやらスイッチらしく、真ん中にボタンが付いていた。

そしてボタンには文字が

『よっちゃんへ もしこれを読んでるなら死ぬ確率100%を覆したんだね。もし自分が窮地でも誰かを救いたい、守りたい気持ちになつたら押してねー』

「……」

芳佳はスイッチをポケットにしまった。

翌日

「大丈夫か宮藤？」

「はい」

美緒の話によるとネウロイに撃たれた芳佳は更に追撃を食らい、海に墜落した。

直ぐさまネウロイを牽制しながら芳佳を救い出したがその時には心臓が止まっていた。

ネウロイを倒し基地に亡骸を運ぼうとしていた最中に芳佳は息を吹き返し苦しみ出した。

直ぐに治療を施したのでなんとか一命を取り留めることができた。

「心配かけてすみません、坂本さん」

「いや、私のミスだ。すまん、宮藤」

「そんな、坂本さんがあの時声をかけていなかったら……」

「あの時？」

「囹のネウロイが私を狙ってた時、『宮藤、後ろ！』って」

しかし美緒は首を傾げた。

「あれは私ではないが？」

「えっ？」

「確かに『宮藤、後ろ！』と聞こえたが……」

近くにいたりネットは彼女のことを『芳佳ちゃん』と呼び、ペリー又は『豆狸』と呼ぶ。エイラやバルクホルンは『宮藤』と呼び捨てにするが、声が聞こえるほど近くにはいなかった。

「まさか」

「考えたくないな……」

残る可能性はネウロイの声。
二人にはとても信じられなかった。

初号機の改造は一日で終わらず、夜中も続いた。

初号機から剥いだ特殊装甲は束の手によって瞬く間にISのフレームに形を変えていく。

肩に内蔵されていたプログレッシブナイフも不必要な部分を削ぎ落とし、柄が人間の掌に収まる程度のサイズまで小さくなった。

「凄い……」

「まあね、天才束さんに不可能は無いから」

束は話しながらも絶え間無く工具でISのフレームを組み立てている。しかもリツコのキーボード捌きよりも速く手を動かしている。次の工程が始まったと思えば既に二つ三つ先の工程まで進んでたりもする。

「お腹、空きましたね」

「んー、そうだね」

「何か作りますけど」

「おおー、助かるう！私は好き嫌い無いからなんでもいいよ」

「分かりました、ところでキッチンは何？」

「その赤い扉だよ」

シンジは奥の赤い扉を開いた。

中であつたのはIS。キッチンなど無い。

間違えたのかと思いシンジは隣の青い扉を開いた。またISだ。

「東さん、キッチンは」

「赤い扉の部屋にあるIS」

「……へ？」

「暇だから欠陥品を改造して料理用ISにしてみたんだ。IHクッキングヒーターや大容量の冷蔵庫付きの便利な逸品だよ。まあ、使うのはインスタントのお湯沸かすくらいだけど」

シンジは料理用ISに乗り込んだ。右にあつた盾がスライドしてシンジの目の前に浮かび上がった。

「これでどうやって」

「目の前の盾の形したクッキングヒーターを使ってね。道具とか材料はイメージすれば出てくるよ」

シンジはまず包丁をイメージした。すると右手に包丁が現れた。更にレタスやトマト、ニンジンやひき肉、そして塩胡椒を取り出した。

「流しは？」

「左の盾にあるよ」

クッキングヒーターの上に重なるように右の盾が流しになった。シンジは料理用ISの便利さに感心した。

（これならミサトさんでも料理上達してたかも……いやむしろ悪化してたかな？）

シンジは二人分のサラダとハンバーグを束の横に運んだ。

「できました」

「美味しそう！いただきます」

束は作業を中断して早速ハンバーグを口にした。

「美味しい！」

「よかった」

「いやー、ハンバーグ何年前に食べたんだろ？もう軽く10年は食べてないなあ。篝ちゃんの手料理のハンバーグが最後かな？」

「篝ちゃん？」

「私の妹、かれこれここ数年は連絡すらしてなかったけどIS学園に入るみたいだよ。もしかしたらクラスメートになるかもね」

「どんな人ですか？」

「かわいい妹でちょっとツンツンしてるかな？今はわかんないけど、あ、ハンバーグごちね」

束はあっという間に平らげて直ぐに作業へ戻った。

サイレンが響いた。

「またネウロイか」

「ええ、巨大ネウロイ1機と小型ネウロイ多数。巨大ネウロイは前回よりもずっと小さく、高度12000を保ったまま南東からここへ」

「ここだと？」

美緒はミーナが広げた地図を見直した。確認された地点を直線で結ぶと一端がこの基地とぶつかった。その先は町は無く、小さな村も数個しか見当たらない。

「ウィッチに逆恨みか何かか？」

「ネウロイもここを落とせばって考えたのかしら？」

「いずれにせよ、我々は撃墜するのみだ」

芳佳は部屋からウィッチが飛び立つのを見ていた。病み上がり
を配慮して芳佳は基地で待機することになっていた。

『前より数が多いな……』

『ネウロイも小さいし楽勝だな』

インカムを通して戦場の様子が耳に入ってくる。大音量の爆発音も
数秒遅れてエコーのように微かに聞こえる。

『一体一体は弱いが多いとなると……』

『あーもー、しつこい!』

『大変だ!!!』

「!」

芳佳もその状況が見えた。

巨大ネウロイが基地に向かってスピードを上げていた。

小さいネウロイで引き付け本命の巨大ネウロイを進ませる。前回と似た戦法に嵌まってしまった。

『ダメ、あたしでも間に合わない！』

『ミーナ、行ってくれ！』

『私が行きます！』

芳佳は思わず返事をした。

『お前はまだ病み上がりだ！部屋で待機』

『大丈夫です！もう治りましたから！』

『宮藤！』

芳佳は急いでハンガーに向かい、ストライカーユニットを装着した。束が出力を上げたと言っていたが芳佳にはあまり変化が感じられなかった。

「出現します！」

芳佳はハンガーから発った。

ネウロイはすぐそこまで来ていた。

射程距離内にウィッチーズの基地を見つけたネウロイはレーザーを一斉に放った。

芳佳はネウロイの真っ正面に立った。

「させない！！」

シールドを張ってレーザーを防ぐ。束になって降り注ぐレーザーはいつもに増して威力があった。芳佳も押され気味だ。

「く……うう……」

ネウロイはレーザーを放ったまま更に基地へ接近した。一人では時間稼ぎもできない。

『もし自分が窮地でも誰かを救いたい、守りたい気持ちになったら押してね！』

「あ、あれだ！」

芳佳は束が仕込んだと思うスイッチをポケットから取り出した。

（お願い、束さん！）

芳佳はスイッチを押した。

再び時間が止まった。

続く

第貳話 改造、そして真実（後書き）

レイ「ウィッチーズの活躍はあるのに私達の活躍は0」

アスカ「さつさと出さないよ!」

マリ「気長に待つにゃ」

第参話 初号機VSネウロイ（前書き）

束「シンちゃん、IS乗るにはこんなふうにはISスーツってのが必要なんだよ。まあ、料理ISは必要ないけど」

シンジ「へえ、プラグスーツみたいですね」

束「じゃあ普通とチャイナ服、ナース服、それから」

シンジ「普通ので」

束「あ、着物つてのも」

シンジ「普通のでお願いします」

束「じゃあはだ」

シンジ「これみたいに普通のでお願いします」

束「シンちゃんの意地悪う」

第参話 初号機VSネウロイ

「グッドモーニング、シンちゃん」

「ん……」

作業は日付が変わっても終わらず気づけば昼を過ぎていた。

「完成したよ、シンちゃんのIS」

「本当ですか!」

「うん、これ」

束が差し出したのはISではなく紫色の腕時計。シンジはとりあえず受け取り、腕に着けた。

「これでどうするんですか?」

「普通においでって念じれば出てくるよ」

「分かりました」

シンジはISを呼び出した。

全身が光に包まれ、あっという間に紫色のISアーマーが展開された。所々に初号機の名残があることにシンジは感慨深く感じた。

「名前はあとで自分で付けていいよ。とりあえず基本を——」

ピーピーピー

束のポケットから警報音が鳴り響いた。

「お、早速来たね！シンちゃん行くよ！」

「行くってどこにですか？」

「決まってるでしょ、よっちゃんを助けに」

「……………」

芳佳は巨大なニンジンもどきに隠れている。

束のボタンを押した途端、さっきまでいた白い空間に戻ってきていた。

しかもネウロイと一緒に転移していた。

目標を失ったネウロイは悠々と空間を縦横無尽に動き回っている。

「私一人でなんて……!!」

ネウロイは芳佳の姿を確認するとクジラのように身体を曲げて旋回した。そして芳佳に向かってレーザーを放った。

「きゃあ!!」

芳佳はシールドでまたなんとか受け止めた。しかしその間にもネウロイは芳佳に接近する。

芳佳は隙を見てシールドを消し、ネウロイの上に飛び上がった。上部に組織が剥がれかけ、剥き出しになったコアがあった。

「これで!!」

芳佳は狙いを定めて引き金を引いた。しかし若干ぶれてコアの周りに着弾し、コアには傷一つ無い。

ネウロイは芳佳を突き放すべく速度を上げ、距離を広げていく。

「あと少しなのに……!!」

ネウロイの左翼が切り落とされ、バランスを崩したネウロイは急旋回した。

しかし、芳佳は何もしていない。

「まさか！」

「大丈夫ですか？」

ISに乗ったシンジが芳佳の元へやってきた。彼の手には小型のプログレッシブナイフが握られている。

「あれが宮藤さんの言ってたネウロイ？」

「そうです」

「やっぱりコアとかあるの？」

「はい、ネウロイのてっぺんに宝石みたいなコアがあって」

「わかった、行くよ」

「はい！」

「おー早速やってるね」

束はニンジンもどきの中でシンジのISの稼動データを取っていた。

人造人間から作り出したIS。束にとっても初めての試みだった。全て初号機から作り上げたのではなく、元からあったISのフレームに初号機の装甲や筋肉などを取り込み、一つのISとして完成させた。

— 先ず動いたので束はホッとしている。

「シンちゃん、どうにかなりそう?」

『武器って他に無いんですか? プログレッシブナイフだと接近しないと……』

「あるよー、送るね」

束は武器庫にあった試作品をシンジに転送した。

「これは」

ボジトロンスナイパーライフル

『大出力型陽電子砲、試作品だから微調整はまだ出来てないよ。でもきつとイけるよ』

「ありがとうございます」

シンジはネウロイに陽電子砲を向け、エネルギーをチャージしていく。

しかし、なかなかエネルギーが貯まらない。

「あとどれくらいですか？」

「あと20秒！」

エネルギーを充填してる隙に左翼を回復したネウロイは再び接近してきた。

「あと10秒！」

「危ない！」

芳佳はシンジの前にシールドを張ってネウロイのビームを防いだ。

エネルギーはまだ溜まらない。

「あと5秒!」

「あと少し……」

ネウロイは更にビームを放ち、二人を追い詰める。
そしてようやくチャージが完了した。

「今だ!」

「はい!」

シンジの掛け声と同時に芳佳はシールドを引っ込め、シンジから離れた。

ネウロイのビームと陽電子砲のエネルギー弾がぶつかり合い、眩い光が何もかも掻き消した。

「……」

「……勝ったね」

光が消え、目を開くとネウロイは消えていた。

「凄いです、シンジさん」

「僕じゃないよ、束さんが作ってくれたこのISの……」

目の前に出てきた画面にシンジは固まった。

『ENERGY 0』

「あの、束さん」

『シンちゃん！急いで地面にお———』

束の言葉より先にISアーマーが解け、シンジは元の制服姿になった。浮遊能力を失ったシンジは

「うわあああああー！！」

「シンジさん！」

芳佳は直ぐに墜落しゆくシンジを追い、彼を床スレスレで受け止めた。

「大丈夫ですか？」

「あ、ありがとう」

「ゴメンシンちゃん、初めてだからエネルギーが少なかったね」

ISにはシールドエネルギーというものがあり、シールドバリアーが発動するとこのエネルギーが減る。ポジトロンスナイパーライフルにエネルギーを全て転化して残量が0になってしまったのでシンジのISは解除されてしまった。

「やっぱり改善する必要があるね、フムフム」
「じゃあしばらくはこのプログレッシブナイフで……」
「まあ、なんくるないさ」

再び白い空間。

「じゃあ私、帰りますね」
「あ、気をつけてね。またネウロイで困ったら呼び出していいからね」
「はい、シンジさんもうありがとうございました」
「気をつけて」

芳佳はまた世界へ帰るために飛び立った。

しかし、いつまで飛んでも黒い靄が現れない。振り返るとシンジと束が米粒と同じくらい小さく見える。振り返ったまま、高度を上げて二人の大きさも小さくならない。

「どうして……?」

『あ、でも仲間と過ごすことはできるよ。時間が止まってる時間が長くなるほどよっちゃんを中心に世界があ空間と繋がってドンドン掃除機みたいに吸い込まれるから』

芳佳が元の世界に戻る前、束はこう言っていた。

つまり、他の誰かも芳佳のようにネウロイのいる世界からISのある世界に来てしまった。

『分からない？世界はよっちゃんが戻らない限り動かない。つ・ま・り、よっちゃんが言うえーとネウなんとかも戦うことはない。世界平和が永久に続くんだよ』

芳佳が戻るだけではダメ。すなわち、同じく異世界に渡った人間も戻らなければ世界は動き出さない。

「そんな……………」

芳佳は飛ぶのを止めた。
終わりのない虚空を呆然と見つめるしかなかった。

続く

第参話 初号機VSネウロイ（後書き）

束「早くよっちゃんのストライカーユニットもISに改造したいなあゝ。ISスーツは巫女姿で」

芳佳「あれ、寒気が……」

第肆話 零式VS使徒サキエル（前書き）

芳佳「なんで帰れないんだろう……？」

束「実は私がよっちゃんを帰さないためです」

芳佳「えっ」

束「うつそぴょーん」

芳佳「……………早く帰りたい」

第肆話 零式VS使徒サキエル

ピーピーピー

再び警報音が鳴り響いた。

「ん？今度は誰かな？」

「宮藤さんはまだ飛んでますけど……」

「んー、さっきのネウロイと同じ反応だけど」

絵のように空間がひび割れた。

隙間から巨大な腕が伸び、ひびを更に広げていく。

「使徒だ……」

「わーお、こりゃまた大きい」

ひびの中から出てきたのは使徒、サキエルだ。

「東さん、ISを貸してください!」

「もちろんだよ、シンちゃん!」

東はニンジンもどきの中へ直ぐに戻り腕時計をシンジに投げ渡した。

「初号機、来い!」

芳佳は悪寒を感じた。

振り返ってみると巨大な黒い物体がシンジ達の前にいた。

「まさか、ネウロイ!?!」

芳佳は180度方向転換して、黒い物体に向かった。

背中にあったライフルを手にとり、照準を黒い物体の頭部らしい部分に定めた。引き金を引いた。

「えっ……」

銃弾はオレンジのシールドに阻まれ弾き飛ばされた。黒い物体は振り返り、芳佳を見つけた。

「もういつか……!!」

芳佳はシールドを張った。黒い物体、サキエルの手からレーザーが放たれ芳佳のシールドを弾いた。弾かれた勢いにバランスを崩して真っ逆さまに落下していく。

「宮藤さん！」

「シンジさん」

シンジは地面スレスレで芳佳を捕まえ、そのまま滑空するようにサキエルから離れた。

「あれは僕達の世界の敵、使徒だ」

「使徒？」

「宮藤さんの銃じゃATフィールドは破れない、この初号機のATフィールドと中和させないと効かないんだ」

「え、じゃあ」

「ここで待ってて」

シンジは芳佳を降ろすと直ぐに使徒へ突撃していった。

「……………」

「お困りのようだね」

振り返るとニンジンもどきが芳佳の真後ろに移動していた。

「さっきシンちゃんが使ってた陽電子砲使う？」

「それで、ATフィールドを破れるんですか」

「十中八九の割合で可能だよ」

ニンジンもどきから出た束は蒼い腕輪を芳佳に渡した。

「とりあえず仮のIS、これさえあれば撃てるよ」

「ありがとうございます！」

芳佳は腕に装着した。

「IS呼ぶときの名前は適当でいいよ」

「分かりました」

芳佳は腕輪に手を合わせ、ISを呼んだ。

「お願い、零式」

「っう……！！」

シンジは追い詰められていた。

初号機のシールドエネルギーは2割しか残っていない。しかも、ATフィールドをシールドバリアーの出る前に張らなければシールドエネルギーを無駄に消費してしまう。ATフィールドの中和を何度か試みたがサキエルは待ってくれない。腕からレーザーを放ち、逆に破られそうになる。

「やっぱり無理か……………なら」

シンジは決心し、サキエルの懐へ突っ込んだ。再びATフィールドがぶつかり合う。サキエルも両腕からレーザーを放ち、シンジを落とそうとする。

しかし、シンジは止めない。

「ATフィールド、全開っ!!」

更にATフィールドを広げ、中和が進行していく。

ATフィールドが歪んだ。

シンジはすかさず歪みにプログレッシブナイフを突き立て切り裂いた。

「貰った!!」

シンジはレーザーを乗り越え、真つすぐ紅く輝くコアを狙った。プログレッシブナイフを両手で握りしめ、コアに突き刺した。

「ああああああああ!!」

コアに亀裂が走り、更に裂けていく。
サキエルは奇声を上げてシンジを取り払おうと手で振り払った。

「っ!!」

コア破壊に集中していたシンジはATフィールドを張れず、シールドバリアーも貫通し、しかし絶対防御で守られた。しかし、エネルギーが切れ、ISが強制解除され地面に落ちた。

あと少しだったのに。
シンジは歯噛みした。

サキエルは地面に落ちたシンジを踏み潰そうと、脚を上げた。

「もう、終わりだ……」

シンジは死を覚悟した。

サキエルの脚は吹き飛び、シンジの真横に落ちた。
砲撃が何かで丸く切り抜かれたような跡が残っていた。

「!？」

銃弾の軌道を辿るとIS『零式』を装着した芳佳が陽電子砲を構えていた。

『大丈夫ですか？』

「ありがとう、宮藤さん」

『とりあえず離れてください、コアを狙いますから』

シンジは急ぎ足で再生中のサキエルから離れた。

芳佳はスコープを覗いてサキエルのコアに狙いを絞った。

「これで決める！」

引き金を引いた。

しかし、軌道が反れてサキエルの左腕を落とした。
照準があつた瞬間、僅かにぶれてしまった。

「今度こそ……！？」

シールドエネルギーの残量を知らせるウィンドウが出てきた。残るシールドエネルギーを全て転化しても撃つことはできるがせいぜいATフィールドを破るまでだ。

「そんな……あと少しなのに!!」

一旦引き返しシールドエネルギーを補給を考えたが、使徒の再生能力で回復してしまう。

だが、今撃ちたくても撃てない。

「こっとなったら!!」

芳佳はISを加速させ、ネウロイに接近した。

ATフィールドにぶつかり、零距离から撃つ。ATフィールドさえ突破すればコアに残したプログレッシブナイフで倒せる。

「いつけえー!!」

あと100、70、50、20、10、5。

「今だ!!」

芳佳はエネルギーを全て陽電子砲に転換し、撃った。

陽電子砲から放たれた攻撃はサキエルのコアを完全に破壊した。そしてサキエルは爆発して、完全に消えた。
芳佳は絶対防御に守られ、爆風から無傷で抜け出した。

「あれ？」

芳佳は表示された残量に首を傾げた。シールドエネルギーは減るところかむしろ増えていた。

『よっちゃんスゴイ!!』

「え、何がですか？」

『まさか自分から単一仕様能力を開発するなんて……天才の束さん
もびっくり!
り!』

「ワンオフアビリティ？」

ワンオフアビリティーとは簡単に言えば、ISの固有能力。普通なら第二形態で発動する。

「でも、私のはまだ第二形態までになってないと思うんですけど……」

『いや、どうやらよっちゃんのISは履いてたプロペラとの融合で
セカンドシフト
第二形態移行して、今の状態だったみたい』

束が最初に手渡したISは開発中の第四世代のプロトタイプであり、まだ完全ではなかった。しかし、ストライカーユニットとの融合でセカンドシフトを経てようやく完成した。

『じゃあとりあえず、ちょっと戻ってきてよ』

再び束のラボ

「やっぱりね」

「どうしたんですか？」

「ちょっと見る？」

束は立方体の部屋が映っているウィンドウを見せた。
サーモグラフィーのように青い部分や赤い部分もある。

「あの空間は長年の使用と老朽化、更に激しい戦闘でもうボロボロなの。ほら、この赤いのがそう」

全体を見回してみたが赤い部分が大半を占めており、青い部分がほとんど無い。

「ちょっと直さないと難しいけど直るかも分からないなあ……偶然の産物だから」

「そんな……どうにかできませんか？」

「確率は低いけどやってみるよ」

「お願いしますー!!」

芳佳は深々と頭を下げた。

その夜

シンジと芳佳は疲れ果てて眠っていた。束は眠らず空間の修復作業を続けていた。

「やっぱり悔しいけどダメだな……はあ」

スパナを放り投げ、コッソンと束の携帯にあたった。そのままI.S.学園の資料の山にぶつかり、崩した。

束は携帯電話を取って電話をかけた。

「もすもすひねもす、ちーちゃん？」

『束か、久しぶりだな』

「久しぶり〜！どう？彼氏出来た？」

『用が無いなら切るぞ』

「ああ待つて！ちゃんと用はあるから！」

束は必死につなぎ止めた。

『で、なんだ？』

「IS学園に二人分の枠確保できる？」

『箒の分か？』

何故か愛おしい妹を忘れていた。
すぐに三人と訂正した。

『箒の他に誰がいる？』

「なんか異世界から来たシンちゃんこと碇シンジ君とよっちゃん」と宮藤芳佳ちゃん」

『異世界か……』

千冬は興味深そうに呟いた。

「どうしたの？」

『いや、こっちにも異世界から来たと言う奴がいてな』

「誰だれ？もしかしたら知り合いかな？」

『名前は……綾波レイと坂本美緒だ』

続く

第肆話 零式VS使徒サキエル（後書き）

束「さあ、ちーちゃんの出番だよ！」

芳佳「感想待ってます」

第伍話 三人の大和撫子（前書き）

レイ「……………」

美緒「……………」

レイ「貴方、何故下は下着……水着なの？」

美緒「お前こそ何故全裸だ」

レイ「……………あ」

美緒「気付いてなかったのか」

レイ「これが普通だったから」

美緒「……………普通か？」

第五話 三人の大和撫子

IS学園

応接間

テーブルの両側には二人掛けの革のソファが並べられ、レイと美緒はそれぞれ向き合うように座っていた。

二人は言葉も何も口にせず、出されたお茶菓子にも手をつけていない。

「貴方は誰？」

レイは先に沈黙を破った。

「私が先に質問したはずだ」

「先に名乗るのは侍の常識じゃないの」

「私は侍ではない、扶桑皇国のウィッチだ」

「ウィッチ……魔女？」

「ああ」

「毒林檎作るの？」

「お前は何を想像している……」

美緒はやれやれとこめかみを押さえたため息をついた。

「ウィッチとはな、ネウロイに対抗できる唯一の手段だ」

「ネウロイ？」

「ネウロイは人類の敵、我々が倒すべき相手だ」
「使徒みたいね」

レイは出されたコーヒーを一口啜った。美緒も湯呑みのお茶を飲んだ。

「使徒？キリストの弟子か？」

「いいえ、ネウロイと同じく人類の敵。私達はエヴァに乗って使徒を倒すチルドレンなの」

「ほほお、凄いな」

「そうかもね、実際乗れるのは14歳の人間だけだから……」

お茶を飲み干した美緒は自分で急須に茶葉を入れ、お湯を注いだ。

「ところで」

「何だ？」

「貴方の名前は？」
「……………」

最初の話題が戻ってきた。

コンコン

応接間に黒いスーツを着た女性がやってきた。

「どうだ、大分落ち着いたか？」

二人ははいと頷く。

女性は一人掛けの革のソファに腰掛けた。

「私は織斑千冬。このIS学園の教師だ」

「私は坂本美緒、扶桑海軍のウィッチ……………いわゆる軍人だ」

「私は綾波レイ。エヴァンゲリオン零号機のファーストチルドレンよ」

「ウィッチ……………エヴァンゲリオン……………初めて聞いたな」

「どうやら私が住んでいた世界とは異なるようだ」

美緒は壁に掛けられたカレンダーを指した。

2010年12月

「私が最後に見たのは1944年の6月だ」

「私は2015年7月よ」

「なるほどな。二人が嘘を言ってるようには思えない」

だが、と千冬は付け加えた。

「その世界に帰る手立てはあるのか？」

「ないな」

「ないわ」

二人は即答した。

千冬はやれやれと呟きながら手にあつた資料を渡した。

「それならこのIS学園に入学するのはどうだ？」

「ふむ」

「……………」

手渡された資料をパラパラとめくり中に目を通した。

「このISというのは？」

「そうか、二人は知らないんだっとな」

「この世界の常識？」

「まあ、そうだな」

インフィニット・ストラトス
通称『IS』

ISは本来なら、宇宙空間での活動を目的として作られたマルチフォーム・スーツ。しかし、宇宙進出へは至らずスペックを持て余した機械は『兵器』となり、いつの間にか『スポーツ』へ変化した。

どういう理由かは不明だが男は使えない。だが、女性である二人にはそれほど関係無い。

そしてIS学園はISの操縦者育成を目的とした教育機関である。

「IS学園に入学している間はこの機関の介入も無い。つまりここにいる間に国籍の取得さえすればこの世界での活動もグッと楽になるはずだ」

「ふむ、そうか」

「いいわ、私は」

レイは資料を投げ捨てるように机に置いた。

「いいのか？ここを出ると警察に捕まるぞ」

二人は今現在、異世界から来たので国籍は無い。元々日本人なので疑われる可能性は低いが一度知れ渡れば不法入国で捕まってしまう可能性もある。

「構わないわ。元々私は死んでる。それに今更この世界で生きる意味も無い」

「ならこの新しい世界で生きろ」

「嫌よ」

頑なにレイは断った。

美緒は机の資料を無理矢理レイに押し付けた。レイは嫌と言わんばかりに押し戻す。

二人の押し問答が続き、千冬も我慢できなくなり机を拳で叩いた。

「いい加減にしろ」

「すまない……」

「ごめんなさい……」

「全く……ならこうしよう」

千冬はある案件を提示した。

今度行われるIS学園の入学試験ではISを操縦し、試験官と一対一で戦う試験がある。

その試験はただISの操縦技術を見るものなので勝敗は関係無い。

しかし、例年では試験官に勝つことはほとんど無い。専用機持ちでも難関だと言われてる。

その試験で勝つことが出来れば入学しなくても良い、と千冬は条件を示した。

「どうだ？今からでも訓練を詰めば出来ないことも無いぞ」
「……………」

レイはしばらく悩み、

「……………いいわ、引き受けるわ」
「頑張るんだな」

「それと綾波、坂本。お前らは何歳だ？」

「14歳」

「19歳だ」

「……………まあ、どうにかなるだろ」

千冬はレイの年齢欄に15歳、美緒には22歳と書き込んだ。

美緒は千冬の手を掴み、ペンの動きを止めた。

「ちょっと待って」

「なんだ？」

「私は19歳だ」

「分かってる」

千冬は更にボールペンを進めようとした。再び美緒は千冬の手を止めた。

「何故22歳と書いた」

「教師になるも生徒になるも中途半端な年齢だ。それにお前は教わるより教えるのが似合っていると思う」

「む……………」

美緒は芳佳達を鍛えたり、海軍教練所で教官を務めていたこともある。

しかしそれはウィッチや軍に関することで、ISの知識は皆無だ。

「だいたい二、三ヶ月で基礎全部と応用の一部は覚えられる筈だ。やってみないか？」

「……そこまで言うならやってやろう」

「じゃあ22歳だな」

「……せめて21か20にしてくれ」

千冬は21歳と修正した。

翌日

「どうだ、よく眠れたか？」

「はい」

「ああ」

二人はしばらくIS学園の学生寮に泊まることになった。
衣服もIS学園の制服を借りている。

「早速行くぞ」

「どこにですか」

「ついて来い、ISを見せてやる」

千冬は二人を連れ、アリーナへ移動した。

アリーナの格納庫にはISが一台置かれていた。

「これから早速テストを兼ねてISを起動してもらおう。先に
私が」

いきなりレイは名乗り出た。

しかし千冬は軽く頷き、ISスーツを渡した。

レイはISスーツ広げてサイズを確認した。ピッタリ合う。

「早速このスーツに着替えろ」

「着ました」

「早いな、早速乗ってみろ」

「はい」

レイは量産型IS『打鉄』に乗り込んだ。

その瞬間、レイは以前と似たような感覚に包まれた。彼女に合わせるようにセンサーの値も切り替わっていく。

「どうした？」

「……どこか、懐かしく感じる」

「綾波は初乗りだった筈だが？」

「はい、でも……」

「だが、ゆかしく感じるのもほどにな」

レイはコクリと頷き、ビットゲートへ移動した。
ゲートが開くと同時に、レイは静かにゆっくりとステージへ向かった。

「試しに自由に動いてみる」

「はい」

レイはエヴァを操縦するように前へ動いた。

右へ左へ旋回。

アリーナの天井まで上昇、そしてステージへ下降。
何もかも初めてなのにレイは難無く熟した。

「初めての割には動きが滑らかだな」

「ありがとうございます」

「次は武器を出してみろ」

レイは展開可能な近接ブレードを呼び出した。

光の粒子がブレードの形を作り、そして1・6mほどの刀が現れた。

「それで相手を斬ってみろ」

「相手………?」

レイはアリーナを見回すが彼女以外誰もいない。
すると向こうのゲートから一人の女性が現れた。

「はじめまして」

「貴方は？」

赤い髪の女性は優しい笑顔で名乗った。

「私はミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ。よろしくね、綾波さん」

続く

第伍話 三人の大和撫子（後書き）

レイの前に現れたミーナ

再開を心から喜ぶ二人

しかし、イレギュラーの侵入で三人に試練が課される

果たして彼女らはISで侵入者を倒せるのか？

次回『初陣』

この次もサービスサービスウ！

シンジ「そっぴゃミサトさん、出るのかな？」

第陸話 1stバトル（前書き）

束「プロローグはこれでおわり」

シンジ「長すぎです……」

第陸話 1stバトル

「ミーナだと!？」

美緒は思わず叫んでいた。

「知り合いか？」

「ああ、私の仲間……家族でもあるな」

「そうか、彼女は同じく異世界からやって来たと言っていたな」

「私も不慣れだけど前の世界で似たようなものに乗ってたから変な失敗は無いわ」

「私も」

ミーナは武器リストからライフルを取り出し、直ぐに構えた。

お互いに頷き、用意ができたことを確認した。

「綾波レイ、行きます！」

「さあ、来なさい！」

レイはミーナとの距離を詰め、ブレードを振り上げた。振り下ろす直前にミーナが消えた。

しかしレイは狼狽^{うづた}えない。

一気に空へ高度を引き上げ、ミーナの銃撃から回避した。

「初めてなのに上手いわね」

「……………」

レイはミーナの褒め言葉を無視してその隙にミーナに急接近した。ミーナの前にシールドバリアーが現れ、ブレードを受け止めた。

「隙だらけよ！」

「！」

レイはミーナから離れたが銃弾が何発かシールドに当たった。
互いにシールドエネルギーを減らされた。

「中々やるわね」

「貴方こそ」

そして再びブレードとライフルがぶつかり合う。

ミーナはブレードを受け止めたライフルで押し返し、その勢いで銃口をレイに向け引き金を引く。
防御体勢を構えレイは辛うじて銃弾の雨から逃れた。

しかし、ミーナは止まらず更に追撃を仕掛けていく。

二人はISを動かしたことは無いが徹底的な違いがある。
ミーナは長年戦闘訓練を受けた軍人であり、レイはまだエヴァに乗って二、三年程度かそれ以下だ。

二人の経験の差は圧倒的だ。

レイは劣勢ながらも焦りを見せない。

ブレードを縦横無尽に振り、銃弾を弾きながら突っ込んだ。

「
……」
「
……」

二人はあと息を吐いた。

二人の前に出てるウィンドウを互に見返す。

『ENERGY:0』
『ENERGY:0』

「引き分けね」

「ええ」

レイのブレードはミーナの右肩の装甲を、ミーナのライフルはレイの左肩の装甲を突いていた。

しかも、両者同時だ。

二人は地面に降り、ISから降りた。

「いい勝負だったわ」

「……………」

レイはミーナと握手した。
微かにレイは笑っていた。

「美緒！」

「ミーナ！！」

二人は再開を喜び互いに抱き合った。

「まさかミーナまで来るとはな」

「貴方こそ、どうしてここに？」

「よく分らんが宮藤からの通信が途切れた直後、何かに包まれてこのIS学園に来ていた訳だ」

「……じゃあまさか」

美緒は険しい顔つきで頷く。

「宮藤とネウロイを中心に何かあったのだろう」

「つまり、宮藤さんもここに来てる可能性は」

「十分あるだろう」

「……………宮藤？」

二人の会話に千冬が反応した。

どこかで聞き覚えのある名前だ。

「坂本、そいつは宮藤芳佳と言っか？」

「ああ……知ってるのか！？」

「そうか……やはりな」

千冬は昨日の出来事を話した。

千冬の携帯に懐かしい旧友から電話が来た。

朗らかな旧友はいきなり入学枠三人分開けてくれと頼んできた。

千冬は無論断った。更にどすの効いた声で旧友を責め立てようとした。

『裏口入学させるとはいいい度胸だな』

『ちーちゃんならなんとかできるでしょ？むしろ私が試験官を務めれば』

『証拠隠滅に記録改竄か。ますます許せないな』

その後旧友は引き下がらず粘ったが結局敗北を喫した。

ふと千冬は気付いた。

旧友には一人妹がいた。しかし、要求したのは三人分。

『お前の妹だけでなく、誰がいるんだ？』

『なんか異世界から来たシンちゃんこと碇シンジ君とよっちゃんこと宮藤芳佳ちゃんの二人分。せつかく専用機も開発しちゃったから入学できないかなって』

二人は確信した。
宮藤芳佳はこの世界にいる。

「間違いないわね」

「ああ」

「碇君もまさか……」

レイも目を丸くした。

「知り合いか？」

「私の……大切な人です」

「そうか」

「ところで、宮藤さんは今どこに？」

ミーナはチラリとアリーナを見渡したが人気は無い。
千冬は申し訳なさそうに頬をかいた。

「その旧友が今面倒を見ているが旧友はある事情で隠居して転々と移動している。おそらく入学試験までには現れると思うが、それまでは誰にも見つからない場所にいるだろう」

「早く会いたいです」

「私もだ」

「後で電話できたらしてやる。とりあえず坂本のテストを済ませるでしょう」

今度はレイが美緒の練習相手となった。

「よろしくお願いします」

「ああ、頼むぞ」

二人は互いにブレードを手に取り、距離を置いた。
一気に加速して、二人はぶつかり合った。

しかし、二人の距離はブレードがぶつかるまで接近していない。だが何か打つ手応えを感じた。

「!？」

「なんだ？」

ブレードを受け止めていたのは二本の触手を鞭のように扱う紅い使徒。

「シャムシエル……！！」

「なんだこいつは！！」

『綾波、坂本！練習は中止だ！今すぐ戻れ！！』

「こいつの処理はどうするんだ？」

『後は教師に』

「任せられません」

レイはきっぱり断り、ブレードを振りかざした。

「あれは使徒。通常の兵器は効かないわ」

『だがISは世界の戦力を凌駕するものだ、嘗められては』
「そうかしら？」

ブレードをしまい、ミーナと同じライフルを取りだして構え直す。

そして、引き金を引いた。

銃弾が謎のシールドに弾かれた。

「通常兵器は無効、使徒のA Tフィールドを中和しながら攻撃しなければ効かないわ」

『綾波、お前はフィールドの中和というものはできるんだな』

「はい」

『だが、怪我を負わせる訳にはいかない。一旦戻れ』

「大丈夫です」

千冬はレイを止めようと声をかけようとしたが躊躇い、しばらく黙った。

しかし、口元を緩め、千冬は二人に告げた。

『行つてこい、綾波、坂本!』

「ありがとうございます」

「全く、しょうがないやつだな」

「さて、どうする？」

「あのコアを破壊すればいいわ」

カタカタと触手の骸骨のような動きの中に紅いコアが見えた。

「作戦はどういく？」

「作戦はこうよ」

まず美緒を背負ったままレイが使徒に突っ込み、ATフィールドを相殺して懷に突入する。

しかし厄介なのは二本の鞭。あの鞭がISのシールドバリアーを耐えるか分らない。

だがシャムシエルが懷に伸ばす可能性は低く、追撃されてもレイがATフィールドで受け止めればなんとかなる。

「行くわよ」

「ああ！！」

レイは美緒を背負ってシャムシエルへ突っ込んだ。
案の定、シャムシエルは鞭を伸ばし二人を足止めしようとする。
美緒の推進力とコントロールで複雑な鞭の合間を縫うようにシャムシエルへ進む。

「今だ！」

レイはブレードを振り上げ、ATフィールドにたたき付ける。

「ATフィールド全開！！」

ATフィールドは徐々に歪み、溶けたプラスチックのように曲がっていく。

抗うようにシャムシエルは鞭を両側から二人にたたき付ける。

「させるか！！」

美緒は自分のシールドを後ろに展開して鞭を受け止めた。
そして、レイはATフィールドを突破した。そのまま骨の中のコアへ突っ込んでいく。

「今よ！」

「ああ！！！」

直ぐさまシールドを引っ込めブレードを振り上げる。

しかし、美緒はミスをした。

今持っているのはただのブレード。美緒がいつも持っている烈風丸ではない。

だが美緒は真・烈風斬の構えを取った。

「真・烈風斬ッ！！！！」

美緒はブレードに力を宿し、コアを叩き斬った。

「よかった」

「全く……ヒヤヒヤさせるな」

千冬とミーナは使徒が消滅したことをモニタールームからも確認した。

真・烈風斬は莫大な魔力を消費する。魔力が衰えた美緒には到底できない筈だ。

しかし、シールドエネルギーを転換して残りほんの少しだけ美緒の魔力を使い真・烈風斬を放つことができた。

「訓練も終わりよ、すぐに戻って来て」

「はい」

「分かった」

「どうですか、いいデータが取れました？」

「ああ、かなりの結果が取れたぞ」

千冬は満足げに頷いた。

「しばらく訓練を続ければ飛躍的な進化を遂げるな」

「そう、よかったわ」

こうして、早くもミーナと美緒はIS学園の教員、レイはIS学園の生徒となった。

そしてこの二ヶ月後。

世界を震撼させる事件が起こるとは誰も予想だにしなかった。

第陸話 1stバトル（後書き）

一夏「次回から漸く登場できる……」

第「長かったな」

レイ「貴方は次回はまだ出番無いわ」

第「早く出たい……」

第漆話 入学試験（前書き）

美緒「さ、待ちに待った入学試験だ。はっはっはっ」

レイ（はっはっはっがうるさい……）

第漆話 入学試験

2011年2月半ば

今日は日本全体で高校入試が行われる。無論、IS学園も例外ではない。

教員訓練を僅か2ヶ月でこなしたミーナと美緒は千冬から入試について説明を受けていた。

「今日は入試だ。だがあくまで見るのは技術と操作とかそういう類で勝ち負けは全く考えない」

「うむ」

「坂本先生は山田先生と同じく実技を見る。私とミーナ先生は他の業務をこなす」

「分かった」

「了解」

千冬はちらつと壁の時計を見た。彼女の弟も高校入試に向かっていく頃だ。

そっと千冬は心の中で成功を祈った。

「もすもすひねもす、ちーちゃん？」

『正々堂々と来たな』

電話の向こうで千冬はやれやれとため息を吐いた。

束は試験会場に止めてある搬送用のトラックの荷台から電話をかけている。元々このトラックも束が潜入するためにカモフラージュしたものだ。

「とりあえずシンちゃんによつちゃんを送りに来たよ」

『二人は今どこだ？』

「多分入口にいると思うよ。地図も渡したし大じ」

『馬鹿か貴様？』

束ははて？と首を傾げる。キレる寸前の千冬はどすをきかせて束に尋ねた。

『碇は男だろ？』

「見方によつては女の子っぽいかも」

『どちらにせよ、ISの試験会場に男子が来たらどうなる？』

「モテモテのハーレム？」

『馬鹿者、混乱が起きるだろ』

束は事の重大さに気付かず、「おおーなるほど」と感心した。

『碇と連絡が取れるなら今すぐ試験会場の裏に回れと言え』
「んー、了解」

束は電話を切ってポケットにしまった。
しかしシンジに連絡を取ろうとせず、私事を優先してモニターをいくつも展開させた。

「ま、今年から男子はシンちゃんだけじゃないよ」

「迷った……」

「どっしり……」

芳佳とシンジは試験会場に入ったが迷っていた。他の人間どころか階段やドアが無くただ長い廊下が続いている。

「入口に戻るも大変だ……」

「とりあえず２階に上がれば……！」

やっと一つのドアを見つけた。芳佳は直ぐさまドアを開け放った。

中には椅子とイス、イススーツがおかれていた。どうやら正解のようだ。

「あなたは受験者ですか？」

「は、はい」

「でも君は……」

シンジは男だ。この試験会場にいること自体間違っている。例えば添人だと詐つても怪しまれてしまう。

しかし、試験官は掌握していたかのようにシンジにプリントを渡した。

「あなたは碇シンジさんですね」

「あ、はい」

「この紙を持って地下アリーナへ行ってください」

「わ、分かりました」

シンジは手渡されたプリントを見ながら地下アリーナへ向かった。
行きとは違ってすんなりとアリーナへ到着した。早速扉を開けて中へ入った。

中ではミーナが待ち構えていた。

「貴方が碇シンジさんね」

「あ、はい」

「世界で唯一ISを操縦できる男子になりに来たの？」

「い、いえ。そんなつもりじゃ……」

「冗談よ」

ミーナはくすつと笑った。

「貴方の噂はまだ外部には漏洩してない、それに筋がいいらしいと聞いているわ」

「？」

「さて、時間も押してるから始めましょうか」

第二アリーナ

レイの試験は既に始まっていた。

「そういえばあの時イレギュラーに邪魔されて決着はつかかなかったな」

「ここで雌雄を決するの？」

「いや、公私の場くらい弁えるさ」

「そう」

レイはブレードを横薙ぎに払い、胴体を狙う。美緒はブレードで受け止め押し返した。その勢いを利用してレイの懷に飛び込んだ。

「はあっ！！」

「っ！！」

シールドを展開してシールドエネルギーを大幅に削がれた。流石にレイも焦りを感じた。勝敗は関係無いがやはり負けるのは嫌だ。

「こうなったら！」
「ほっ」

レイは一旦美緒離れブレードを肩に担いだ。そして、天井ギリギリまで上昇、そして一気に急降下を始めた。

「なるほど、最後に特攻か。だが甘い！」

美緒は上を見上げ、レイが迫るのをただ待つ。そして、背中に触れるくらいブレードを振り上げ、

「烈風斬！！」

「隙あり！」

レイは美緒のブレードの範囲外ギリギリ止まり、フワッと上昇した。烈風斬を外した美緒はそのままブレードが下へ振り下ろされ、背中が完全な無防備になった。

「なっ！」

「油断大敵よ」

更に下降しレイは思い切りブレードを美緒の背中へたたき付けた。

レイのブレードは美緒の背中 of 装甲に食い込んでいた。

「やるな」

「……………」

「だが、甘かったな」

美緒は上下逆さまになりながら辛うじてレイの脚の装甲にブレードを当てていた。

振り下ろした勢いでそのままブレードを一回転するように美緒ごと回って下から振り上げるような形だ。

レイのシールドエネルギーは0、これで美緒の勝ちが決まった。

「なかなか策士な奴だな、気に入ったぞ」

「はぁ……………」

レイはやれやれとめんどくさそうにため息をついた。

彼女が勝てば自由にできると千冬と約束した。が見事敗北したので
IS学園に入学することが確定した。

「どうした、そんなに嫌なのか？」

「いいえ……ただ」

「逃げてばかりじゃダメですよ」

「ははははい！」

真耶は笑顔でしかし容赦無く攻める。芳佳は距離を取って逃げるのが関の山だった。

手にはポジترونライフルがあるが狙いを定める前に真耶がマシンガンを撃ち、シールドエネルギーを減らされてしまう。繰り返ししているうちに一発撃てるかどうかまで減少していた。

ポジترونライフルを捨て、剣に変える方法もあるがそれほど剣の扱いに長けていない。

しかし芳佳はポジترونライフルを収め、剣に交換した。

「剣……ブレードですか」

「これで、決めます！」

芳佳は意を決して、真耶へ向かって急加速した。面食らった真耶は一瞬気を許してしまった。

「それっ!!」

芳佳は力を込め、剣を振るった。

剣を振るったが真耶は横に移動して回避するが、芳佳は止まらない。急加速で勢いがついたまま芳佳は地面にぶつかり、二、三回地面にたたき付けられ終いには壁に激突してしまった。

これで全てのシールドエネルギーを消費してしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

「……ダメだった」

「あまり加速し過ぎも危険ですからね」

「はい……」

午後三時

既に日は傾き夕焼け色に染まっていた。ほとんどのIS学園の入学試験は終了し、千冬達も少しずつ撤収の準備を進めていた。資料をまとめていた千冬は深いため息を漏らした。

「やれやれ……」

「どうした？」

「……今日は疲れたな」

「そうだな、だがこれで一安心だな」

千冬は敢えて話題を逸らした。
しかしまたため息が漏れた。

「何か心配事か？」

「ああ……私の弟も受験生でな」

「ほう、その結果が気になると？」

「いや、あいつが何かしていかないか心配なだけだ」

「問題児なのか？」

「いや、素行は真面目だ。だがまあ……馬鹿だな」

その頃千冬の言う馬鹿こと一夏は

「……迷った」

アリーナの廊下で迷っていた。

彼は藍越学園の入学試験を受けるために向かっていたが迷ってしまい、アリーナにいた。

しかし、彼はIS学園の試験会場だということに気づいていない。必死で本来の試験会場へ行く2階への階段を探している。

だが、階段が見当たらない。

「どこだよ……………」！

一夏はやっと入口らしきドアを見つけた。

入ると試験官の先生が撤収準備を進めていた。先生は一夏を見ずに彼に言った。

「あー君受験生？なら向こうで着替えて、時間押してるから急いでね」

「？」

一夏は何故着替える？と首を傾げた。しかし、昨年のカンニングを受けての対策だと納得した。
そしてカーテンを開け

「まさか倒されるなんて……」

真耶は武装のメンテナンスをしながら先程の出来事を振り返った。

イギリス代表候補生、ドイツ代表候補生の二連戦で二連敗してしまった。元日本代表候補生の真耶と拮抗、又は圧倒され勝ちを許して

しまった。

少し悔しく感じたが逆に微笑ましくも感じた。

ふと時計を見ると4時まであと少し。そろそろ終了時間だった。すると向こうの受験生が出入りするゲートが開いた。

「こ、こんにちは」

「えっ……………」

真耶は信じられなかった。

ISは女子しか操縦できない、男子は反応すらない。

なのに、目の前にはISを纏った男子、一夏が立っていた。

「よろしくお願いします」

「ははい…」

真耶は先程の芳佳のようにパニックになり、メンテナンスを終えたマシンガンを取りこぼしてしまった。
急いで広い直して、一夏に狙いを定めた。

しかし、一夏は持っていたブレードで一氣に接近してきた。

「ええええええええええ！？」

真耶のパニックは最高潮に達していた。

真耶は一夏のブレードを右に移動し回避した。

しかし、勢いよく加速して回避してしまい真耶は壁に激突した。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

「うっ……」

真耶は目を回して気絶してしまった。

壁にぶつかった音を聞いて他の試験官もアリーナにやってきた。

「山田先生!？」

「大丈夫ですか!？」

「今すぐ救護班を!」

最初は真耶を心配する声が多かった。しかし、やがて一夏に対する声が増え出した。

「ねえ……あれ」

「嘘でしょ……」

「ありえへん……」

「男がISを操れるなんて……」

史上初のISを操れる男子が一人も現れたことは全世界に知れ渡った。

続く

第漆話 入学試験（後書き）

ミナ「最初の試験官って誰かしら？」

シンジ「分かりません……」

束「感想待ってるよ」

第捌話 集結する少年少女（前書き）

束「前回の話で「レイはATフィールドを使えるのになぜ使わないのか」って質問があったんだ。そこで束さんが特別に説明してあげよう！」

タスクA 碇シンジ

シンジやアスカなどは自分でATフィールドを展開できない。ISに移植したエヴァのコアに搭乗者の心に反応して使える、いわゆる絶対防御に値する。使徒戦やネウロイ戦など本格戦闘でのみ使える。

タスクB 綾波レイ

レイやカヲルなどはシンジ達とは違い自身でATフィールドを展開でき、通常戦闘でも利用できる。しかしあまりにも有利なので自身に歯止めを効かせて極力使わないようにしている。

タスクC 宮藤芳佳

芳佳達ウィッチのシールドもレイ達同様に自身で展開できる。同じように優位になってしまっているので頻繁には使わない。

特にエリーカとバルクホルンはISに乗ってから一度もウィッチのシールドを使ったことが無い。

束「つまり、自制心があって更に危険じゃないからATなんちゃら

とかは使わないの。ここがポイント!」

千冬「では、本編が始まるぞ」

束「今回はちょっと短いよ」

第捌話 集結する少年少女

その日、世界恐慌や大規模テロと肩を並べるくらい震撼させるニュースが全世界に報じられた。

『日本から男子IS操縦者が二人も登場!!』

『史上初の男子操縦者！一体何故!?』

『イケメンIS操縦者誕生!』

新聞やテレビでも一夏とシンジに対する記事ばかりだ。

ISを操縦できる男子は前例が無い。世界各国も喉から手が出るほど欲しい。

更にシンジが国籍を取得していないと噂が流れ、一時パニックとなった。しかしシンジ自身も知らぬ間に日本国籍が取得され、IS学園へ入学手続きを済ませていた。

IS学園在籍中はいかなる機関からの介入を受けないので国々も手を出せなくなった。

だが、一夏はまだ済ませていなかった。直ぐさま世界各国は専門家を派遣し一夏を手に入れる準備を既に実行していた。

そしてその頃一夏は

「……………」

家に引きこもっていた。

一歩でも家から出れば報道陣からの質問の波が押し寄せる。窓から姿を覗かせるとフラッシュが瞬き、夜中でも昼間のように明るくなる。手続きをしたいが出るに出れない。

そして一夏が出した結論は『家から出ないこと』。一歩間違えれば人生が危険だが今はベターな策だ。やることも無いのでテレビをつけた。

『世界で初となる男子IS操縦者が』

『もうすぐ皆既日食』

『一体何故織斑一夏君と碇シンジ君は』

『男子IS操縦者誕生！その訳とは』

どのチャンネルも似たようなニュースしかやっていない。

毎日メディアで自分の名前が叫ばれているのは一夏にとって結構辛い。が、テレビを点ければ連呼するように何度も呼ばれる。

仕方なく一夏はテレビを消した。

「どうすりゃいいんだ……」

姉に迷惑をかけぬと決意して試験会場に向かったが道を間違えた結果、逆に姉に迷惑をかけてしまった。しかも藍越学園への入学も出来なくなってしまった。例え事情を話しても理解してもらえないだろう。

「どうすりゃいいんだ……」

一夏は同じ言葉を繰り返した。

ポフッ

顔に何か降ってきた。

一夏は降ってきた何かを見た。

「なんだこれ」

「IS学園の制服だ」

千冬と一緒にIS学園の資料を投げ渡した。

「千冬姉、帰ってたのか」

「ここは私の家だ、そりゃ帰ってくるだろ」

千冬は冷蔵庫から冷えたビールを一本取り出す。

「てかIS学園の制服って……俺まだ入学するだなんて」

「入学手続きは既に済ませた。あそこにはどこの国も手出しは出来ない。それに、もう一人の男子も入学手続きを済ませている」

「……」

さすが我が姉と、一夏は感心した。しかし勝手に話が進んでいたことに何も言えなくなつた。

一夏ははあとため息をついた、

「そう落胆するな、IS学園も高校も同じだ。まあ女子校の雰囲気も感じるが慣れれば溶け込めるさ」

「詳しいんだな、千冬姉」

「ああ、まあな」

千冬は適当に返事をして二本目のビールを口にした。

ドイツ

某軍事施設

「なんで私だけー」

一人の少女は通達に愚痴を零していた。

彼女には特に親しい三人仲間がいた。彼女らもIS操縦者であり、IS学園へ行くことが決まっていた。

しかし通達が来たのは少女一人だけ。仲間三人はわざと少女の入学決定を褒めたたえた。

「よかったじゃない、昇格した直後に異動なんて」
「貴様にはいい薬だ」

「これで軍より身が引き締まる、いいチャンスだ、」

「ラングレーもボーデもトゥルーデも酷い……」

「だが、言い換えればフラウに適した任務だがな」

少女は首を傾げた。

「噂の少年、織斑一夏と碇シンジだ」

「私興味ない」

少女はバツサリと切り捨てた。

すると一人の仲間が手を挙げた。

「なら私が行くわ、知り合いにいいたいことあるし」

「いや、私が適任だ。かつての教官がいるからな」

「私が行こう、クリスが見てみたいというからな」

「私よ！」

「私だ！」

「私が！」

「……………じゃあ、私が」

少女は寂しそうに手を挙げた。
すると、三人は手を引っ込めて

「どうぞどうぞ」

「そんなことだと思った！」

こうして少女一人がIS学園へ向かうこととなった。

アメリカ

「あー日本か」

「そうよ、あそこには第一回の優勝者がいるのよ」

「へー」

長身の女性は自分のISを調整しながらIS学園の話を聞いていた。

（そういや宮藤もその国にいたな）

メンテナンスを終えた女性は機体から降りてISを待機状態の兎の尻尾のストラップに戻した。

「じゃ、あたしも行くかな」

「いつてらっしゃい」

イギリス

「そついや日本に男子操縦者が二人も現れたらしいね」

「興味ありませんわ」

ISを操縦する金髪の少女は向かい合う眼鏡の少女の言葉に特に興味を示さず、操縦する。

「それにしてもワンコ君もすごいな。やっぱり匂いが違うからかな？」

「ぶつぶつおっしゃってないで真剣にやっ」

「はいはい分かったにや」

眼鏡の少女は面倒臭さそうにランスを振り上げ、金髪の少女のビクトの攻撃を弾く。

（また別のことを考えていらっしやる！こんな方に代表の座など渡すのですか！）

（入学できるセシリアはいーな、どうやってIS学園に忍び込もうかな。またワンコ君とぶつかっちゃうかな）

真面目と不真面目、思考や性格も正反対の二人がぶつかり合う。

フランス

「あの方がいらっしゃるんですね……」

眼鏡をかけた少女は持っていたレイピアを掲げ月光を浴びせた。愛おしそうに月を見上げる。

そして月を見たまま少女は後ろの少年に話し掛けた。

「貴方は行かれるのですか？」

「うん、父親からの命令だからね」

「……………拒まないのですか」

「……………やらなくちゃいけない。それしか僕には道は無いんだ」
「……………」

少女は少年に何度か保護することを提案したが少年は首を縦に振るうとしなかった。

「じゃあ、先行くね」

「ええ、お気をつけて」

ゲーム盤に駒は揃いそして物語は始まる。

第捌話 集結する少年少女（後書き）

鈴「あれ、私は？」

エイラ「サーニヤはどうした！」

箒「また私も出番なしか……」

サーニヤ「次回出るかも……」

楯無「次回からようやく本編の始まり」

第玖話 張り詰めた空気（前書き）

レイ「今回は碇君は出ないわ」

芳佳「さみしいですね」

第玖話 張り詰めた空気

今日は4月。

IS学園の入学式が行われた。

男子初のIS操縦者として注目を集めた一夏は心が休まずにいた。無論学園でも彼が通るだけで必ず注目される。

そんな一夏はある人物を待っていた。

「碇ってどんな奴だ……？」

同じ男子IS操縦者のシンジを待っていた。入学式の時に彼は姿を見せなかった。一夏は遅刻だろうと待っていたが

「えーと本日は碇シンジ君は都合によりお休みです」

シンジは休んだ。

おのれ裏切り者め、と一夏は若干嫉妬した。

そんなこんなで入学式は終わり今は一時限目。

「……………」

パニック寸前の一夏は一度深呼吸した。気持ちがだいぶ和らいだ。そして、今起こったことをありのままとめる。

今は自己紹介で一夏の番。

まともに自己紹介も出来ないのかと担任に出席簿で殴られた。

そして担任が姉。

「ち、千冬姉がどうし」

「織斑先生と呼べ」

一夏は再び出席簿で頭を叩かれた。

「……はい、織斑先生」

「よろしい。さて、SHRは終わりだ。諸君らはこれから半月で基礎知識を全て覚える。そのあとの実習の基本動作も半月でモノにする。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事しろ。私の言葉には必ず返事しろ。いいな？」

先程まで黄色い声を上げていた生徒も千冬の雰囲気には圧され静かになった。

一夏はポカンと見ていた。

「席に着け、馬鹿者」

再び出席簿が一夏の頭に落ちた。

一時間目が終わった。

一時間目はIS基礎理論だったが一夏はほとんど分からなかった。

「はあ……………」

疲れた一夏は重く深いため息を吐いた。授業の疲れだけでなく周りの環境も影響していた。

今現在男子は一夏だけ、あとは全員女子だ。

隣にシンジがいればかなり気が楽になるが今はいない。

そして廊下には一夏の姿を見ようと2、3年生が詰めかけている。それとは別に特別な視線を感じていた。

「……………」

「……………」

無表情のままレイは一夏をじっと見つめている。まるでレイが絵画であるように微動だにせず。

「……」
「……」

段々レイの視線が冷たく感じてきた。

「……」
「……」

一夏は耐えられず視界に入らないように顔を逸らした。
逸らした先に誰かが立っていた。

「ちょっといいか」
「…… 筈？」

かつての幼馴染みが立っていた。

レイは一夏が出ていくまでじっと彼の姿を見ていた。箒と一夏が教室をた後も入口を見ていた。

「あ、あの」

「……………」

レイは首だけ動かして声のする方向を見た。

「綾波さん、ですよ」

「……………誰？」

「わ、私、宮藤芳佳です！」

芳佳は緊張してるのか声が上擦っていた。

「し、シンジ君の知り合いですよ」

「……………ええ」

「えーと、シンジ君と会いましたか？」

「……………ええ」

「今日シンジ君はどう」

「さっきから碇君の話題ばかりね」

「うつ……………」

「貴方、碇君の何なの？」

芳佳は言葉に詰まった。

下手に答えれば執拗に攻めてくるかもしれない。

「ただの……知り合いです」

「ただの？」

「あの……この世界に来たときに初めて知り合った人です」

「そう………よかった」

レイは納得し興味なさそうに顔を伏せた。

「今日碇君はある場所に行ってるだけよ。明日からISS学園に来るわ」

「そうですか」

「ところで貴方、確か篠ノ之さんのお姉さ」

キンコンカーンコン

レイの言葉を遮るようにチャイムが鳴った。

「………また後で来なさい」

「は、はい」

「……………」

一夏に再びピンチがやってきた。

今授業で真耶が教えていることが全く分からない。教科書をめくっても意味不明な単語が羅列している。

隣のレイは真耶の話に頷きながらノートをとっている。一夏はレイのノートをちらつと覗いた。

「何か？」

「あ、いや……………」

「あまり見ると篠ノ之さんが睨んでくるわよ」

レイは再びノートにシャーペンを走らせた。

「織斑君、何か分からないことがあったら聞いてくださいね」

真耶の温かい言葉に一夏は少し安心して考えた。
一夏は直ぐに手を挙げた。

「先生！」

「はい、織斑君」

「ほとんど全部わかりません」

「え……………全部ですか……………」

思わぬ質問に流石の真耶も笑顔が引き攣っている。

「えっと……………織斑君以外で今までやったところが分からない人って……………いますか？」

拳手ゼロ。

箒やレイはもちろん、芳佳も上げていない。一夏ただ一人理解して
いなかった。

「織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古いタ。ン。ージと間違えてすてました」

出席簿が一夏の頭に音良く命中した。

「必読と書いてあっただろこの馬鹿者。後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ」

あの質量、あの分厚さ、あのページ数。天才でも一週間で覚えるのはキツイ。一夏にとっては以っての外、地獄だ。

「一週間でやるのは……」

「やれと言っている。分かったな？」

「はい」

一夏は睨まれて頷くことしかできなかった。

そして長い二時間目が終わった。時間的には一時間程度だったが一夏には六時間にも感じた。

「ちょっとよろしくて？」

「は？」

また箒かと思つたが声や口調が全く違つた。突つ伏していた顔を上げると目の前には若干ロールがかかった金髪の高貴な女子が偉そうに立っていた。

「聞いてますの？」

「あ、ああ……聞いてるけど何か用でも？」

「まあ！何ですの、そのお返事は？私に話し掛けられるだけでも光栄なのでそれからそれに相應しい態度というのもあるんじゃないかしら？」

プライドが高いのが話し方や雰囲気に分かる。見た目からでもどこかの御令嬢と窺える。

一夏はこういう類の人間は苦手だった。

「君は誰かまず知らないんだが」

するとますます一夏を見下すように言葉を続けた。

「まあ！このセシリア・オルコットご存知無いと？イギリス代表候

補生にして入試首席のこの私をですか!？」

あ、セシリアって言うのかと一夏は初めて名前を知った。

「あ、一つ聞いてもいいか？」

「……下々の要求に応えるのも貴族の勤めですわ。よろしくて」

「代表候補生って？」

周辺にいたクラスメイト数人がずっこけた。一夏は何かあったのか分からず周りを見回した。

「あなた、本気でおっしゃいますの!？」

「ああ、しらん」

「信じられませんわ………極東の島国というのは予想以上に未開の土地なのかしら………」

頭痛に悩まされるようにセシリアはこめかみを人差し指で押さえながら信じられないと何度も呟いた。

「で、代表候補生ってのは何だ？」

「国家代ひ」

「国家代表のIS操縦者の候補生よ。何人が選出されるけど狭き門だから相当な腕が無いとなれないわ」

「そうか。……?」

セシリアの声ではない。隣のレイがつらつらとつまらなそうに説明していた。

「なんですの！折角私が説明を」

「……………」

レイはぷいとそっぽを向いた。更々セシリアと話す気は無いらしい。馬鹿にされたと思いきやセシリアは激昂した。

「つ~~~~~!!」

「あ、おい、落ちつ」

「落ち着いてますわ!!」

落ち着いてなかった。

結局宥めるのに時間を割かれセシリアの説明も聞くことができなかった。

三時間目が始まった。

この時間は真耶ではなく千冬が教壇に立っていた。

「授業の前にクラス代表を決めなくてはならない。誰か立候補か推薦はあるか？」

クラス代表とはいわゆるクラスの委員長的な存在で、対抗戦の他にも生徒会の会議等にも出席するものだ。

「はい、織斑君を推薦します」

「私も彼を薦めます」

「織斑君が一番相応しいと思います」

「えっ!？」

思わぬ声に一夏は驚く。

一夏は周りの生徒の中でもISの知識がまともに入っていない。それなのにクラス代表になれば他のクラスや生徒会にいい恥さらしだ。

「自薦他薦は問わない。他にいないなら織斑で決まりになる」

「ち、ちよつと待つ」

「他薦された場合拒否権は無い。分かってるな」

一夏は反論しようとしたが千冬に一蹴された。

「待つてください！納得できませんわ！！」

セシリアが立ち上がって千冬に抗議した。

「男がクラス代表だなんて恥もいいところですわ！このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

セシリアは女尊男卑が崩れるのがよほど許せないのか必死で訴える。周囲のクラスメートはポカンとその主張を見ている。

「実力から行けば私がクラス代表になるのが必然的ですわ。それに

物珍しいからという不誠実な理由でこんな野蛮な極東の猿にされては困ります！！いいですか？クラス代表は実力トップである私になるべきですわ！！」

セシリアの主張は更にエスカレートし、それに比例するように一夏の怒りも込み上げてくる。

そしてセシリアは一夏の怒りの導火線に火を点けた。

「大体文化の面に於いても後進的な国で暮らさなければならぬ」と自体、私にとって耐え難い苦つ」

「イギリスだって大して自慢無いだろ。世界一不味い料理で何年征しているんだよ」

一夏は言ってからしまったと気づいた。しかし時遅くセシリアは先程より怒りが激しく顔を真っ赤にしていた。

更にセシリアに追い撃ちをかけるように火に油を注いだ。

「そうね、私もそう思うわ。文化がどうこう言ってるけどユーロトンネルは日本の技術で生まれて、トンネルも走るユーロスターも日本の新幹線の技術を応用してるのよね。まさか恩を仇で返されるなんて」

先程のセシリアの説明に口を挟んだようにつらつらと告げた。
流石に周囲のクラスメートも危険と感じざわつきはじめた。

「あ、貴方達！！私の祖国を侮辱するのですか！？」
「……………」

レイは再びそっぽを向いて無視する。完全にセシリアの堪忍袋の緒が切れた。

「決闘ですわ！こうなった以上正々堂々と決着を付けますわ！！」
「いいわよ、いい加減うるさいから静かにしてほしいから」

レイも癪に障ったのか一夏を差し置いて決闘を引き受けた。

「言っておきますけどわざと負けたりしたら私の小間使い、いえ奴隷にしてあげますわよ」

「そっちこそ私達が弱いからって手を抜いてたら本当に怒るわよ」

もう十分怒ってます。

「貴方もいいわね？」

「ああ、つべこべ言うより分かりやすいからな」

一夏も真剣な眼差しで頷く。

「そう、ならハンデはどれくらいつける？」

「あら、早速お願いかしら？」

「いえ、私がどれくらいつければいいかしら？と思ってたけど」

「あ、綾波さん！？」

「そこまで言っちゃって大丈夫なの？」

クラスメートは二人の実力は知らないが真剣になるほどまでに値する力量はあることが分かる。

「貴方は？」

「いや、俺はいい」

一夏はハンデを付けたかったが二人と肩を並べることすら出来ない彼が手加減などできないと冷静に判断していた。

「なら、決まりだな。代表決定の勝負は来週の月曜日の放課後。第二アリーナで行う。綾波、織斑、オルコットはそれぞれ用意しておくようにな」

三人は話がついた後もお互いに睨み合っていた。

続く

第玖話 張り詰めた空気（後書き）

アスカ「えこひいきが腹黒い……」

マリ「かなり危険にや」

第拾話 初対面（ボーイミーツボーイ）（前書き）

芳佳「シンジさんはどこに」

レイ「言えないわ」

芳佳「……………冷たい」

第拾話 初対面（ボーイミーツボーイ）

セシリアとの決闘を約束した後、教室にはピリピリとした空気が流れていた。

一夏はその気配を消したがレイとセシリアの間の空気だけ帯電したような緊張感が漂っていた。

そんな空気が授業終了と同時に解放され、放課後。

一夏は疲れてうなだれていた。

あのボクサーが真っ白に燃え尽きたような脱力状態だ。

「はぁ……………」

「あ、織斑君」

「………… 山田先生？」

顔を上げると副担任の真耶が書類を抱えて立っていた。

「えつとですね寮の部屋が決まりました」

「あれ？俺の部屋ってまだ決まっていって」

「そうなんですけど事情が事情なので部屋割を少し無理矢理いじつて織斑君と碇君の男子部屋を作りました。まだ碇君は来てませんけど」

一夏とシンジは世界でも珍しい『男』のIS操縦者だ。一時期一夏を引きこもりに導こうとした時期があった。世界各国が二人のどちらかでも手に入れるために押し寄せてきた結果だ。果てには科学者まで来て「是非生体を研究させてほしい。いくらでも報酬は出す」と言われたとか。勿論二人共断固拒否した。

「そういう訳で政府からの特命でもあるのでこういう措置になりました」

「そうですか。でも荷物とか」

「それなら織斑先生が手配しておいたそうですよ」

「あ、ありがとうございます」

一夏は渡された鍵を持って寮の廊下を歩いていた。彼の部屋は1025室。直ぐに見つかった。

早速鍵を差し込み回した。しかし鍵は開いていた。

「誰かいるのか？」

返事はない。人気も感じられない。

ドアを開け覗いた。

中には段ボールが詰まれている。人の姿は見当たらない。

「そっか、千冬姉が送ってくれたんだっけ」

一夏は警戒心を解き、部屋に入った。

ガサガサ

「！？」

段ボールの影に何か蠢いた。茶色いGにしては大きすぎる。一夏は警戒心を引き締め、段ボールに近づく。

「誰だ！」

「しー」

段ボールの影には小柄な少女が猫のように身を潜めていた。

「あ、ここって男子部屋？」

「そうだ……って誰だよ」

「私はルツキーニ。フランチエスカルツキーニだよ」

ルツキーニは声が部屋の外に漏れることを恐れ囁くように答えた。

「どうしてルツキーニが俺の部屋に？」

「シャーリーの部屋に行こうとしたらミーナ中佐に見つかった……私まだIS学園の生徒じゃないから」

「それで開いてた俺の部屋に」

「うっん、違うよ」

ルツキーニは首を横に振った。

「鍵穴を針金でちょちよいと」

「犯罪だろそれ!？」

「しー!」

慌ててルツキーニは一夏の口を塞いだ。

「だから大声出さないで」

「ムグムグ!」

一夏はわかったと頷いた。

コンコン

『織斑さん、ちょっといいかしら
「げ、ミーナ中佐だ……」』

神はルッキーニを見放したのかミーナが部屋の目の前までやって来た。

「噂をすればなんとや」

「お願い、うまくやり過ごして」

「普通に出るよ」

「あーん、冷たい」

『入るわよ？』

「ほら出て」

一夏は慌てて玄関へ向かった。

「あら、まだ帰ったばかりだったのね」

「み、ミーナ先生。何ですか？」

「ちよつと迷子を探してるのよ」

ミーナは一枚の写真を見せた。

「フランチエスカ・ルッキーニ。年齢は14歳。イタリア代表候補生の子なんだけど」

「なんですけど？」

「まだ入学手続きを済ませて無いのよ。つまり不法侵入でちよつとお話があるのよ」

顔は笑顔、なのに般若のような恐ろしさを感じる。千冬にも劣らない恐怖心を抱かされる。

「この子を見たら直ぐに捕まえてね。そのためにISを寮で展開することは許可するわ」

「わかりました」

「あ、やっぱりいいわ」

ミーナはすたすたと奥のベッドに近づいて、積まれていた段ボールを退かした。

「見つけたわ」

「あわわわわわ……にやつ！」

ルッキーニはISを展開し窓から飛び去ろうとした。しかしミーナもISを右腕だけに部分展開し、ルッキーニの足を掴んだ。なす術も無くルッキーニは捕まった。

「さあ、ちょっとお話ししようか、フランチェスカ・ルツキーニ？」

「ひいひいひいひい」

ルツキーニの顔は地球よりも青かった。

ルツキーニが連行されてから30分経った。

「はあ……………」

送られてきた荷物はほとんど整理が終わった。しかし、送られてきた荷物は衣類など生活必需品のみ。ゲームなどの娯楽は無かった。千冬のある優しさに思わず涙が出た。

「しかしなあ……………」

一夏は隣に積まれたシンジの荷物を見た。量は一夏より一箱多いくらいだ。

しかし、何故かKEEP OUTテープで二重三重に梱包されている。莊重な雰囲気下手に触ることができない。

そして送り先は聞いたことも無い機関、いかにも怪しい。

「特務機関NERV……ねるぶ、か？」

一夏は携帯でNERVと打ち込み検索してみた。しかし、何も一件もヒットしなかった。

普通なら噂やら企業情報やら必ずある筈だが何も見つからない。

これ以上触れてはならないと判断し、一夏は携帯をしまった。

気付けば1時間も眠っていた。

空は既に朱く焼けたような色に染まっていた。

「あ、起きたんだ」

「ん？」

隣のベッドで一人の少年が一息休憩していた。
寝ぼけているのかと思い眠たい目を擦ってもう一度見た。少年で間違いなかった。

「お前は」

「あ、はじめまして、僕は碇シンジです」

「シンジか。俺は織斑一夏だ、よろしくな」

「よろしく、一夏君」

二人は握手を交わした。

「それにしても凄いね、この部屋は」

「そうだな」

初見では高級ホテルの一室に見えるが立派なIS学園の寮である。
ベッドもフワフワで毎日いい夢が見れそうだ。

「ところでシンジ、何で今日休んだんだ？」

「あ、うん。ちょっと用事があったね。別にずる休みした訳じゃないから」

「そうか。今日俺一人だけってかなりきつかったぞ……」

「あはは……」

その頃

「よ、よろしくお願いします」
「よろしく」

芳佳は頭を下げたがレイは無関心で黙々と読書をしている。

「……あの、綾波さん」

「……」
「好きな食べ物は」
「肉は嫌い」

本から目を離さずキツパリと答える。

「好きな食べ」
「特に無いわ」
「そ、そうですか」
「……」

「……………」

会話が續かない。芳佳はレイのことを知ろうと必死にアプローチするがレイは芳佳に興味なく本を黙って呼んでいる。

「そういえばさっきミーナ先生が」

「ミーナ隊ち……ミーナ先生が？」

思わず癖で隊長と呼びそうになったがなんとかごまかした。

「イタリア代表候補生の子を探してたわ」

「イタリア代表？」

「確か、フランチエスカ……………」

「ルツキーニちゃんが!？」

「そうズツキーニ」

ズツキーニは野菜。

「でもルツキーニちゃんって確かまだ12歳くらいじゃ……………」

「私だつて14歳よ」

「えっ!？」

16歳にしては大人しいと芳佳は思っていた。が、年下だと知り芳

佳は驚いた。

「私も、あなたは年下だと思ったわ」
「……………」

そして、ある部屋。

「え、遠慮無くどうぞ……………」
「では、お言葉に甘えて」

リーネの隣にあるセシリアのベッドは天蓋付きのベッド。他にもセシリアの家具がいくつも置かれリーネのスペースが狭まっている。普通なら反駁する人が多いがリーネは似たような雰囲気の間柄の扱いで下手に何か言わないようにしている。しかし

「ペリー又さんより酷いかも……………」
「何か？」
「な、何でもありません！」

リーネは涙目になりながら枕に顔を埋めた。

食堂

シャーリーとエーリカは食事をしていた。シャーリーはステーキ、エーリカはカレーを食べている。

「えっ、ルツキーニがやってきた!？」
「さっきミーナ中佐が探し回ってたよ」

先程エーリカが部屋でゴロゴロしていた時、ミーナがやってきた。

『ハルトマンさん、ルッキーニさんを見なかったかしら』

『知らないよ』

『そう、見つけたら直ぐに捕まえて。そのためにISの使用は許可するわ』

『はいはい』

ミーナが去った後、夕飯までずっと寝ていたので来てたとしても気付かなかった。

「結局来なかったみたいだけど」
「なーんだ」

シャーリーは残念そうに舌打ちした。最後のステーキを口に入れ、咀嚼すると直ぐに席を立った。

「どこ行くの？」
「探してくるよ」

その頃ルッキーニは。

美緒とルッキーニの二人は向かい合うように座っていた。美緒は睨むようにルッキーニを見つめ、ルッキーニは美緒の怒りに縮こまっている。

「……………」

「何故入学手続きを怠った？」

「だってえ、だってだってあたしまだ13歳だよ！元から入学できないからどさくさに紛れて」

「………… お前にはあらかじめ特待生の便りを同封した筈だが？」

美緒は一枚の用紙を見せた。

「知らないよ」

「嘘だ、間違いなく同封したぞ」

「えー？」

ルッキーニは持っていたボストンバッグから入学案内の資料を取り出し、中身を机の上に広げた。

「これだ」

「あー、あつたんだ」
「今すぐ書け」

ルッキーニは面倒臭そうに用紙に必要事項を書いていった。

「そういえばルッキーニ、お前はどうかやってIS学園まで」
「ISに乗って、楽チンだっ……!!」

直ぐに口を塞いだが美緒にはハッキリ聞こえていた。
怒りを抑えようと美緒は持っていた竹刀で机をたたき切った。

「確かISで海外への渡航は不法入国に等しかったな」
「……………まさか？」
「罰として営倉……………ではなく懲罰部屋三日だ。営倉と変わらんから安心しろ」
「ひiiiiiiiiiii!!」

本日二回目のルッキーニの悲鳴が響き渡った。やはり顔は空より青かった。

続く

第拾巻話 食事は最高のコミュニケーション（前書き）

千冬「確か二人には共通点があったな」

レイ「共通点？」

美緒「なるほど、選ばれた者ということか」

レイ「？」

第拾巻話 食事は最高のコミュニケーション

翌朝

一夏、箒、シンジ、レイ、芳佳、リーネの六人は同じテーブルを囲んでいた。一夏と箒、シンジ、芳佳は和食セツト、リーネは洋食セツト、レイはおにぎりを食べていた。

「鮭がおいしね」

「そうだな」

「そうですね、リーネちゃんもいる？」

「あ、じゃあ一口だけ」

「……………」

「……………」

一方、レイと箒はむすつとしたまま食事を進める。

「なあ、箒」

「名前で呼ぶな」

「し、篠ノ之さん」

「……………」

またむすつとしてしまった。先程からこのやり取りを5回繰り返している。

「ごちそうさま」
「先行くぞ」

会話に参加しなかった篤とレイは食事を済ませると直ぐに片付けて出て行ってしまった。
残された四人はまた半分しか減っていない。

「そういえば一夏つて篠ノ之さんと仲がいいの？」
「まあ、幼馴染みだからな」
「へー」
「そういやシンジもレイと仲よさそうだな」
「え、そうかな」
「そう見えますよ」
「まあ……仲はいい方かな？」
「そうなんだ」

和気藹々と話が弾み箸が止まった。

「いつまで食べている！食事は迅速且つ効率よく取れ！もし遅刻したらグラウンド10周だ！！」

千冬はモタモタしている生徒に痺れを切らして怒鳴った。

因みにIS学園のグラウンドは一周5キロある。つまり遅刻した場合は50キロ。約半日も走りつづけなければならない。

四人は会話を切り上げ急いで食事を口に詰め込んだ。

朝食が終わり、3時間目。

一夏は昨日と同じようにグロッキー状態になっていた。予習をしていたので少しは分かったが全く理解できない部分が殆どだ。

「大丈夫？」

「ああ……………」

シンジは全く疲れたような表情を見せていない。だからと言って無理に疲労を隠している訳でも無い。

「シンジは授業分かったか？」

「うん、まあね」

「あの分厚い参考書を読んだからか……」

「え、読んでないの？」

「あ、ああ……」

「それじゃあ………大変だよ」

シンジはかける言葉に迷い、しばらく間が開いた。

「あれ覚えるのにどれくらいかった？」

「んー、三週間で大半は覚えられたけど……全部なら一ヶ月くらいかな？」

「うげ………」

三週間分を一週間で覚える。

科挙より過酷な暗記に一夏は思わずつめき声を漏らした。

「今度勉強教えてあげよつか？」

「お願いしますシンジ先生」

一夏は深々と頭を下げシンジに頼み込んだ。

そして、昼休み

「綾波、お昼一緒に行く？」

「ええ、もちろ」

「宮藤さんも一緒に」

「……………もちろん行くわ」

パツと一瞬明るくなったが再びむすつとしてしまった。原因が分からないシンジは首を捻った。

「し、篠ノ之さん！一緒に食べに行きませんか？」

「わ、私は」

芳佳の意外な誘いに思わずしどろもどろに答える箒。箒はチラッと一夏を見た。

「箒、め」

「……………」

「篠ノ之さん、昼飯食いに行こうぜ」
「私は……いい」

箒は首を横に振った。すると一夏は箒の手を引き無理矢理連れ出した。

「そう言っなよ、行くぞ」

「だから私は行かないと！」

「別にいいだろ」

「は、離せ！」

「学食に着いたらな」

「ええい、今離せ！！」

箒は腕を組んでいた一夏を投げ飛ばし床にたたき付けた。コンマ数秒遅れて一夏は痛みにも悶絶した。

「だ、大丈夫？」

「ああ。しかし腕上げたな」

「貴方が弱いのだ」

「そうだ、こんなものは剣術のおまけだ」

弱いと直球に言われ一夏は泣きたくなった。

そんなこんなで食堂。昼時なので多くの生徒でこった返している。

「じゃあ席見つけておきますね」

「おう、頼むな」

芳佳、シンジ、途中から合流したリーネは先に席を確保すべく別れた。

一方、一夏は箸の手を引いたままカウンターに並んでいた。その隣にはレイが存在感を消えそうに立っている。

「貴方達も日替わりでいいわね」

「ああ、俺も箸もいいよな」

「か、勝手に決めるな！私にも好みが」

「それでいいぞ」

「分かったわ」

「人の話を聞け！」

レイはプラスチックの食券をカウンターに置いた。四人は日替わり定食、リーネとレイはサンドイッチを頼んでいる。

「……………」
「何故さっきからジロジロ私を見るんだ」
「貴方に似た人間がいたから何となく」
「……………」

箒はレイから顔を背けた。レイも興味を失い別の方向を見つめた。

「はい、日替わり4つとサンド2つね」
「ありがとう、おばちゃん」
「ありがとう、ございます……………」

レイと一夏はそれぞれトレイを受け取り、持ち切れない分を箒に渡した。

三人はシンジ達が陣取っている奥のテーブルへ向かった。

席につくと礼儀正しく手を合わせる。

「……………」
「……………」
「……………」

レイと箒は挨拶せずに食事を始めた。

「ところでさ、箒」

「……」

「ISの操縦とか教えてくれないか？」

「くだらない挑発に乗るからだ、馬鹿者」

「それを何とか頼む！」

一夏は手を合わせて拝むように箒に懇願する。しかし箒は黙って味噌汁を啜った。

シンジ達をチラッと見るがレイ以外は視線を反らした。

「あ、いたいた」

「ん？」

「あ、ハルトマンさんとシャーリーさん」

ふと顔を上げると二年生のエーリカとシャーロットが立っていた。

「お、宮藤も一緒か」

「久しぶり」

芳佳に軽く挨拶すると二人はシンジと一夏を交互に見比べた。

「これが噂の男子二人かあ」

「イギリス代表候補生と戦うのは、こっちな」

シャーロットは迷わず一夏を指した。直感的に一夏が強く感じたからだ。

「はい、あと綾波も」

「お、日本代表候補生もか」

一瞬、空気が固まった。

「ええっ！？綾波さんって代表候補生だったんですか！？」
「す、凄いです」

「俺初耳だぞ」

「僕も初めて知ったよ」

「凄いな……」

「……騒ぐからいいたくないのよ」

レイは迷惑そうに呟いた。隠していた理由を理解した五人は大人しく席についた。

「じゃあ候補生は大丈夫として……」

「問題はこの素人か。IS稼動時間ってどんぐらい？」

「どれくらいって……2、30分程度だと」

「あーダメだ、120%勝ち目無いや」

エーリカは諦めると言わんばかりにやれやれと首を振りため息を吐いた。代わってシャーリーが一夏に迫る。

「ならあたしが教えてあげよっか、なんて思ってたけどどう？」

「シャーリーさんってISも上手いんですか？」

「おう、あたしの『グラマラス・グレニス』は速いし強いし、でも代表候補生止まりだからそこそこだな」

シャーリーは手首のバンドに巻き付いてる赤いカギを見せ付けた。これがシャーロットの『グラマラス・グレニス』の待機状態だ。

「どうだ？アメリカ代表候補生って折り紙付きだけどどうだ」
「じゃあ、おねが」
「結構です」

一夏の言葉を遮るように箒はキツパリ断った。

「え？代表候補生でも無いのに教え」
「私は篠ノ之束の妹ですから」
「わお、こりゃ驚いた！」

エーリカはわざとびっくりして、戯けたような声を上げた。箒は二人を睨んだまま告げる。

「ですから結構です」
「あーそっか、なら……」

シャーリーは一夏からシンジに視線を移した。

「じゃあ君」
「碇君は私が教えますから」
「……日本代表候補生なら安心だな」

シャーリーは素直に諦め、そして最後に芳佳とリーネを見た。

「なら宮藤とリーネ、一緒に練習すつか」

「いいんですか？」

「是非お願いします！」

「了解、じゃ第四アリーナにいるからな」

シャーリーとエーリカは手を振りながら去っていった。

続く

第拾巻話 食事は最高のコミュニケーション（後書き）

箒と竹刀を交える一夏。

一夏の弱さに箒は憤る。

一方レイとセシリアは日に日に腕をあげてゆく。

そしてクラス代表決定戦で勝利を得るのは？

次回「小手比べ？いいえ、真剣勝負です」

さあーで、次回もサービスサービスウ！

第拾弐話 小手調べ？いいえ、真剣勝負です（前書き）

芳佳「坂本さんって剣道強いですね」

美緒「ああ、まあな」

芳佳「誰から教わったんですか？」

美緒「……思えば7年も前か。あの頃の私はまだ」

レイ「長くなりそうね」

第拾弐話 小手調べ？いいえ、真剣勝負です

剣道場

「箒、俺はISのことを」

「いいから竹刀を持て」

「……………」

箒は既に防具をつけている。一夏は状況が飲み込めず迷っている。シャーリーからIS指導を断り、箒が自ら教えると言ったが何故か剣道をやる羽目になっていた。

「腕が鈍ってないか確かめてやる」

「分かったよ」

一夏は防具を纏い竹刀を取った。

「碇君、中々上手いわね」
「そうかな？」

レイとシンジは先に自分のISを使って訓練していた。お互いにプログレッシブナイフのみの近接戦闘を練習している。
レイは自分の一方的な攻めでシンジは守りの一貫だと思っていた。しかし予想に反してシンジのナイフの扱いはかなりのものだった。生半可な攻防は見せずしつかりとした守り、素早い攻めはレイを魅了させた。

「誰から教わったの？」
「篠ノ之さんのお姉さんの束さんだよ」
「えっ!？」
「ん？」

レイは驚いてプログレッシブナイフを取りこぼしてしまった。

「……篠ノ之博士はこの世界で唯一コアを造れる人でISの開発者でもあるのよ」
「へー……え!？」

今度はシンジがプログレッシブナイフを取りこぼしそうになった。

「あの参考書に載ってた筈だけど……」
「東さん載ってたっけ？」

シンジは首を傾げた。

シンジ、芳佳は東からISの知識を教わっていた。

『ところで東さんってISの開発者なんですか？』
『ん、違うよ。ただのメカニックだよ』
『そうですか』

そこで話は終わった。

（束さん、僕を裏切ったな……）「ISのコアは今世界に何個あるか知ってる？」

「え？確か467個だった」

千冬や真耶も確かに467個と教えていた。しかしレイは首を振り否定した。

「碇君、その初号機のコアは？」

「えっ……？」

「私の零号機と同じならからっぽのISのコアにエヴァのコアをコピーした。つまり私と碇君のコアは467個には含まれていないのよ」

「じゃあ、芳佳のも？」

「そうね、おそらく470以上はあるわ」

三人のコア以外にも特別なコアが存在する可能性もある。

「でも、碇君。貴方は宮藤さんと戦って訓練したのよね」

「まあ……うん」

レイは後ろを振り返った。

「あの体たらくは何？」

「痛たたた……」

「大丈夫、芳佳ちゃん？」

芳佳はアリーナの地面に墜落していた。ISの絶対防御があるとはいえ、身体が痛む。

「宮藤、本当にあの天才に習ったのか？」

「はい……」

「そして、あの代表のお気に入りの男子と毎日練習した？」

「はい」

「その結果、墜落と……」

「……」

シャーロットもエーリカも若干呆れていた。束直伝の凄さを期待し

ていたが的外れだった。

「やっぱり少佐……坂本先生に任せたほうがよかったかな」
「うっ……」

見込み無しと言われ芳佳はショックを受けた。自分が原因だと分か
つていても改めて言われると誰だって傷ついてしまう。

「で、坂本先生は？」
「剣道部の方にいます」

「なかなかの腕だったぞ」
「あ、ありがとうございます」

いきなりの褒め言葉に篤は恥ずかしそうに照れた。

「しかし、相手も前はかなりの腕前だっただろ？」
「はい……」

一夏と竹刀をぶつけたが、箒の一方的な攻めに一夏は屈した。あれほど打ち込んでいた剣道を中学入学と同時に手放し疎かにしていたことを知り箒は激昂した。

しかし更衣室に戻ってきつく言い過ぎたのではないかと少し後悔していた。

「剣の道は三日欠かせば七日失うと聞くがまさしくそうだな」

「わ、笑い事では無いです！」

「確かに、あれが真剣だったら命は無いだろう」

「はい」

「しかし、次はどうだ？」

そつと道場に耳を澄ませてみると、素振りの音が微かに聞こえた。そして、竹刀が空気を切る音よりも大きく一夏の声が響いている。負けたのが悔しかったのか真剣に打ち込みを再開したようだ。

「お前も幸せだな。頼りになりそうな男がいてな」
「……………」

顔を真っ赤にする筈をよそにはっはっはっとな笑いながら美緒は更衣室を出ていった。

『織斑ああ!!』

『さ、坂本先生?』

『何だその腰は!背筋を正せ!竹刀の握りも緩いぞ!!もっと振り上げろ!!』

『はい!』

『さて今から私がみっちり教えてやる。覚悟はいいな?』

『は、はい!』

『声が小さい!』

『はいっ!!』

ドタドタと道場が騒がしくなるが筈はまだボーツと頬を紅く染めたまま浮かれていた。

『お前も幸せだな。頼りになりそうな男がいてな』

つまり、美緒は一夏と箒が恋仲であることを認識しているらしい。
改めて知ると恥ずかしさで更に顔が真っ赤に火照った。

そして、クラス代表決定戦当日。

「なあ、箒」

「なんだ？」

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。どうせ気のせいに」

「ISのことを」

「……………」

箒は目を逸らした。

あの日から一夏は箒と美緒にみっちり扱かれ、剣の腕が感覚を取り戻していた。

しかし、肝心なISの訓練は全く手付かずの状態であった。

そして今日を迎えた。

「し、仕方ないだろ！お前にはISがなかったから」

「まあ、そうだけど……じゃなくて知識とか基本とか」

「……………」

「坂本先生も他人の振りしないでください」

美緒もクラス代表決定戦があることは知っていた。しかし剣術を教えることに夢中になり、ISのことをすっかり忘れていた。

「坂本先せ」

「試合前の私語は慎め、織斑」

「話を变えないでくだ」

「もう一度言う、私語は慎め」
「はい……………その前に質問いいですか」

一夏は諦め、美緒に尋ねた。

「何だ？」

「何故坂本先生も」

「さて、私は席の方に行ってる。後は織斑先生と山田先生の指示に従え」

「……………」

美緒は交代という名目で逃げた。

そして代わるように千冬と真耶が入ってきた。何やら慌てているらしく少し落ち着きがない。

「織斑君、急いでください！」

「え？」

「今織斑君の専用機が届きました！」

「織斑、直ぐに準備しろ。アーリーナの使用時間は限られている。本番でもものにしろ」

「男子たるもの、この程度の障害を乗り越えてみせろ」

「え？あ？え？」

「とにかく早く！」

三人に急かされピットに入った。

そこには白が鎮座していた。

最初の試合が始まった。

一夏の対戦相手はセシリアだ。勝利したどちらかがレイと戦い、そしてその勝者がクラス代表となる。

そのためレイと付添人のシンジは次の試合に備えてピットで調整をしていた。

「大丈夫、綾波？」

「大丈夫、碇君がいてくれるなら」

レイはモニターで自分のIS『零号機』の稼働率を最終確認していた。潤滑に動いていることを確認し、レイはウィンドウを閉じた。

「織斑君のほうはどう？」

「一夏がかなり圧されてる……セシリアが優勢だね」
「そう……」

レイもシンジが見つめているテレビに視線を移した。

30分が過ぎた。

セシリアの『ブルー・ティアーズ』はほぼ無傷に等しく、代わって一夏の『白式』はかなり傷ついていた。一夏は改めて経験の差と言うものを理解した。

「このブルーティアーズに対してここまで耐えるとは……褒めてさしあげますわ」

セシリアは一夏を見下ろすように笑う。

彼女のIS『ブルー・ティアーズ』の周りには四つの特殊レーザーを搭載した自立機動兵器が浮いている。この特殊装備を『ブルー・ティアーズ』と言い、実践投入第一号であるセシリアのISにも名付けられた。

「さて、フィナーレと参りましょう」

セシリアは笑みを浮かべ、ビットに命令を出す。命じられたビットは一夏の白式目掛けて一直線に突き進む。

一夏は辛うじて回避し、防ぐ。息する間も与えずセシリアはライフルを撃つ。

セシリアは装甲の剥がれた左足に目を付けた。

気づいた一夏はセシリアのライフルをブレードにぶつけ銃口の照準をずらした。

「なっ……！？」

セシリアは試合開始から初めて驚きの表情を見せた。一旦詰まった距離を広げ、セシリアは再びビットに命令を出した。

一夏はそこで核心した。

セシリアのビットは制御に意識を集中させなければ動かせない。そして一夏の反応が遠いポイントから狙っている。

つまり、わざとそのポイントを誘導すれば必ず飛び込んで来る。一夏は勝利の鍵を見つけたことに心が僅かに緩んだ。

「どう思っ？」

「そりゃあ、大したもんさ」

「凄いじゃん」

エーリカ、シャーロット、ルッキーニは最前列で試合を観戦していた。一番フィールドに近いがシールドがあるので流れ弾が当たる心配も無い。

「だってこの数日IS練習しないで剣ばっか振ってたのによく代表候補生を前に耐えられるよね」

「まあ、彼はあの織斑先生の弟だからな」

「あの人が？」

「モンド・グロツソの第一回優勝者、しかし第二回決勝で」

「ああっ！！」

ルッキーニがフィールドを指す。会話に夢中になっていた二人はフィールドを見る。

そこには爆煙に包まれ『白式』が姿を消していた。

「やられちゃった……？」

「……………いや、まだだ」

「あれは…………」

シャーロットとエーリカはルッキーニの心配を否定し、鋭い目付きで煙を凝視した。

そして、煙が晴れた。

そこには本当の『白式』がいた。

「やっと一次移行だファーストシフトと……!？」

「まさか初期設定だけでここまで持つとはね……………」

二人は『白式』に戦いた。

一夏は近接特化ブレード『雪片弐型』を手を取った。

『雪片』

かつて千冬がIS操縦者だった時、この『雪片』のみで世界の頂点に立った。

「俺はつくづく最高の姉さんを持っただよ……」

一夏は思わず呟いていた。

そして、彼は決心した。

「俺も、家族を守る」

「貴方、何をおっしゃって……」

いきなりの宣言にセシリアはたじろぐ。

「俺は、千冬姉の名前を守るさ」

「だからさっきから何をブツブツと……」

しかし、セシリアの声は聞こえてない。めんどくさくなったセシリアは痺れを切らしビットにミサイルを装填し、再び一夏を狙った。

レーザービットより速い。しかし、一夏には見える。
ブレードを横に薙ぎ、ビットを両断した。二つに裂けたビットは一
拍遅れて爆発した。

「うおおおおっ！！」

ブレードに力を注ぎ、セシリアの懐へ飛び込む。
そして、ブレードを振り上げた。

試合が終了、勝負がついた。
勝敗結果のアナウンスがアリーナに流れる。

『勝者、セシリア・オルコット』

ピットにいたシンジもレイも、応援席から見ていたシャーロットもエーリカもルッキーニもポカンと口を開けていた。

結局、一夏は負けた。

続く

第拾弐話 小手調べ？いいえ、真剣勝負です（後書き）

セシリアに敗北した一夏

とうとう始まる日本代表候補生VSイギリス代表候補生

しかしセシリアに心にある感情が芽生えり

そしてクラス代表の座は誰の手に？

次回『代表候補生』

レイ「負けないわ」

セシリア「こちらこそ」

第拾参話 英国代表候補生（セシリア・オルコット）（前書き）

シャーロット「今回はイギリス対日本戦だ」

レイ「サッカーみたいな言い方ね」

エーリカ「じゃあ英日戦争」

芳佳「ちよつと不謹慎ですよ、ハルトマンさん……」

第拾参話 英国代表候補生（セシリア・オルコット）

一夏とセシリアの勝負が終わり、それぞれピットに戻った。しかし待っていたのは健闘を讃える褒め言葉ではなく罵声だった。

「よくもここまで持ち上げ、それでこの結果か、大馬鹿者」
「……………」

紛れも無い事実を言われぐうの音も出ない。更に千冬は一夏を叱責する。

「武器の特性を考えないからこうなるのだ。この試合見て少しは勉強しろ」

四人はモニターに映し出されたセシリアとレイを見た。

「貴方のブルーティアーズ、損傷して墮とされてたけど平気なのかしら？」

「おあいにくさま、予備のピットはまだありましてね。そちらこそ確認は大丈夫ですか？」

「ええ、貴方よりはね」

お互いの罵り合いも一旦終結する。セシリアはブルーティアーズを、レイはパレットガンを構えた。

互いに目配せし、試合が始まった。

「いきなさい！」

「させないわ」

レイはブルーティアーズの砲撃をひらりと躲し、射撃範囲外へ抜け出す。

逃がさんばかりにブルーティアーズはレイを包囲し集中砲火。

今度こそ命中した。

しかし焦ったのはセシリアだ。

「なっ……」

「ISはシールドバリアーを張るとエネルギーが減る。でも装備で防げばシールドは張らなくてすむのよ」

レイの目の前には黄色い盾が現れていた。

今の集中砲火を全てこの盾一枚で防ぎ切ったことにセシリアは更に驚かされた。

「いくわよ」

レイはパレットガンの照準をセシリアに定めた。セシリアも撃たせまいとブルーティアーズを操作しレイを妨害する。

躲し、守り、撃つ。レイは攻防両方が成り立っている。一方セシリアは撃つ、躲す。守りが欠落している。

やがてレイはパレットガンを引つ込めスナイパーライフルに切り替えた。

「スゴイスゴイ！」

ルッキーニは試合の迫力に興奮していた。先程の一夏の一方的な守り、特攻とは違いISの能力を十分に引き出している。互角な戦いに周りの観客も沸き立っている。

「流石、イギリス代表候補生と日本代表候補生。格が違うな」
「でも、互角ではないね」

エーリカはキツパリと言い切った。
二人の力は拮抗している。誰が見てもどちらか一方的ではない。

「なんだ？動きが違うのか？」
「いや、さつきから日本代表候補生が火力の小さい武器しか使っていないから、それに」
「んー……………ああ！」

「ん、何なにー？」

エーリカの指す零号機の武装を見てシャーロットも理解し頷いた。

その装備はエーリカの読み通りの武器だった。

47分経過。

セシリアのシールドエネルギー残り98。レイのシールドエネルギーは残り152。かなり差が開いていた。

「なかなかやりますわね」

「貴方こそ、よく狙うわね」

セシリアのブルーティアーズは2機落とされ、今使えるのは4機。レイの耐熱光波防御盾もダメージが大きく、あと数発耐えられるか

どうかだ。

盾を失うまでにレイは決着を付けたいと思うが相手は予想していたよりタフだ。ビットからの攻撃は回避し、セシリアの手元にあるライフルの弾だけを弾くようになっていた。

「ここからは私の番ですわ!!」

セシリアはここぞとばかりにビットの移動速度を一気に上げた。ビットが減らされた分操る機数も少なくなり一機に対する集中力が上がっていた。

ここで漸くレイは焦りを見せる。まるで先程の攻撃は小手調べのようになってしまう。

レイは少しでもエネルギーを削ろうとパレットガンを放つ。

「遅いですわ!」

盾の範囲外からライフルを撃たれ、レイのパレットガンに命中した鉄屑となったパレットガンを投げ捨てスナイパーライフルを構えるが、これもビットに破壊されてしまった。

「っ!」

残る武器は三つ。

一つは近接戦闘のプログレッシブナイフ。

もう一つは切り札。

そして残る一つは緊急用の武器。

レイはプログレッシブナイフを選択した。

「ナイフで接近戦、貴方も血迷いましたか……」
「いいえ、正気よ」

レイは一気にセシリアに迫る。突然の接近にブルーティアーズも反応についていけず、セシリアは手元のライフルに指を掛ける。

「遅いわよ」

レイはプログレッシブナイフをライフルの銃口に刺す。セシリアは引き金を引く寸前で指を離れた。そして、ライフルを捨てビットの操作に集中する。

指示を出そうとした瞬間、セシリアは止まった。

レイが数メートル先で何かを構えている。先程の生半可なライフルなどではない。

零号機にある基本武装のレーザー砲。

そしてセシリアは理解した。

今までの攻撃、防御は全てシールドエネルギーを消費しないものだった。このためにエネルギーを消費を抑えていたのだ。

しかし、いつの間にチャージを終えていたのか。

よく見るとレーザー砲は今の今まで零号機の背中でエネルギーのバypassを担っていた管だった。

セシリアは今になってやっと最初からレイの策に嵌まっていたことを理解した。

「終わりよ」

レーザーはセシリアを確実に撃ち落とした。

「なかなかやるもんだな」

「綾波さんもオルコットさんも凄かったですね」

千冬と麻耶は二人の試合を見て感嘆の声を上げた。一夏も篤も試合の迫力に呆気を取られていた。

「さて、織斑。お前が何故負けたか分かるか？」

「え？何故かシールドエネルギーが0になつて」

「何故かではない。必然的だ」

一夏が使っていた『雪片』は特殊攻撃『バリアー無効化攻撃』にエ

エネルギーを大量に使う。

『バリアー無効化攻撃』とは、相手のバリアーの残量に関わらず切り裂き、本体にダメージを与えることができる。これにより『絶対防御』が作動し大幅にエネルギーを削ぐことができる。

「つまり、自分のシールドエネルギーを攻撃に転用したってことですか」

「ああ。つまり欠陥機だ」

「欠陥機!？」

一夏はすかさず突っ込んだ。

「言い方が悪かったな。ISはそもそも完成すらしていないのだから欠陥も何もない」

つまり『白式』は攻撃特化になっていてそれが原因で拡張領域も埋まってしまうている。だがその分『雪片』のために使われているため威力はトップクラスだ。

「それに、綾波のレーザー砲『γ線長距離砲』は同じくシールドエネルギーを消費する。ただこの場合は拡張領域を使っていない分威力が劣って燃費も悪い。そこで綾波はレーザー砲をシールドエネルギーのバイパスとして流しエネルギーを循環させながら若干取り込んでレーザー砲の充填に使っていた」

「へー……」

「だが扱うのはレーザー砲が難しい。射撃戦闘は反動制御に弾道予測からの回避、一零停止、特殊無反動旋回、更に弾丸の特性や大気

のコンディション、相手武装による相互影響を含めた思考戦闘。他にもあるがお前に熟せるか？」

「……ごめんなさい」

「分かればいい」

千冬は頷いた。

「一つのことを極めるほうがお前には向いてる、なにせ——私の弟だからな」

夜

セシリアとリネットの部屋。

「大丈夫ですか？」

「え、ええ……」

「……………」

リネットは先程からセシリアに声をかけてるが生返事を繰り返すばかりで元気が無い。試合が終わってからずっとこの状態だ。リネットもだいたい原因を推測しているが逆鱗に触れるような真似はしない。

「……少しだけ、私の話を聞いていただけませんか？」
「いいですよ」

リネットは躊躇いを見せず即座に頷く。セシリアは少しホッとして話し始めた

セシリアの母親は強かった。ISが生まれ、女尊男卑社会が形成される以前から彼女は強かった。女性でありながら複数の会社を経営し成功を収めていた。

彼女は厳しく、しかしセシリアにとっては憧れでもあった。

対して名家に婿入りした父親は母親の顔色ばかり窺いオドオドして

いた。母親も鬱陶しく感じ会話すら拒んでいた。

しかし、三年前に二人は事故で無くなった。その日に限って何故か二人は一緒にいた。

残されたのはセシリア、そして莫大な遺産。彼女はそれを我利我利^{がりがり}亡者^{うじや}とも言うべき人間の手から守ろうと猛勉強を積み重ねた。

ISの適性テストではA+を出し、第三世代装備『ブルーティーズ』の第一次運用試験者として抜擢された。

だが、突然ある人物が立ちはだかった。

何事にも真面目に取り組まず、放浪者のような性格。全てがセシリアと正反対の少女に今まで築き上げたものが崩されそうになった。セシリアはそれを守るために、そして『ブルーティーズ』の稼働データと戦闘経験値をいち早く得るため少女よりも早く来日した。

そんな中、セシリアは出会ってしまった。

「一夏さん、ですか？」
「ええ……」

セシリアは否定せず首肯した。

あの真剣な眼差し。今思い出すだけでも胸が熱くなる。

「それで一夏さんと打ち解けたくて悩んでいた、ですか？」
「はい」

セシリアは今まで一夏を見下し偉そうな態度で接していた。今すぐに態度をガラリと変えてしまうと彼に勘付かれてしまうかもしれない。それが恐怖だった。

するとリネットは安心して笑顔で答えた。

「なら、今まで通りに接しつつもちょっとさりげなく変えてみるのはどうですか？」

「さりげなく？」

「はい、例えば――」

翌日

「一年一組のクラス代表は織斑一夏君に決まりました。あ、一繋がりでいいですね」

クラスが盛り上がる中、一夏一人は訳が分からず首を傾げていた。

「先生、俺は昨日試合に負けたのに何故クラス代表に」
「それは私達が辞退したからよ」

レイは読書をしながら一夏にこれまでの経緯を教えた。

レイはセシリアに勝った。しかしレイはセシリアの挑発に乗っただけであつた。セシリアと決着を着けたかっただけだつた。

なのでレイは辞退し、クラス代表の座をセシリアに譲った。

しかしセシリアも辞退しそのまま一夏にたらい回しにされ彼がクラス代表となつた。

「やはり『一夏さん』にはクラス代表が相応しいと思い、譲ることにしましたわ」

一夏はふと自分の呼ばれ方が違ったことに気づいた。決定戦以前は『あなた』と名前すら呼ばれていなかった。今彼女は間違いないく『一夏さん』といった。

「私のように優秀且つエレガント華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げればそれはもうみるみるうちに」

「生憎だが一夏の教官は足りてる。私に直接頼まれたからな」

箒は反論する。するとセシリアは以前のように偉そうに胸を張り誇らしげに言う。

「あら、あなたは確かランクCの篠ノ之さん。Aの私に何か？」

「ら、ランクなど関係ない！一夏がど、どうしてもと頼むからだ！」

ISの適性ランクにはSからCまである。因みにSは世界最強の『ブリュンヒルデ』や『ヴァルキリー』などごく僅かしか存在しない。言ってしまうと二人にはかなりの差があった。

「座れ、馬鹿共」

二人の争いは千冬の出席簿アタックに止められた。

「お前達のランクなど私からしてみればゴミ。まだ殻も破れていないひよっこが優劣など付けようとするな」

千冬に一蹴され二人は何も言うことなく引き下がった。

「クラス代表は織斑一夏。異論は無いな」

こうして一夏はクラス代表に任命された。彼に幸せが訪れるかはさておき。

続く

第拾参話 英国代表候補生（セシリア・オルコット）（後書き）

やっとクラス代表決定戦が終わりました

次は原作通り鈴来日&VSゴーレム？です

そろそろ使徒とかネウロイを入れる予定ですがいつ入れよう……

次回予告

シャーロット「そう言えばペリーヌが来るらしいぞ」

ルッキーニ「えー、なんでー」

シャーロット「やっぱりIS操縦者だからだろ？」

ルッキーニ「じゃあエイラは？サーニヤは？」

シャーロット「まだ分かん、何しろ任務があるらしい」

次回『硬い、長い、強い』

ルッキーニ「早くISつかいたい〜い」

第拾肆話 かたい、ながい、つよい（前書き）

一夏「またシンジとレイは休みか」

芳佳「なんでだろう？」

第拾肆話 かたい、ながい、つよい

クラス代表決定戦から数日が過ぎ、平穏な日々を過ごしていた。

「これよりISの基本的な飛行操作をしてもらおう。織斑、オルコット、宮藤。試しに飛んでみせろ」

専用機持ちの三人は意識を集中させる。

ISは起動させない待機状態の時はアクセサリーのようになっている。一夏は右腕にガントレット、セシリアは左耳にイヤークラス、芳佳は胸元に十字のペンダント。ISによって様々だ。

「早くしろ、熟練者なら一秒とかからん」

まず先にセシリアがブルーティアーズを展開し、次に一夏の白式、最後に遅れて芳佳の零式が展開された。少し時間が掛かったが千冬はまあいいと言って見逃した。

「よし、早速飛べ」

セシリアは直ぐに芳佳も彼女を追うように上昇する。一夏も一足遅れて飛ぶが二人より上昇速度が小さい。スペックとしては白式が二人より上だ。なんとか追いつこうと出力をなんとか上げていく。

セシリアから「自分のわかりやすいようにイメージするのがいいですわ」とアドバイスされたがそれでもイマイチ空を飛ぶ感覚が掴めない。

芳佳も一夏と同じ素人だが飛行操作だけはセシリアと同じく慣れたように舞っている。

「自分が鳥になって飛べば簡単だと思いますけど」

「鳥って、羽ばたくようにか？」

「羽ばたくというより何て言うかその……フワッというかスーッと
いうか……ごめんなさい、分かりにくくて……」

芳佳も上手く説明できない。ISはストライカーユニットと違い、
飛ぶ以外の機能がごまんとある。

芳佳自身感覚が掴めずストライカーユニットを扱うのが難しかった
が、比較的ISは飛びやすいと感じている。

「一夏さん、もしよろしければ放課後に指導して差し上げますわ。
その時は」

「一夏！いつまでそこにいるんだ！さっさと降りて来い」

通信回線から怒鳴る声が聞こえた。モニターには怒りを露わにした
筈が映っていた。

「地上のみんながよく見えるね」

「ISは元々宇宙空間での使用を目的として開発されたもの。何万キロも離れた星の光を利用して位置を把握するのだからこれくらいは当たり前ですわ」

セシリアはスラスラと説明した。芳佳もなるほど、と頷いた。優等生の説明はやはり違うと感じた。

「織斑、オルコット、宮藤。急降下と完全停止をやってみろ。目標は地上から10センチだ」
「了解ですわ」

お先にとセシリアは先に降りていった。芳佳と一夏はセシリアを追うように地上へ向かった。

轟音と共に砂煙が立ち上った。

「誰が地上に突っ込めと言った」

「す、すみません……」

「ごめんなさい……」

一夏はクレータを作るほど地面に突っ込んでいた。芳佳も一夏ほどでは無いが右足が泥濘ぬかるみに嵌まったように埋まっている。成功したのはセシリアだけだ。

ISのシールドバリアーのおかげで身体や機体には傷一つ無い。だが周囲のクスクスした笑いに心が傷付いた。

二人は地面から抜け出し、今度こそしっかり地上で止まった。

「まず織斑、武装を展開しろ」

「あ、はい」

「『はい』で十分だ」

「はい」

一夏は正面に人がいないことを確認し、突き出した右腕を左手で握った。そして、刀をイメージする。

鋭く、強く鞏固な武器。

一夏の手には『雪片式型』が現れた。

「遅い、0・5秒で出せ」

千冬は褒めずに叱った。

「次はセシリア、やってみろ」
「分かりました」

セシリアは左手を上げ、真横に突き出す。一夏とは違い直ぐに狙撃銃『スターライトmk3』が現れた。マガジンも既にセットされ、いつでも撃てるようになっていた。

「流石だな、だがそのポーズはやめろ。正面の敵以外にどこに撃つつもりだ」

「ですがこれは私のイメージを」

「直せ、二度も言わせるな」

「はい……」

千冬に睨まれ、セシリアは引き下がった。

「宮藤、お前もやってみろ」

「はい」

芳佳は同じく手を突き出し、武器をイメージする。だが、なかなか形を結ばず、手の中で光の粒子がさ迷っている。

「まだか？」

「は、はい！『シュネルファイアー』！」

やっと芳佳の手に『シュネルファイアー』が現れ、しっかりと握った。

武器の名前を言えば簡単に出てくるがこれはあくまで『初心者』がやるような方法だ。

「遅い、実戦で敵に待ってもらうのか？」

「す、すみません……」

芳佳は食い下がること無く引き下がった。

「もう時間か、今日の授業はここまでだ。織斑、宮藤、グランドを直しておけ」

「はい」

芳佳はスコップを二本持ち出し一夏に一本渡した。

「どうぞ」

「おう、ありがとな」

「手伝いますか？」

「いや、大丈夫だ」

「そうですか」

芳佳は頷いて自分の作った穴を埋めはじめた。

一夏はふと気付いた。セシリアや箒は彼に対して照れたり優しくしたりなど、他の仲間とは違った接し方をする。クラスメートに関してもそうだ。しかし芳佳は特に誰とでも同じように話し掛ける。

素で接する優しさに一夏は若干惹かれていた。

「どうかしましたか？」

一夏は思わず芳佳を見つめていた。

「あ、いや、楽しそうだなって」

「やっぱり手伝いますか？」

「いや、これくらい大丈夫だ」

「そうですか」

夜

ルッキーニは特にすることも無くゴロゴロしていた。

501に所属していた頃は色々な場所に秘密基地を作っていたがここでは出来ない。というより美緒とミーナから禁止された。

「退屈う~~~~」

コンコン

ガチャ

返事を待たずに誰が入ってきた。

「あんたが2組のクラス代表ね」

「んー、そうだけど」

「譲ってくれないかしら？」

「えー」

唐突の要求にルッキーニは露骨に嫌そうな顔を見せた。

「何よ、譲ってくれたっていいじゃない」

「でもねー、見た感じ残念賞っぽいからね」

ルッキーニはまじまじと少女の胸を見た。平坦でルッキーニと同じ

通称『断崖絶壁』だ。

「試しにかーくにん！」

「ぴゃっ！」

ルッキーニは素早く少女の後ろに回り込み、胸を触った。ルッキーニの予想していたよりはあったがやはり残念賞だった。

「ちよっ……何してんのよ!？」

「シャーリーくらいあつたら譲ってたけどね」

「うつつうつるさい!ととにかく譲りなさいよ!」

「しつこいなあ……!」

何か閃いたらしくルッキーニはニヤリツと笑った。

「じゃあさ、あたしの言うこと聞いてくれる？」

「いいわよ、無理じゃないならなんでも」

「それじゃあいよいよー」

ルッキーニは手の平を返すように態度を変え、軽く譲った。

「ん?あんたの要求は？」

「え、言ったよ。あたしの言うことをずっと聞くって」

「ずっと……?」

「じゃあ早速、ジュースでも買ってきて」

「!?!」

少女は漸くルッキーニの用件を理解した。あまりにも無茶な要求だ。

「ちよつ、私は一つだけのつもりで」

「じゃあクラス代表は譲らないよ」

「っ……」

少女は言うことを聞こうとしたが冷静に考えれば彼女のプライドはそう低くない。いくらなんでも屈辱的だ。

「ならISで実力勝負よ!」

「うえゝ、素直に言うこと聞いてよ」

「ISであんたが勝ったら何でも言うこと聞いてあげるわよ」

「……じゃあやるよ」

ルッキーニは面倒だと思いながら引き受けた。

「で、今やるの？」

「当たり前じゃない、善は急げって」

引き受けた直後、少女はルツキーニを連れてアリーナへやってきた。夜中にも関わらずギャラリーはちらほらと見られる。

「じゃあさつさとやる」

「いいわ——」

よ、と言う前に少女は青竜刀でルツキーニに突撃し、切り込んだ。ギリギリの位置で躲し、ルツキーニは少女から距離を取った。

「へー、でもこれはどう？」

少女は肩のアーマーを展開した。

ルッキーニは飛び上がり、『何か』を避けた。

見えない攻撃から避けながらルッキーニは少女に近づいていく。

「『龍砲』全弾回避なんて……なら！」

少女は迫るルッキーニに対して双剣の青竜刀を構えた。

ルッキーニはぶつかる直前、青竜刀を蹴って軌道をずらした。

「なっ！」

「隙あり！」

ルッキーニは両腕を突き出し、エネルギーを集めた。

「アツチェンディーノ！」

エネルギーが放たれ、少女は吹き飛ばされた。今の攻撃でシールドエネルギーが半分以下に減らされた。

「あちゃー、まだ残っちゃったか」

「そんなにやられると思うたら大間違いよ！」

少女は態勢を立て直し、再び青竜刀を構えた。そして、今度は少女から突っ込んでいった。

「いっけえええええ！！」

青竜刀を大きく振り上げ、一気に振り下ろす。ルッキーニは避けず、受け止めた。

「終わりよ」

「!？」

ルッキーニは殴られた。バランスを崩し身体が傾いた時に原因が分かった。

『龍砲』だ。

先程まで、どちらかのみで戦っていた。しかし少女は青竜刀でルツキー二の意識を向けさせ、『龍砲』の存在を掻き消していた。

「にゃあああ……」

エネルギーが尽きルツキー二は負けた。

「じゃあ約束通りクラス代表を譲ってくれるわね」
「うじゅじゅ……せつかく代表になれたのに……」

ルツキー二は仕方なく要求を飲んだ。

「そつえば名前教えて無かったわね」
「あー、確かに……あたしはフランチエスカ・ルツキー二」

「私は鳳鈴音、中国代表候補生よ」

続く

第拾肆話 かたい、ながい、つよい（後書き）

まず最初にお詫びがあります

鈴の『りゅうほう』の『ほう』は『砲』ではなく『口包』と書きますが携帯で変換しても出てきません……

なのでここでは龍砲と書かせていただきます

あとお知らせです

皆さんのおかげでPVが50000を超えました

もうすぐユニークも10000を超えます

なのでなんか記念に書こうと思います

見たいカップリングや場面などリクエストしていただければ書きます

一夏×アスカでプールとかバルクホルン×シンジで寿司屋とか……

無茶が無ければ全て書く予定です

もしよかったら感想にリクエストを書いてください、よろしく願います

次回

エイラ「さっぱり出番がないんだな」

サーニヤ「仕方ないと思う」

マリ「早くワンコ君と会いたいにや」

サーニャ「エイラの未来予知で見てみたら？」

エイラ「んー……………」

次回「ラーメンは醤油」

エイラ「は、半年後……………なんだな」

マリ「にゃっ……………」

第拾伍話 ラーメンは醤油

始業5分前。シンジと一夏はやや遅く登校した。

「おはよう、綾波」

「おはよう、碇君、織斑君」

シンジも一夏もクラスメートと親交を深め、気軽に話せるようになった。

「宮藤さん、おはよう」

「芳佳、おはよう」

「おはようございます。あ、二人とも聞きました？」

「何をだ？」

「転校生が隣のクラスに来るらしいですよ。しかも代表候補生の「へー」

代表候補生。このクラスには二人もいるが反応は

「あら、今更ながら代表候補生の転入とはどういうことかしら？」

「別にいいんじゃない。私は興味ないけど」

挑発と受け取ったり興味無かったりと人それぞれだ。

「一夏も今度のクラス対抗戦頑張らないとね」
「そうだな」

来月行われるクラス対抗戦。その名の通り1年1組、8組のクラス代表がぶつかり合うリーグマッチだ。ちなみに優勝したクラスには学食デザートの半年フリーパスが与えられる。これにクラスの女子が燃えている。

今のところ、一夏以外にクラス代表が専用機を持っているのは2組と4組。うち片方は国家代表候補生なので尚更気が抜けない。

「頑張ってください、一夏さん」

「ああ……………ん？」

ザワザワ

ザワ…………ザワ…………

何やら廊下が騒がしい。六人は廊下を覗いた。

隣の2組の前で二人の少女が揉めていた。

「だーかーらー昨日の試合は無効だって！いいからあたしの言うこと聞いてよー！」

「アンタねえ、試合開始前に確認取っていいって」

「言う前に突っ込んできたじゃん。だからむこー！」

必死に試合の無効を求めているのはルツキー二。前に一夏の部屋に隠れていた少女だ。

そしてルツキー二の我が儘にイライラしている少女。一夏は見覚えがあった。

「鈴………？」

「………一夏！」

少女はルツキー二との口論を切り上げ、一夏に駆け寄った。しかし、

「久しぶりー夏ー！」

「なっ………」

ルツキー二が少女を抜いて先にそばに駆け寄った。少女は無理矢理ルツキー二の袖を掴み向き合わせる。

「ちょっと！あんた一夏のなんなのよ！」

「別に知り合いつてただだよ。ね」

「いいから一夏から離れなさい！」

「うるさいなあ、鈴は。鈴こそ一夏のなんなのさ」

ルッキーニはジト目で鈴と呼ばれた少女を睨んだ。だが鈴は怯まずここぞとばかりに少ない胸を張り自慢するように語った。

「あたしは一夏の幼なじみのよ！あんと違って付き合いが長いのよ」

「そっか、一夏と鈴は付き合っムグッ」

鈴はルッキーニの口を塞ぎ、周りに聞こえないよう小声で呟く。
いわゆる脅しだ。

「あんたねえ……これ以上余計なこと口走ったら『甲龍』で顔面を握り潰すわよ」

「ムグ〜〜！！（ひい〜〜！！）」

ミーナや美緒よりは恐くは無いが命の危機に晒され、ルッキーニは必死で頷く。

「ったく……」

「あ、でもあたしだって夜這いして一夏と」

ダンッ

「「「ちよつと話を聞かせ」「」」

バシンバシンバシンバシンバシンバシンバシンバシン

連続して出席簿が頭に直撃した。振り向くとやはり千冬が立っていた。

「SHRの時間だ、さっさと自分の教室へ戻れ」

「す、すみません……」

「うにゃ〜……」

二人は千冬に睨まれすごすごと2組へ戻っていった。残る6人も再び怒られる前に戻っていった。

授業中

セシリアは授業に集中していなかった。授業そっちのけに先程の二人、鈴とルッキーニのことで頭がいっぱいだ。

『何なんですよ、さっきのお二人は！』

幼なじみと名乗る鈴。夜這いを公言したルッキーニ。

早くも一夏との関係を崩そうと使者がやってきた気分だ。まるでユーロトンネルが封鎖された時並にピンチだ。

『あのお二人は先程喧嘩していらっしやいましたが……まさか、一夏さんをどちらが今夜夜這いするか揉めていらっしやったのですか！？』

セシリアは更に焦り、慌てふためく。

しかも気付けば鈴は中国代表候補生、ルッキーニはイタリア代表候補生。最悪の場合、レイより強い可能性もある。

相手に勝る条件が見つからない。

「オルコット」

「ならばまずはお二方の気付かれぬうちに」
「……………」

バシン

箒も同じように二人のことを考えていた。

『やけに馴れ馴れしかったな…………』

鈴は堂々と幼なじみと言い張り、ルッキ―も夜這いをしたと告白していた。

『幼なじみ私だ、しかも夜這いだと！？あの猫みたいな奴に何がで

きる……』

鈴よりも一歩進んだルッキ二を目の敵にするように思い浮かべた。逆にはらわたが煮え繰り返った。

『あいつ、あのひょうきんものめ……シバいてやる』

もはや箒が完全な悪。箒はギュツと手を握り締めた。

「篠ノ之、答えは？」

「っ……………聞いてませんでした……………」

バシン

またレイも二人と同じように気になっていた。特に鈴には警戒心を抱いていないがルッキ二には憎悪しかぶつけていない。

『碇君、ここ最近大人びたと思ったら……………』

レイの中のルッキーニは猫のようにシンジに靡き、レイや芳佳を見下すような存在だと認識した。

レイはシンジとあれ以降親密にはなれず、今まで行動できなかったことを悔やんだ。

『もしかして……………もしかしたら碇君はあの女に脅されてるんじゃない』

ルッキーニとシンジはシンジの布団に入っていた。ルッキーニは満足げな表情だがシンジは罪悪感に包まれ、うなだれている。

『もしさ、このことばらしたら大変だよね。世界中も震撼しちゃうよ』

『うん……………言わないよ』

『じゃあぜったいたい黙っててね！あ、一夏も同じくね』

『ああ……………』

（男なんてちよろいちよろい、にやはははは〜！）

注意：レイの妄想です。実際のルッキニーはこんなこと多分しません

『とりあえず碇君と話をして』
「綾波、この答えを」

レイは思考を中断し答える。

「はい、ATCです」
「残念だな、それは前のページだ」

バシン

そして芳佳は

『ルッキーニちゃん、一夏さんと知り合いだったんだ』

思い返してみればルッキーニと会ったのはこの世界、IS学園に来て初めてだった。

知ってる仲間が一人増え芳佳は安心した。

『そういえばルッキーニちゃん、一夏さんとシンジさんの部屋に夜這いしたって言うけど……』

芳佳は夜這いの意味が分かっていなかった。しかし、三人が一瞬で怒りを見せるのだからおそらく二人とルッキーニの関係だろうと考えた。

『まさか、ルッキーニちゃんって……』

「宮藤、これを簡単に要約しろ」

「あ、はい。えっと……ISは世界一強い？」

「そつだ、それと発言には自信を持て」

芳佳だけ出席簿アタックは免れた。

「一夏のせいだ」

「一夏のさんのせいですわ」

「な、なんだ二人とも？」

箒、セシリア、レイはあの後も真耶から注意8回に加えて千冬の出席簿アタックが5回もあった。

「とりあえずご飯にしましょ」

「そうですね」

「ああ、そうだな」

一夏達は食堂へ向かった。その間三人はまたぶつぶつ呟いていた。食堂は相変わらず混んでいた。

その中から鈴とルッキー二が近づいてきた。

「待ってたわよ、一夏！」

「一緒に食べる？」

鈴のトレーには醤油ラーメン、ルッキーニのトレーにはカルボナーラが乗っていた。

「とりあえずどいてくれ。食券出せないし」

「う、うるさいわね！」

「へいへい」

ルッキーニと鈴は横に退け、通路を開けた。
レイはすれ違う瞬間、チラッと鈴のラーメンを見た。

「……………」

「な、なによ」

「……………ふっ」

鈴は逃げようとするレイの肩を掴んだ。

「あんた今鼻で笑ったわよね？」

「ええ、醤油ラーメンだからよ」

「醤油を馬鹿にする気？」

「ニンニクラーメンこそ至高のラーメンよ」

「豚骨味噌塩醤油を超えてニンニク？邪道ね」

「貴方こそ素朴過ぎる味も考え物だと思っわ」

何故かラーメン論争が始まった。

「中国代表候補生が正しいラーメンと言うものを理解してないなんて呆れたわ」

「ラーメンのラの字すら知らない日本人が何言ってるのよ」

「それにチャーシューも、私が思うにチャーシューは邪魔よ」

「はあ？チャーシュー抜きはラーメンなんて美味しい訳無いでしょ」

論議はヒートアップし、更には具材の存否にまで発展した。このまま二人の話を眺めているだけで昼休みが終わってしまいそうだ。

「おばちゃん、きつねうどん1つ」

「わ、私もそれにする」

「えーと、僕は素麺を」

「じゃあ私はたぬきそばをお願いします」

「わたくしはミートソースで」

五人はそれぞれ麺料理を注文した。

「最早ラーメンは日本各地で発展して中国には真似できないくらい種類はあるのよ」

「そもそもそんな中国を真似したところで本物のラーメンとは言えないのよ！」

続く

第拾伍話 ラーメンは醤油（後書き）

作者は醤油ラーメン派です
なんとなくラーメン論争をやってみたくなったので書いてみました
が……

二人ともこんなにヒートアップするかね？

この世界に迷い込んでからレイがやや好戦的になってきてます
普通にしていれば無用な争いは生まないはず……

さて、前回から募集しているカップリングですが今のところこんな
感じです

- ・ 東×ウルスラ
- ・ ルツキーニ×一夏

9月1日AM0時まで受け付けているのでまだ見たいカップリング
があるかたは感想までどうぞ
因みにまだ未登場のアスカやバルクホルン、ラウラやサーニヤなど
も可能ですが話の都合上、公開はちょっと後になります

では次回もお楽しみに

リーネ「芳佳ちゃん凄いよね、専用機持ちって」

芳佳「でもみんなより下手だから宝の持ち腐れだよ……」

美緒「専用機が欲しいのか？」

リーネ「あ、いえ、違います」

美緒「遠慮するな、じきに来るさ」

リーネ「？」

次回「幼馴染みの特権？」

ミーナ「最近私達の出番が無いわ……」

第拾陸話 幼馴染の特権？（前書き）

エーリカ「ほつといてもいいの？」

シャーリー「大丈夫さ」

エーリカ「人の恋を邪魔してでも？」

シャーリー「それが面白いんだよ」「ニヤニヤ

エーリカ「確かに」ニヤニヤ

第拾陸話 幼馴染の特権？

ラーメン論争も一先ず収束し、鈴とレイも席に着いた。誰も熱くなりすぎとは突っ込まない。

「貴方、さっき織斑君と幼なじみって言ってたわよね？」

「そうだけど」

「そういえば篠ノ之さんも幼なじみよね？」

「え？」

「あーえつとだな……」

このままでは誤解を招くと思い、一夏は慌てて二人に事情を説明する。

篤は小学校入学以前から一緒にいたがある事件により小学校4年の終わりに転校していった。

その後、小学校5年の時に鈴が転校してきた。これを機に仲良くなり、しかし中学校2年の時に故郷中国へ帰国してしまった。

二人はすれ違うように転校してきたので面識は全く無い。

「そうか」

「ふーん」

篤と鈴は互いに睨み合う。暫くの沈黙の後、二人は手を差し延べ握

手をした。

「はじめまして、これからよろしくね」

「ああ、こちらこそ」

二人は笑っているがあくまで上っ面だけ。ピリピリとしたオーラが二人の間で淀み、蟠りが生じている。

「そっついや一夏、クラス代表なんだって？」

「ああ」

「あ、あのさあ、もしよかったらISの操縦を見てあげても」

「結構だ！」

「結構です！」

箒とセシリアは横槍を入れ勧誘を断った。

「な、なによ！あたしは一夏に言ってるの」

「一夏に教えるのは私だ。お前が教えることなど無い」

「貴方は二組、部外者の介入はお断りですわ！」

「うっさいわね！」

ギャーギャーワーワー騒ぎ立て、やがて罵り合いは口喧嘩に発展した。

芳佳とレイはその論争を対岸の火事のように見物している。

しばらく論争が続き、レイは口を開いた。

「揉めているところ悪いけど」

「「何?」「」」

「あれはいいの?」

レイは入口を指差した。

そこには一夏を連れだそうとするルツキーニがいた。

「一夏、早速訓練しよ」

「い、いいのか? あいつらは」

「いいっていいって、あたしは近接戦闘の肉弾戦が得意だし、一夏だつてブレードの近接戦闘でしょ?」

「そうだな」

「なら一緒に……!」

ルツキーニの背筋に悪寒が走った。恐る恐る振り返るとそこには箒、セシリア、鈴がものすごい剣幕で仁王立ちを構えていた。

「漁夫の利か……考えたな」

「ですが、我々が見逃すとても?」

「徹底的に痛め付けてやるわ」

「んじゃ一夏、また今度ね〜！」

ルッキーニは一夏に別れを告げ、脱兎の如く逃げていった。三人も逃がすまいと追い掛けていった。

「大変そう……」

「全くね」

しかし、騒ぎはレイにまで飛び火した。

「ヤッホー、シンジ〜」

「あ、ルッキーニ」

「どう？ 捗ってる？ 日本代表候補生の指導は？」

「うるさい」

レイはルッキーニを睨みつけた。先程の篤達と同じように怒りのオーラを感じる。か弱い生き物だったら死んでしまいそうな空気だ。

「今日は気分を変えてあたしに教わって」

「結構よ」

「えー、いいじゃん」

「貴方は宮藤さんの指導していればいいじゃない」

「芳佳は下手くそだから上達しないもん。シャーリーもそれにつきつきりだしさ。それに比べてシンジなら成長する見込みがあるしね」

「なら貴方は一人で訓練してなさい」

「うえー、日本人ってみんな辛辣でヤダー」

レイは冷たく切り捨てるがルッキーニはしつこく食い下がり続ける。

「ならここはIS学園らしくISでやってみる？」

「……なんでアジアってバトル好きばかりなんだろう」

レイの提案には乗らずぶつぶつと不満を漏らす。

「ならいいわ、碇君は私が」

「あー、待った待ったやりますやらせてくださいー！」

「さよなら」

「にゃー……」

勝負は五分足らずで終わった。レイの一方的な執拗な攻撃によりルツキーニは負けた。

ルツキーニは涙ぐみながらアリーナから去っていった。

「碇君、やりましょう」

「あ、うん……」

「ぐずっ……ひっく……」

後ろ髪を引かれる思いでシンジは練習を始めた。

しかしルツキーニは諦めていなかった。
レイに知られずにシンジに会おうとルツキーニは男子部屋の前まで
やってきた。

「よし、誰も見ていない……」

ルツキーニはドアノブに手を掛けた。
しかし、それより先に誰かが手を掛けていた。

「あ、あんた！」

「しーっ！」

「っ……何してんのよ……」

思わず鈴は叫んだがルツキーニに注意され声のトーンを落とした。

「鈴こそあたしの真似して夜這い？」

「ち、違うわよ！ただ……あのシンジって奴に部屋交換を」

「なるほど。つまり夜這いの発展系だね」

「だからあんたと一緒にしないでよ！」

ガチャッ

「「！」「」

ドアが開いた。

二人は隠れようとしたが近くに隠れられる柱がない。隠れ場所を探している隙に部屋から誰か出てきた。

しかし出てきたのはシンジでも一夏でもない。

「……………」

レイだった。

「さっきからうるさい」
「あんたねえ……………」

「レイも抜け駆けして夜這いかあ」
「違うわ」

微塵の恥じらいを見せずレイは否定した。

「とにかく帰ったら？」
「あたしはシンジと一夏に普通の用事があって来たの」
「あたしも」
「……………入りなさい」

レイは門番のようにドアの前から立ち退き二人を招き入れた。

鈴は入るなりツカツカとシンジに迫った。

「ちょっといいかしら」
「な、何？」
「あたしと部屋交換しなさい」
「何で？」
「あたしと一夏は幼馴染み、あんただってあいつと幼馴染みなんですよ」
「まあ、そんな感じだけど……………」
「ならいいわよね」
「ダメよ」

二人の間を割ってレイが断った。

「あんたに拒否権は無いわよ」

「貴方にも決定権は無いわ」

「いいじゃない、あんただってシンジと過ごせるなら」

「確かにいいかもしれないけど篠ノ之さんが黙ってないわよ」

二人の言い合いに更にルツキー二が割り込んできた。

「ねーねーそんなに二人で言い争っても決定権はシンジなんですよ」

「そうね」

「まあ普通そうよ」

「ならシンジが決めちゃえばいいじゃん」

「「！」「」」

二人は首だけ動かしてシンジを見る。ただならぬ視線に思わず身が縮こまる。

「碇君、勿論ノーよね？」

「イエスって言わないとどうなるか分かってるわよね？」

「あ、その、えっと……」

シンジはこの世界で初めて究極の選択を迫られている。

もしノーと言えは

『シンジなんて死んじまえ!』

殺される。

もしイエスと言えは

『私の気持ちを裏切るなんて最低よ……』

殺される。

生きる道は閉ざされた。

「ほら、首を縦に振りなさいよ!」

「碇君、横に振りなさい」

「いたいいたいいたい!」

二人は我慢できずシンジの顔を無理矢理動かして選択を迫る。

一方その横では

「た、助けなくていいのか？」
「いいからいいから」

ルッキーニは三人の争いを無視し、一夏にアプローチする。一夏もシンジを助けたいと思っているが巻き込まれれば確実に命を落としてしまう。

「ところでさ、鈴は幼馴染み幼馴染みって言うてるけど昔はどうだったの？」

「昔かあ、色々あるな」

「どんなのどんなの？」

ルッキーニは宝石を見つけた子供のように好奇心満ち溢れた表情で尋ねる。

「そついや昔、ある約束したな」
「！」

鈴は約束という言葉に反応しシンジから手を離し一夏に急接近した。

「本当！？」

「ああ、料理の腕が上がったら毎日酢豚を奢ってくれるってやつだろ？」

「……………は？」

「すぶた？」

自信ありげに言ったが周囲の空気が凍りつく。自分がKYな発言をしてしまったのでは無いかと一夏は思ったが、記憶には間違いなかった。

「り、鈴？」

「最低っ！女の子との約束すら覚えてないなんて、そんなの男でいる資格なんて無いわよっ！！レンガの角に頭ぶつけて死ね！！」

鈴は涙を散らしながら罵声を浴びせ、部屋から出ていった。
静まり返って漸く一夏は事の重大さに気付いた。

「まずい…………怒らせちゃった」

「あーあ、やっちゃった」

ルッキーニもばつが悪そうに呟く。

「……………織斑君」

「ん……？」

「最低ね」

レイも珍しく罵る。

一夏はこの時、直ぐに謝ればよかったと思ったが行動には移さなかった。

続く

第拾陸話 幼馴染の特権？（後書き）

鈴を怒らせてしまった一夏。

そのままクラス対抗戦が始まり戦いはヒートアップする。

そんな中、イレギュラーが侵入し二人を狙う

果たして二人の運命は！？

次回「烈火の怒り」

次回もサービスサービスウ！

第拾漆話 烈火の怒り（前書き）

ルツキーニ「クラス代表戦の始まり」

芳佳「イレギュラーってまさか……」

第拾漆話 烈火の怒り

月は変わり5月。

あれから鈴の機嫌も直らず会う度に威嚇してくる。

ルッキーニも空気の気まずさに怯えて二人に手を出さなくなった。一部の女子が落胆したり歓喜の声を上げていたのは余談である。

そしてそのままクラス代表戦当日を迎えた。

運悪くも一夏の最初の対戦相手は二組の鈴と当たった。

初戦はやはり一組VS二組。

しかも専用機持ちということ注目されており、アリーナは満席。入れなかった生徒らはモニターから生中継されるらしい。

二人は向き合ってから数分経ったが会話を交わすことなくじっと睨み合う。

「一夏、謝るなら少しはダメージ軽くしてあげるわよ」

「そんなのいらねえよ。全力で来い」

「一応言っ たわよ」

鈴は笑みを浮かべる。ただし優しくではなく鋭く。

『それでは両者、試合を開始してください』

ブザーが鳴り響く。

鳴り終えたと同時に二人はぶつかった。

一夏は『雪片式型』で鈴の青竜刀を受け止める。だが鈴の力は強く弾き返された。

一夏は消耗戦だけは避けようと距離を取ろうとする。

「甘いつ！」

肩のアーマーが開く。

直後、見えない何かに殴られ危うく倒れそうになる。なんとか立て直すが鈴の攻撃は止まらない。

美緒は第二アリーナの外にいた。

にも関わらず激しくぶつかる音がよく聞こえる。

「意外と派手にやってるな。あの時とは大違いだ」

アリーナの壁を眺め、フツと力を抜くように笑った。
美緒の携帯が鳴る。笑顔を引っ込め美緒は電話に出た。

「もしもし、私だ」

『今どこにいる？』

電話の相手は名乗る間もなく尋ねる。だが美緒は相手が誰か分かっている。しかも相手はやけに慌てている。

「IS学園のアリーナだが？」

『なら話が早いわ！今すぐ生徒の避難させなさい！』

「どういうことだ？」

『未確認飛行物体がIS学園に向けて』

アリーナから爆音が聞こえた。

見るとアリーナから煙が上がっている。ただの土煙だが美緒はすぐにアリーナへ入っていった。

「未確認飛行物体だと……？」

『今解析結果が出たわ！』

電話の相手は答える。

「パターン赤、ネウロイよ」

アリーナの中心に現れた異形。

そいつはアリーナの遮断シールドを貫通して侵入してきたものだ。遮断シールドは硬く、IS同士の戦闘では碎けることはまず無い。だが異形は安々と破壊しアリーナの中央へ現れた。

「なんなんだ、こいつ……」

「よくわかんないけど間違いなく敵ね」

普通のISとは違い、全身が黒い装甲に覆われている。操縦者は普通、装甲で覆われることはない。

人間味を欠いたロボットのように顔を動かしたり息をしている動作も無い。

まさしく異形と呼べる。

『織斑君！鳳さん！今すぐアリーナから出てください！先生達がISで制圧に行きます！』

真耶から退去勧告を促される。が二人は指示に従わない。

「いや、先生達が来るまでに俺達で倒します！」

『ちよちよっと！織斑君！ダメで』

一夏は真耶とのプライベートチャネルを切り、異形と向き合う。

「いいな、鈴」

「誰に言ってるのよ」

「ミーナ中佐！」

エーリカ、ルッキーニ、シャーロットはミーナと会った。他の生徒は避難しようとアリーナの出口を目指している。

「今アリーナにいるISって」

「ええ、ネウロイよ」

ミーナは落ち着いて答える。

「だったら」

「これをみなさい」

ミーナはディスプレイに第二アリーナのステータスチェックを表示した。

「遮断シールドがレベル4、扉も全てロックされているわ」

「ならあたしの『アツチエンディーノ』で」

ルッキーニがシールド破壊を提案するがミーナは頷かない。

「例え破壊できたとしてもシールドは瞬時に再構築されて、ルッキーニさん一人しか突入できない。しかもルッキーニさんはエネルギー不足でネウロイと戦うのよ。これは流石に了承できません」

「……じゃあ二人に任せるの？」

「ええ、今はね。急ピッチで技術部の生徒がアクセスしてロック解除を進めているわ。解除が出来次第、私達は突撃隊としてアリーナに突入するわ」

「了解！」「」

三人はミーナと共にアリーナへ向かった。

「おらっ！」

一夏は『雪片弑型』で異形に斬りかかるがまた躲された。何度も攻撃できるタイミングが巡って来たが全て失敗に終わっている。

シールドエネルギーも少なく、『零落白夜』を放てるのも一回が限界だ。攻撃も一発も入ってはいけない。

「鈴、あとエネルギーはどれくらいだ？」

「180、結構厳しいわね……」

攻撃はレーザーのみ。あとは避けるか防御と行動パターンは至ってシンプル。だが一つ一つが長けており、その実力は二人以上だ。

「どうするか……」

『織斑、凰、聞こえるか？』

「さ、坂本先生？」

オーブンチャネルから繋いで来たのは美緒だった。見ると人がいなくなつた観覧席に立っていた。

『とりあえず戦いながらでいい。私の話を聞け』

「はい」

『結論から言つとあいつは人ではない』

二人は一瞬目を丸くする。

ISは本来人が乗らなければ動かない。無人機などありえない。だが言われてみれば異形からは人間らしさを感じることができない。行動パターンの少なさ。人は考え、パターンを戦闘中でも増やせる。逆にロボットなどはそういうプログラミングが無ければほとんど学習しない。

『そいつはネウロイといういわゆる生物兵器だ。おそらくISを破壊してもネウロイが破壊されなければ活動は続く』

「つまり、ISではなく操縦者を倒せと言うことですか？」

『ああ、人ではないから思う存分に攻撃しろ』

「分かりました」

一夏は通信を切る。

「全力で行くぞ」

「全力も何も当たってないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。言ったからには必ずやりなさいよ」

シンジ、レイ、芳佳、リーネは避難の列から抜け出してアリーナへ戻ってきた。

アリーナにはやはり一夏と鈴、そしてネウロイ。しかしネウロイの矛先は別の方向を向いていた。

見ると反対側に箒がマイクを持って何やら怒鳴っている。

「まずい！」

レイは一人先に走り、反対側へ向かう。しかし、このままでは間に合わない。

「鈴、やれ！」

「わ、分かったわよ！」

鈴はネウロイに向かって『龍咆』を放とうと衝撃砲を構える。その間に一夏が割り込んできた。

「一夏さん!？」

「一夏!？」

「ちよっ!何してんのよ!どきなさいよ!」

「いいから撃て!」

邪魔になっているのに退こうとしない。鈴は躊躇ったが『白式』の背中に向かって『龍咆』を放った。

同時に一夏は『瞬時加速』を発動した。

『瞬時加速』を使う際、後部スラスタ翼からエネルギーを放出し内部に取り込み、圧縮して一気に放出する。その時に生まれる慣性エネルギーを利用して加速する。

一夏は鈴の『龍咆』のエネルギーを取り込み、『瞬時加速』へ転用したのだ。

しかし、防御無しで『龍咆』を受け一夏の身体は悲鳴を上げる。だが一夏は構わず加速した。

『雪片弑型』が輝く。

エネルギーの刀となった『雪片弑型』を振り上げ、一撃を放つ。渾身の一撃はネウロイが乗るISの右腕を切り落とした。だがネウロイは生身の腕を伸ばし、一夏を捕らえた。

「っ！」

「「「一夏！」「」」

しかし、一夏は焦らない。ネウロイに対して余裕な表情を見せる。

「狙いは？」

『完璧よ』

『完璧ですわ』

5本のレーザーがとネウロイの身体とそのISを貫いた。

セシリアのブルーティアーズとレイの零号機の集中砲火だ。

遮断シールドは腕を切り落としたときに放った余波で破壊していた。

二人は砲身を下ろし、ふうと息を吐いた。

『貴方も無茶するわね』

『全く、ギリギリのタイミングでしたわ』

「二人ならやってくれと思ったさ」

芳佳達も危機が去ったことに安堵した。

「よかったー……」

「流石一夏さん、凄いです……」

「さて、とりあえず戻ると」

ウィンドウに警告表示が現れる。

『敵ISの再起動を確認！ロックされてます！』

「っ！！」

急いで振り返るとネウロイはまだ残っていた。先程まで人を象っていたが上半身は無くなり、剥き出した赤い宝石、コアはひびが入っている。

再生はできないもののまだ生きている。

ネウロイは残った腕を伸ばし、レーザーを放った。

一夏は迷うことなく飛び込み、レーザーを切り裂き、そのままネウロイを完全に両断した。

続く

第拾漆話 烈火の怒り（後書き）

一夏「電話の相手って誰だ」

シンジ「坂本先生と知り合いだったんだ」

第拾捌話 知られぬ真実（前書き）

リーネ「今回でクラス対抗戦は終わりだよ、芳佳ちゃん」

芳佳「今回ルッキーニちゃんばかりで私の出番無かった……」

第拾捌話 知られぬ真実

結局クラス代表戦は中止になった。

鈴と一夏の決着もつかなかったが鈴は再戦を希望しなかった。試合を通して打ち解けることができたからだ。

しかし鈴とルッキーニの仲は変わらず、鈴曰く『泥棒チビ猫』とのこと。

そして今も騒いでいる。

「一夏、鈴が今キ」

「余計なこと言うんじゃないわよ！」

「にはは」

ルッキーニは相変わらず鈴をからかっていた。

「保健室で騒ぐなよ……」

「いいじゃん、あんただけなんだし」

「保健の先生だっていないしさ」

「……………」

どうやら一夏を怪我人と扱っていないらしい。少し心が傷ついた。

「とにかく、あんたは出ていきなさいよ!」

「出ていったらまたさっきの続きしちゃうんでしょ?」

「しないわよ!絶対にしないわよ!」

ぎゃあぎゃああと騒ぐ二人に気が休まらない一夏だった。

IS学園地下

入口は厳重なロックが施されており、ある権限を持つ関係者しか入れない。

「ISの解析結果が出ました」

「どうだ?」

「はい。これは普通のISではありませんでした」

「普通のIS?」

「ISのコアが外部、ネウロイのコアと共有する構造になっていた

んです」

「ネウロイは」

「コアを残してあとは何も……」

真ん中にある解剖台のような机に置かれた異形のIS。

人を象っていたネウロイはコアを残してドライアイスのように無くなっていた。

「そのコアは普通のネウロイのコアとは違うのか？」

「はい、以前譲り受けたコアのサンプルとは違い、人工的に造られたものでISのコアとネウロイのコアの両方の性質を持ち合わせています。新種のネウロイと捉えることも可能ですが……」

「そうか……ISとしてのコア情報は？」

麻耶はコンソールを操作し検査結果を表示した。

『NO DATA』

「コアはこの国にも所属していないものでした」
「……………なるほど」

千冬は頷き、電話を取り出した。普通の電話ではなく、ある施設との直通電話。盗聴を恐れてこのような回線を設けている。

「やはりあそこに伝えるべきだな」

とある施設の会議室
部屋は暗く、真ん中ある机に資料が並べられている。その机を囲む

ようにして何人が話し合っていた。

「今回、IS学園に侵入したネウロイはISを装備していたわ。ネウロイが人型から可能だったと考えるべきか……」

「ネウロイは使徒とは違って遺伝子も全く違うのよ」

「もしくはネウロイ専用ISを開発した」

「有り得るわね。そもそもIS自体がどの国にも所属していない未確認のISだった。その時点で今回ISはネウロイ専用になられた可能性は高いわ」

「……ところで現在はネウロイと使徒、いくつ倒したっけ？」

「使徒は第五の一体、ネウロイは今回を入れて4体よ」

「第四の使徒は？」

「未だに未確認。既に倒された可能性が強いです」

「第五の使徒のコアを差し出したIS学園が所有している筈も無い

……」

「一つだけ可能性があります」

「どこ？」

女性は男性の方に振り返った。

「ISの開発者、篠ノ之束です」

「……なるほどね」

彼女の中でようやく結論がまとまった。

「今回の事態以外にも彼女が全てを知っている」

「早速諜報部に動いてもらいますか？」

「無駄ね、彼女は誰にも見つけれない。やるだけ無駄足よ」

「篠ノ之博士と長期間接触していたシンジ君なら」

「それしか無いわね……」

女性のはあため息を吐いた。

「なるほど、分かった」

千冬は専用回線の電話を切り、ふうと息をついた。

「非常勤という形で葛城がやってくるようになった。それとNERVの分析班も来るそうだ」

「輸送はしないんですか？」

「外には出すことは控えたい。万が一事故が起きれば機密事項が漏洩し世間を騒がす。詳しい分析さえ済めばあとはバラバラにして持ち帰ることもできる」

今回の事件で先生には箱口令を出し、生徒には『暴走した実験ISが侵入した』と説明しネウロイの存在は全く言わなかった。

「しかし、ネウロイといい、使徒といい……これらは一体何なんでしょうか……？」

麻耶は素朴な疑問を投げかけた。千冬は一瞬沈黙し、口を開く。

「さあな。ただ我々の敵であることは間違いない」

千冬もそれが何なのかは知らなかった。

「何だと？」

「ええ、面倒くさいことになったわ」
「本当にしつこい奴だな」

美緒とミーナは国際IS委員会に所属するトレヴァー・マロニー大
将からの通達を読んで苦笑した。第501統合戦闘航空団の時から
何が気に入らないのか彼とは仲が悪い。

通達の内容は今回暴走したネウロイとそのISの引き渡しだ。

「まだ委員会にすら公開してないのに」
「コアは織斑一夏に破壊され残ったISも損傷が酷く調査不可。証
拠はNERVに引き渡したと言えればいいだろ」

美緒は伝令を細かく破り、ごみ箱へ捨てた。

「それで済むかしら？多分証拠を見せないと左遷を盾に迫る筈よ」
「なら最高機関のNERVという最強の槍で突けば問題無い」
「そうね、NERVなら手出しできないでしょうし」

「そうだ、あの件は伝えたか？」
「ええ、もちろん」

ミーナはディスプレイを呼び出していくつかの個人データを表示した。

「ゲルトルト・バルクホルン、ラウラ・ボーデヴィツヒ、式波・アスカ・ラングレー、それと今いるエーリカ・ハルトマン。通称ドイツ銃士団と言われているわ」
「流石Wエース。まさかここで名が上がるとはな」

その頃
「へっくしゅん」
「どうした？」

エーリカがくしゃみをした。

「きつとトゥルーデがなんかまた噂してるんだろうな。ああやだな

あ……」

「もうすぐ来るらしいからな」

「……えっ!？」

エーリカは素っ頓狂な声を上げた。

「と、トゥルーデが来るの？」

「またガミガミ言われるのが恐いのか？」

「うだー、せつかく一人でのんびりできてたのに……」

「のんびり、か……」

シャーロットはエーリカの周りを見て頬が引き攣った。ベッドの周囲はいつもと同じように物が散乱し汚い。それだけでは止まらずシャーロットの範囲まで侵食している。

「いくらなんでものんびりし過ぎだろ……」

「これが私の普通」

某所

ここは存在するのか分からない場所だ。

暗い空間に漆黒のモノリスが七つそびえ立っている。

刻まれているのは禁断の果実を表す林檎と蛇、SEELEの紋章だ。
その下には01から07まで数が刻まれている。

「まさか使徒がこの世界まで来ていようとは」

04は驚きを交えて呟く。

「我々として予想外のことだ」

02も同じくと賛同する。

「更には使徒を上回るネウロイ。エヴァと同等の力を有するIS」
「厄介であり、しかし計画への近道でもある」

05、07は期待と苛立ちの感情を込める。

「この世界で儀式を行うにはISが不可欠だ」
「だがISのコアはブラックボックスだ」

03は提案し、だが06は待ったをかける。

「ならば、我々で作るのみだ。エヴァから作り出すISを」

01であるキールは結論付けた。

少年は呟いた。

「時は熟した。運命の歯車ははまり、回り続けたまま二度と抜けなくなる。君らのおかげでね」

続く

第拾捌話 知られぬ真実（後書き）

漸く一巻分完結しました

いやー長かった……これほど長くなるとは……

次回は本来ならシャル、ラウラ転入の予定ですが番外編をアップする予定です

まだラミエルを倒してない

マリ、エイラ、サーニヤを出してない

リクエストの束×ウルスラもまだアップしてない

とりあえず同じように週一のペースで更新していきます

第拾玖話 ドイツ銃士団（前書き）

シャーリー「とうとうあいつらが来るぞ」

エーリカ「嫌だなあ……………」

ルッキーニ「今回は比較的短いよ」

第拾玖話 ドイツ銃士団

五月のある休日。

シンジと一夏はIS学園の端の草むらに寝転んでいた。
二人はただ清々しい空を見上げていた。

「海が綺麗だね」

「そうだな」

「僕のいた世界は海が赤くて泳げなかったからうつらやましいよ」
「……赤かった？」

一夏は何故？と疑問を抱きシンジに尋ねた。

「僕が生まれた頃にセカンドインパクトっていうのがあって人間の半分が死んだんだ。勿論人間だけじゃなくて海の生き物も。だから生き物の血で海は赤くなって泳ぐことなんてできなくなってたから……」

「酷い大災害だったんだな……」

「うん………ん？」

シンジは水平線の向こうに黒い点を見つけた。その点は徐々にこちらへ向かってくるように大きくなっている。

「まさか……使徒!？」

直後、シンジの携帯が鳴った。シンジは直ぐに出た。

「もしもしミサトさん？」

『シンジ君、IS学園に向かって使徒が来ているわ!』

「こちらからも見えましたが!」

『ならいいわね?外部でのISの起動を許可します。レイにも連絡してるから先に向かつて!』

「分かりました!」

シンジは電話を切って、ISを起動した。

「それじゃ一夏、行ってくる」

「え、ちょっ、シン」

シンジは一夏を置いて出撃していった。

使徒の姿をズームして画面に映し出す。四方に伸びる針金がいくつも重なり合って形を成している。

以前シンジが墓参りに行った帰りに遭遇した使徒と同じだ。

「確かコアは顔じゃなくてあの下の赤い球体だった筈……あ」

シンジは後ろから追いかける二つの反応を捉えた。

「綾波と……………一夏!？」

ミサトはシンジ達よりも使徒の近くにいた。しかし彼女に倒す術は無くシンジ達に殲滅を指示した。

「現在初号機優先のタスク01を発動したわ。零号機もバックアップ

プについてる」

『いえ、既にタスク02を発動中です』

「タスク02!？」

ミサトは車の窓から空を見上げた。

一機の戦闘機、ではなく武装した輸送機が使徒の上を通過している。真上に過ぎた直後、キラッと何かが光った。

「行くわよ」

「ああ」

「分かっている」

輸送機から三機のISが投下された。使徒はISを敵と判断し、排除しようと身体から槍を放った。

だが、使徒から見ればISは米粒のように小さく槍と槍の間を縫って近づいてくる。

「そんなもの当たるかつ！」

黒のISに乗った少女は使徒の槍を何かで受け止めた。少女は槍を持ち直し、投擲し返した。

使徒の顔が歪んだ。と思った直後、顔ごと空間を裂くように割れ攻撃が放たれた。

海から十字の水柱が噴き出す。少女が投げ返した槍も消された。

「まずは顔よ！」

赤のISに乗った少女は持っていたボウガンの照準を使徒の顔に向けた。

素早い一撃を放ち、槍は使徒の顔を貫いた。

使徒は顔を失い、崩壊が始まる。が、直ぐに足は元に戻りしゃんと直立した。

最期の抵抗とばかりに使徒はコアを振り子のように振り上げた。

「だが、これで終わりだ！」

緑のISを操縦する少女は背中の機関砲を使徒に向ける。エネルギーが収束し銃口が輝く。

そして一撃を放ち使徒のコアを貫いた。

使徒は爆発し、跡形も無く砕け散った。

『状況終了、使徒は消滅。三機共に損傷0。これより帰投します』

何もできなかったシンジ、一夏、レイは先にIS学園へ引き換えしていた。

使徒殲滅を終えた三人も落ち着いたままIS学園へ着陸した。赤の少女は先にISを解除し、シンジの前に立った。

「久しぶりね、バカシンジ」

「久しぶり……アスカ」

「今回もダメダメだったけどまああの時よりはマシね」

「あ、うん。ありがとう……」

「にしても……えこひいきは相変わらずね」

レイは興味なさそうにベンチで座ってじっとしている。相変わらずの態度にアス力は苛立った。

「彼らが世界で唯一ならぬ唯一の男子操縦者か」

「そうよ、トゥルーデ」

「そうか……貴様か」

すると銀髪の少女は一夏に近付き、

パンッ

一夏の頬を平手打ちした。

「！」
「！？」

一夏だけでなくシンジも少女の行動が理解できなかった。アスカとゲルトルートはやれやれと呆れている。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど！」
「ラウラ、それ以上はやるな」
「……分かった」

ラウラと呼ばれた少女は謝罪も無く去っていった。
すれ違い間にアスカはラウラに告げた。

「いくら憎いからって初対面で殴るのはやりすぎよ」
「ああ、だがこうでもしなければ収まらなかった」
「そう……」

アスカもこれ以上言うことはないと言を閉ざす。ラウラはそのまま角を曲がろうとした。

しかし誰かと出会ったらしく、足を止めた。

「フラウ、こそこそして何をしている」
「ちょ、ボーデー！」
「フラウだと？」

ゲルトルートは角の向こうから一人の少女を連れ出してきた。
隠れていたのはエーリカ・ハルトマンだった。

「あら、エーリカ」

「トゥルーデにアスカまで……ドイツ銃士団揃い踏みじゃん……
……ってみんな何で私を囲むの？」

アスカ達はエーリカを囲んだ。

「弛み過ぎてるな」

「きのせい」

「ドイツ軍人たるもの、もっとシャキツとしろ」

「やだ」

「こんな腑抜けがドイツ銃士団のトップだなんて……」

「でもこれが事実だよ」

三人が何かを言う度に口を挟むが三人は全く耳を貸さない。

「やはりアレだな」

「アレよね」

「アレしか無いな」

「まさか」

三人は頷き、見下すような視線を投げかけた。

「」「鍛え直す」「」

「一夏、シンジ、助けてー！」

エーリカは藁にもすがる気持ちで二人に助けを求める。しかし、手を出せば返り討ちに遭うことが目に見えていた。

「ご、ごめんなさい」

「今は無理だ」

「ひとでなしっ！」

エーリカの抵抗虚しく、三人にどこかへ連行されていった。

「着いたよ」

「分かってますわ」

ある少年と少女はIS学園の入口にいた。少年は大きな鞆を持っているが少女は小さな高級バッグのみ。少女はまるでお嬢様のような雰囲気を感じられる。

「まずは受付で入学手続きを」
「あそこだね」

二人は受付に寄った。

「ご用件は？」
「今日から入学予定のシャルル・デュノアと」
「ペリーヌ・クロステルマンですわ」

続く

第拾玖話 ドイツ銃士団（後書き）

ドイツ銃士団の元ネタはドイツ騎士団でそのまま使おうと思いましたが

騎士団って剣だけどドイツガールズはほぼみんな使っていない……

てことで銃士団となりました

ちよつとネタが思いつかなくて雑ですみません

戦闘描写が下手くそですみません

マリ、エイラ、サーニヤはもう少し先、トーナメント前後に入れる予定です

次回予告

IS学園へ来日したドイツ銃士団

そしてフランスのIS操縦者二人も転校してくる

そして手作り弁当を持ち込み、アピールを始める少女達

はたして弁当の出来栄えは如何に？

次回『料理が出来る人はモテる』

ミサト「シンジ君はモテモテね」

千冬「一夏はモテモテになるのか」

美緒「なら宮藤もモテモテなのか」

第貳拾話 三人目の男子操縦者

ドイツ銃士団が来日した翌日。

「皆さんおはようございます。なんと、今日から転校生が来ます！」

シンジや一夏はアスカ達のことだろうなと思い驚こうとはしない。昨晚ゲルトルトは二年でエーリカとシャーロットと同じクラスとなったのを聞いた。しかし、一年のアスカが三組になり、シンジと一緒にのクラスではないことを激しく抗議してたのも記憶に新しい。結局千冬の威圧のみでアスカは怖じけづき、抗議は無くなった。残るラウラは姿を見せず、クラスは分からなかった。が消去法からすればこのクラスの転校生はラウラのみとなる。

「しかも二名です！」

「!？」

二人は目を丸くした。

転校生はもう一人いる。

ドアが開き転校生が入ってくる。

「……………」

一人目はやはり銀髪の少女、ラウラだった。

「失礼します」

そして二人目。

驚き声も出なくなる。

「シャルル・デュノアです。」

もう一人の転校生は男子だったからだ。

「フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが皆さんよろしくお願いします」

シャルルの爽やかな笑顔に一組全員が見取れる。
一夏、シンジに次ぐ三人目の男子IS操縦者。

「きゃあああああああ！」

「男子！それも織斑君や碇君に劣らない美形！」

「人間に生まれてよかったー！」

女子の黄色い騒ぎ声で一気に教室がガヤガヤと騒がしくなる。

「騒ぐな静かにしろ。もう一人が終わってないからな」

ざわざわと騒いでいた教室が静かになる。二度目を言わせればどうなるか想像すらできない。

もう一人の転校生、ラウラは表情を変えること無くまっすぐ全員を見つめる。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「……………」

クラスが更にシンと静まり返る。これ以上言うことは無しと気配が語っている。

「あー……HRは以上だ。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。それぞれ着替えて第二グラウンドに集合だ」

千冬がHRを切り上げるとラウラとシャルルはそれぞれ自分の席に行った。

「碇、織斑。デュノアの面倒を見る」

「あ、はい」

「分かりました」

二人はシャルルの席へ行った。

「あ、君が織斑君と碇君？」

「そうだよ」

「とりあえず出よう、女子が着替えはじめる」

一夏はシャルルの手を引いて教室を出る。男子、といっても二人三人だけだが、アリーナの更衣室で着替えなくてはならない。

「さて、急ぐか」

「急ぐって？」

「いいから早く」

シンジと一夏はシャルルの手を引いてダッシュする。なぜなら

「転校生発見！」

「織斑君と碇君と一緒に！」

男子の転校生とあってその情報は既に生徒にリークされていた。

もし捕まれば質問の嵐、遅刻、そして地獄の特別カリキュラム（制作・指導 織斑先生）という負の連鎖が待っている。

「いた、あつちよ！」

「逃げてても無駄よ、観念せい！」

「出会え出会えい！」

「織斑君や碇君の黒髪もいいけど金髪もいいわね！」

三人はなんとか集団を振り切り、アリーナの更衣室へたどり着いた。時計を見れば時間はギリギリ、急げばなんとか間に合う。

「急いで着替えないと!」

「わあっ!」

突然シャルルが叫んだ。

「どうしたの?」

「あ、いや、なんでもないよ!」

「?」

「急いの方がいいぜ、初日からシャレにならないし」

「そうだね」

「う、うん」

シンジと一夏は着替えようとする。しかし視線を感じた。

「シャルル?」

「な、なにかな!?」

声が若干裏返る。女子のようなかわいい声だ。

よく見るとシャルルは既に着替えていた。

「早いね、コツとかあるの？」

「こ、コツとか別に無いけど……その」

「……？」

「な、なんでもないよ！」

変な奴だな、と二人は思った。

「久しぶりだな」

「そうね、合否発表以降かしら？」

美緒とミサトは軽く挨拶を交わし、直ぐに移動を始めた。

「それにしてもこの世界は本当、平和よね」

「そうだな、我々がいた世界よりはな」

「だけどネウロイと使徒はこの世界で再び猛威を振るっている」

「だが代わりにISがある。これまでの使徒やネウロイも倒すことができた」

「そうね」

ミサトはふと、足を止めた。

アリーナでは模擬戦闘が行われており、先生もISを使用している。

「あれは……」

「ああ、山田先生だ。元日本代表候補生らしい」

「へー、さすがIS学園。教員もほとんど操縦者なのね」

麻耶と専用機二人が対峙する。見た目は麻耶の分が悪いが実際は逆だ。

あっという間に二人を撃墜してしまった。

「元日本代表なだけあるわね」

「候補生だな。あれでも実際は……少しドジだ」

「人は欠点があったほうが人間らしいわよ」

「まあな、完璧なロボットとは違うからな」

二人はアリーナの地下にある特殊な部屋に着いた。
以前侵入してきたネウロイが乗ったISが封印されている。

「葛城のIDは使えるのか？」

「ええ、もちろん」

ミサトはカードキーを通し、他の認証もパスした。

ゴウンと音を立てて重い鋼鉄の扉が開いた。

「ところで解析班は？」

「権限が低いから本部でデータの処理のみ。本当ならリツコも来る筈だったのに」

「赤木か、それと加持はいいのか？」

「あいつなんて知らないわ。全く、どこほつつき回ってんのかしら……」

加持リョウジはユーロ担当だが数日前連絡したところ、既に次の任務へ姿をくらましていた。

赤木リツコはNERVにあるISで問題が発生したため離れることができなくなってしまった。

結果、ミサトのみ来ることになってしまった。

「とりあえずできる範囲でやるか」
「そうね」

二人は扉を閉じた。

ミーナはミサトと入れ代わるようにNERVへ来ていた。

「これが加持リョウジ首席監査官からの」
「分かっている」

司令である碓ゲンドウはリョウジからの贈り物の全て分かっていた。

「そしてSEELE最新資料は先程」
「拝見させてもらったよ。エヴァからISの量産製造計画は役に立った」

ゲンドウの隣に立つ副司令、冬月コウゾウはチラッと机に置かれた資料の束を見る。

「結構です、彼にもそう伝えさせていただきます。そしてお約束の『シロモノ』です」

ミーナは持っていたケースを机に置き、ロックを外した。

「予備として保管されていたロストナンバー。神と魂を紡ぐ道標」

「ああ、人類補完の扉を開く——」

入っていたのは琥珀のような固体に包まれたモノ。

「――ネブカドネザルの鍵だ」

ミーナは一旦ケースを閉じ、ゲンドウに寄せた。彼から頼まれたミーナの任務はここまでだ。

「では、私は午後の授業があるのでIS学園に戻ります。失礼します」

仕事を終えたミーナは司令室から出ていった。
コウゾウはゲンドウに尋ねる。

「ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ次席監査官。信用に足る女性

続く

かね？」

第貳拾話 三人目の男子操縦者（後書き）

コウゾウ「ところで碇、五号機はどうなったんだ？」

ゲンドウ「問題無い、全てはシナリオ通りだ」

ミーナ「あれ、リョウジさんは五号機の件何も言っていなかったわね？」

第貳拾壹話 レッツランチタイム(前書き)

更新遅れてすみませんm(――)m

第貳拾壹話 レッツランチタイム

昼時

一夏、シンジ、芳佳、レイ、リーネ、箒、セシリア、アスカ、鈴、シャルルは屋上に集まっていた。天気は良く、暑すぎず寒すぎずちょうどいい空気だ。

目的はもちろん、みんなでランチタイムを過ごすためである。花壇もあり、綺麗な石畳が敷かれており、食事には持ってこいの場所である。

「ねえ碇君。私お弁当作ってきたの」

「へー、どんなの？」

「これ」

レイが取り出したのは保温保冷が効くポット（2リットル）。お弁当ではない。

一緒に取り出したカップに中身を注ぎ、シンジに渡した。

「これって……味噌汁？」

具は普通のワカメ、豆腐、油揚げ。匂いも美味しそうだ。

「そう、この間食べてもらおうと作ったけど……だから」
「じゃあいただきます」

シンジはレイから受け取り、味噌汁を一口飲んだ。
味噌の味が口に広がる。まさしく日本の味、味噌汁。

しかし

「綾波、ダシ取った？」

「ダシ？」

「昆布とか鰹節とか煮干しとか……」

「……………ごめんなさい、料理が下手で」

レイは素直に謝った。

肝心なダシを取り忘れていた。そのせいで何か物足りない味噌汁となってしまった。

「で、でも美味しいよ！ありがとうございます！」

「うん……」

「バカシンジ、あたしのも食べなさいよ」

アスカは大きめの弁当箱をシンジに差し出した。中身はソーセージ、卵焼き、ミートボールなど普通の弁当だ。

「所詮、依怙^{えこひ}鼻^い屑^き。そうやって肝心な部分で忘れるのね。でもあたしなら料理本をちゃんと読んで作ったから間違いないわよ！さあ、食べなさい！」

「う、うん」

シンジは自信満々に差し出された卵焼きを一切れ食べた。
ゆっくりよく咀嚼^{そしゃく}して飲み込む。

「どう？」

「……………い」

「美味しい？」

「味が濃い」

「……………」

「アスカ、どれくらい塩入れた？」

「少々っていうから小さじスプーンで1杯だけど」

少々とはほんの少しという意味なので小さじ1杯とは全く違う。その結果、しょっぱい弁当となってしまった。

「やっぱり料理って難しいわ……………」

「初めて依怙^{えこひ}鼻^い屑^きと意見が合うわ……………」

一夏のほうも鈴の酢豚、セシリアの甘いサンドイッチ、箸の弁当と様々なものを差し出された。一部を除いて美味しかったと一夏は満足げた。

「あの、シンジさん一夏さんシャルルさん。もしよかったですらどうぞ」

声をかけるタイミングを失い、ずっと黙っていたがようやくチャンスを見つけ、思い切って声をかけた。

芳佳が持っていた弁当箱の中にはおにぎりがたくさん入っていた。

「おにぎりか、いただきます」

「ありがとうございます、宮藤さん」

「私も」

「あたしも」

「ちよつとよこしなさい」

「私も味見を」

「わ、私も！」

芳佳の料理の腕がどれほどのものかと女子達も彼女のおにぎりを食べる。

「どうですか？」

「うまいな、これ」

「うん、僕より上手かも」

「これが本場のおにぎりなんだ……すごい」

三人共おにぎりの味を絶賛した。

一方、少女達は

「……………」

「美味しいよ芳佳ちゃん」

あまりの美味しさに絶句していた。見栄えや味見は自分が一番と思
い込んでいたが芳佳のおにぎり一つで簡単にその思い込みは粉々に
砕けてしまった。

そのうえ一夏とシンジの表情がさっきよりも明るい。二人は芳佳の
料理の虜になりそうだと全員が判断した。

（宮藤芳佳、恐るべし！）

リーネを除く女子達は芳佳を完全な敵と見なした。

授業を終えた美緒は職員室へ戻ってきた。既に千冬、ミーナ、ミサトが戻っていた。

「お、ミーナ。帰ってたのか」

「ええ、午後から授業があるから本部からとんぼ返りよ」

「本当、ごめんなさいね。全く……あいつは暇な癖にミーナさんに任せるだなんて」

リョウジの事を思い出しただけではわたが煮え繰り返りそうだ。

「大丈夫よ、本来なら私も色々探らないといけないのにその分やってもらってるからむしろやらないと失礼なくらいよ」

「監査官は大忙しだな」

「さて、私もお昼に」

ミーナは購買で買ったお弁当を広げた。

「ここの購買はメニューが豊富でいいわね」
「そうだな」
「たまに家族の弁当が食べなくなるがな」
「……………」

千冬の何気ない一言に三人はふと思う。

「確かにな」
「恋しいわね」
「人が作ってくれたお弁当は一番のご馳走よ」
「だろ？」

（宮藤の握り飯、また食いたいな）
（宮藤さんの手料理、やっぱり今までの料理で一番ね）
（シンジ君のお弁当がまた食べたいわ）
（一夏の手料理は私だけの特権だ）

しみじみと懐かしく彼らの手料理を思いふけていた。

「そつえば織斑先生、篠ノ之博士との連絡は付きましたか？」
「できたら報告しているはずだ」

やれやれと千冬はうんざりとした様子で首を振った。

束の携帯番号は妹の筈、親友の千冬と一夏、そして保護したシンジと芳佳のみ知っている。

だが、調査事項は全てトップシークレットなので一夏や筈、芳佳は勿論、シンジにさえ伝えることができない。権限を持つ千冬のみが連絡を取ろうとしている。留守録に入れようとしたがそのメッセージが酷く、千冬には耐えられなかった。

『ハロー、天才らぶりー篠ノ之束さんだよ。えへへ、束さんは現在ちよー忙しくて電話に出んわ。なんちゃってー。あとでもう一回かけ直すかもしくはメッセージを残してね、メッセージを残すならぶりー束さんが10回繰り返されたら言うてね。それじゃ、らぶりー束さんらぶりー（略）』

甘ったるいメッセージに千冬は苛立ち、ケータイを握り潰してしまった。今持っているケータイは二代目だ。

「ったく、あいつは……」

「流石に私でも無理だわ……」

「聞いているこっちが恥ずかしくなる……」
「ある意味恐ろしいな……」

三人も束のメッセージには耐えるのが困難だった。

ピピピ

「！」

千冬の携帯に電話がかかってきた。恐る恐る発信人を見る。

「篠ノ之、束だ」

「！？」

「まさか」

千冬は急いで出た。三人も電話を囲み聞き耳を立てる。

『ハロー、ちーちゃん。らぶ』

「間違い電話だ、かけ直せ」

『ああん、ちーちゃん冷たいよ～。東さん泣いちゃうよ』

「勝手に泣いてる、切るぞ」

『待つて待つて』

相変わらずポヤーとした口調で話を続ける。

『シンちゃんとうっちゃんと篝ちゃんの様子が気になってね』

「本当か？」

『ん？』

「用件はそれだけか」

『用件があるのはちーちゃんでしょう？ほらほら、東さんのワクワクが止まらないよ』

「……………そうだな、なら聞かせてもらおう」

千冬は束のマイペースを突っぱねるように一方的に攻めていく。

「先日の件、お前の仕業だろ」

『まあね、どうだった？』

「どうもこつも破壊しただけだ」

『勿体ないね、ISは貴重なんだからもつと大切に』

「開発者が作ればいいだろ」

『まあね、私としても初の試みがあつたし』

「ネウロイか」

千冬は冷たく告げる。

「異世界からやってきたネウロイをISに載せた」

『そう、コアも似てて改造が簡単だったからね』

「……………」

つまり束は無人ISの開発を始めていた。だがあくまでそれは表向きの目的であり、本来目指す場所は違う。四人はそれを既に理解していた。

「何が目的だ」

『別に目的なんて無いよ、研究者が暇潰しにやってるどうでもいいような実験だからね』

「だが、お前の暇潰しで犠牲が生まれたりどうする?」

万が一、あの時一夏と鈴が破壊できていなければ多大な犠牲が生まれた可能性もあった。束はそれを指先一本で実現できる。

「ほどほどにしろ、最後通牒だと思え」

『はいはい、りょーかい』

束は反省を見せず軽く返事をした。

「それともう一つ、使徒のコアはどうした」

『使徒のコア？それなら今搭載実験中だよ』

「今すぐNERVに返還しろ。これは命令だ」

『やーだよ』

千冬は軽く舌打ちした。場所さえ特定できれば首根っこ掴んで捕まえることはできるが場所の特定が不可能だ。GPSも使えず、この地球にいるかすら分らない。

「まあいい、なら早急に返還しろ」

『善処します』

束は間延びした返事をした。

『話はこれくらいかな？』

「遊びもいい加減にしろ、分かったな」

『うんうん多分おそらくメイビー分かった。じゃね』

束は電話を切った。

「……逆探は？」

「駄目、反応が飛び飛びに動き回っている」

場所通知をいじったらしく正確な位置情報が表示されず、特定できなかった。ましてや束が飛び回っている可能性は微塵も無い。

「やはり犯人は篠ノ之束だったな。で、探すのか？」

「やるだけ無駄だわ。今回は結構重要な話も聞けたし、黙認しておくわ」

探すだけ無駄。それは何よりミサトやミーナが知っていた。

NERV独自の情報網を駆使したが掠りもせず逆に悪戯にわざと触れたりなど腹が立つような行為を繰り返された。

「とりあえず一件落着か」

「そうね、一先ずは……」

四人はふうとため息を漏らした。

続く

第貳拾貳話 永遠のライバル！（前書き）

一夏「空を自由に飛び回りたいな」

束「はい、東さん手作りタケコプター」

シンジ「遠い世界に行きたい」

束「はい、東さん特製どこでもドア」

芳佳「強くなりたいです」

束「はい、東さんお手製ミサイル」

千冬「何故ISを出さない」

第貳拾貳話 永遠のライバル！

「ん」

「お」

第二アリーナの目の前でシャーロットとゲルトルートは出会った。

「久しぶりだな、あいつがビクビク怯えていたぞ」

「再教育しただけだ。お前と同室だったにも関わらずあの^{ていらく}為体とはな」

シャーロットはムツとした。自分の責任でも無いのにこう言われては頭に来る。

375

「まーね、あれでもお前というよりは変わったと思うよ」

「悪化か」

「いや、フリーダムでむしろ改善的かな。ドイツはやっぱ厳しいんだな。アメリカに帰化させたほうがあいつには合うんじゃないかな？」

「そんなことがあったら軍法会議と併せて紛争が起こるさ」

「ドイツには争いしかないのか？アメリカなら政治的に穏便に済ませるのに」

シャーロットはケラケラとゲルトルートを見下すように嘲笑った。

ゲルトルートもカチンと来たらしく、シャーロットを睨む。

「でも結局は争いを産む、口実を用いるとは姑息な国だな」

「最初から力押しの国とは一緒にされたくないなあ」

「ならどちらが上か証明する必要があるな」

「出ましたドイツの証明という名目の脅し」

「言い訳をうまくこじつけて逃げるのか？へっぴり腰のアメリカさん」

「上等じゃん、アメリカは政治的に軍事力を起動するからな」

「最初から戦争する気なら簡潔に言え」

口汚く罵り合いながらアリーナへ入っていった。

アスカは式号機に乗り、空を見上げていた。しかしゆっくりと正面へ視線を移動した。

落下してきたボウガンを見ずに受け止める。

「ふう、今日も完璧」

「随分と熱心に練習してるわね」

レイがアリーナの観戦席からアスカの練習をずっと見ていた。しかしアスカは今まで気づいていなかった。

「あ、当たり前じゃない！あたしのは真のエヴァンゲリオンから造り出した真のＩＳ型エヴァンゲリオン。依怙贗品の紛い物とは違うのよ。その分武器も多いからいつもローション形式でこうやって点検してるのよ」

「……………へえ」

レイは興味なさそうにわざとらしく感嘆の声を上げた。馬鹿にされたアスカは舌打ちする。

「ちょうどいいわ、あんたあたしの相手しなさい」

「……………」

レイは心底面倒臭いと思った。しかし断れば『負けるの恐れて逃げるのかしら？』と笑われる。だが引き受ければアスカの思う壺。だがレイは

「いいわ、やるわよ」

「そう来なくっちゃ」

レイはISを展開し、アリーナに飛び降りた。

アリーナの中央を堂々と陣取り、二人は睨み合う。

「準備はいいか？」

「私は最初から準備万端だ」

「それじゃ……」

シャーロットはコインを取り出す。

「ほう、コイントスか」

「いいだろ？」

「好きにしろ」

シャーロットはコインを高く投げる。重力に導かれ垂直落下してい

く。

コインが地面と接したと瞬間、二人は同時に動き出した。

だが速度はシャーロットが速かった。

「先ずは一発！」

「やらせるか！」

ゲルトルートは闘牛を躲すように横へ移動する。が、すぐに反応し速度を落とさず90度直角に曲がった。

「なっ!？」

「あたしの『グラマラス・グレニス』は速度に特化したIS。追いつくなんて簡単さ」

シャーロットは背中の大砲、ではなく加速に使用していたジェットをゲルトルートに向ける。

「落ちろ！」

ISの速度とジェット砲の発射速度が相乗し、弾丸より早くエネルギーが放たれる。

ゲルトルートは急旋回してエネルギー弾を躲す。

「さすがスピード馬鹿だな」

「だろ？」

「ああ」

だが、とゲルトルートは付け加える。

「速度以外は劣ってるようだな」

「へー、で？逃げ回っているだけじゃ埒が明かないぜ」

シャーロットは更にエネルギー弾を放つ。だが、ゲルトルートは避けようとせず、エネルギー弾の前で止まる。

ゲルトルートは手を突き出す。

「砕けるっ！」

「なっ！？？」

エネルギー弾が手の平に包まれる。ゲルトルートは弾を一気に握り潰す。

バシュツと空気が抜ける音と共にエネルギーが消失した。

「エネルギー弾を握り潰した！？」

「私のIS『ゲルハルト』は力が強い。シールドエネルギーが無くても力で防げるからな」

「へー、やるじゃん」

「そう強気でいられるのも今のうちだ」

ゲルトルートは左右の手にサブマシンガンを持ち、構える。

「追いつけるか？」

「いや、狙い撃つだけだ」

「盾一個と武器三種。随分と貧弱な装備ね」

「貴方こそ、容量ギリギリまで武器を詰め込んだわね」

アスカとレイもアリーナの中央を占領し、対峙していた。

レイはたったの盾一枚、対してアスカは日本刀『備前長船』とハンドバズーカを構えている。

「いいわ、直ぐに蹴りをつけてあげるから！」
「！」

アスカはバズーカを放つ。レイは盾を後ろに回しパレットガンで弾を撃ち抜く。

爆発し、砂煙が立ちのぼり視界が奪われる。だがセンサーはお互いに相手を捉えている。

アスカの反応を捉えたレイは盾を前に張る。

直後アスカは刀を振り上げて煙の中から現れた。
刀と盾が激しくぶつかる。

「ちいっ！」

アスカは盾を押し返し、レイから離れる。レイは離れていく隙にパレットガンを撃ち込む。躲せずシールドバリアで受け止め、シールドエネルギーを減らした。

「やるじゃない」

「貴方もね」

「けど、今のは小手調べよ！」

アスカは刀を収め、サンダースピアを取り出す。

かつて、マリが二号機に乗りゼルエルと戦った時に突き刺そうと使用した武器だ。だがアスカはマリが二号機に乗ったことすら知らない。

アスカは一気に突っ込む。

レイは盾で受け止めて『しまった』。

「貫徹えええ！！」

「っ！？」

盾を突き破り、サンダースピアはレイのISに突き刺さった。シー

ルドエネルギーは減らない。

「このっ……！」

レイは負けじとサンダースピアを握る。そして盾を押した。

サンダースピアは更に深く盾を抉り、アスカの手から離れ突き抜けた。

アスカはそのまま突き放され、隙にまたパレットガンを撃ち込まれる。

「武器を奪うなんて卑怯じゃないの……！」

「なら返すわ」

レイは針先をアスカに向けて投げつける。アスカは荒々しく受け止める。

「いいわ、遊びは止めて一気に片付けるわ」

「……………何回本気出すって言うのよ」

レイは呆れたように呟く。

「何よ」

「別に」

「あー、もう！さつさとくたばれ、この人形が！！」

アスカはデュアルソーとポジトロンライフルを同時に構える。盾を失ったレイはスナイパーライフルを取り出す。

アスカはしめたと思い、ポジトロンライフルの照準をレイに合わせる。レイもスナイパーライフルの照準をアスカに合わせる。

「狙いは、ここよ！」

アスカは撃つ。

レイも撃つ。

だがアスカが一步速く、また威力も上だ。

弾と弾がぶつかる。

だがレイは見ていなかった。見ていたのは頭上から飛来する

「デュアルソー!？」

レイは戦いた。

アスカはポジトロンライフルを匭にして、デュアルソーを投げつけた。デュアルソーは重く、片手で動かすのがやっと。片手で受け止めるなど出来やしない。

だが、避ければポジトロンライフルに撃たれる。

レイは完全にアスカの思う壺になるしかない。

(さあ、選びなさい!)

だがレイは動かない。再びスナイパーライフルを撃とうと照準を定め直す。

重量加速により速度を増してデュアルソーが落下していく。

だが、レイの頭上には落ちず、砕けた。いや、撃ち抜かれた。

「なっ!？」

「残念だったけど、貴方の考えた選択肢は受け止める、避ける。だけど壊すという選択肢は考えなかったのね」

レイの十八番、γ線レーザー砲。背中のエネルギーバイパスを途中まで組み立て、正面ではなく砲身を上に向けたまま撃った。

「貴方の行動パターンの複雑化は逆に分かりやすかったわ」
「っ……」

アスカは失態を犯していたことに気付かされた。

武器を投げ上げ、受け止める。普通に見れば恰好付けにしか見えな
い。
だがアスカは武器を投げ、意識を逸らす間に撃ち込む戦法の練習だった。

しかしレイにいと簡単に見破られるとは考えつかなかった。

「けど、あんたは切り札を既に切った。あたしはまだ切り札がある

のよ。もう一発撃てばあんたは負けよ」

「そうね、なら遠慮無く撃つわ」

「は？」

レイはしっかりと組み立てたレーザー砲をアスカに向けて放った。呆気にとられていたアスカはもろに受け、エネルギーを大幅に削られた。

だが、アスカのエネルギーがレイのエネルギーをまだ上回っていた。

「おしまいよ」

「まだまだあー!!」

キンコンカンコン

アリーナにチャイムが響き渡る。レイは直ぐにISを解除した。

「終了ね」

「な、勝手に止めるんじゃない」

「知らないの？使用時間は四時まで。もう終了よ」

「まだよ！もうすぐ決着が」

「織斑先生が来るわよ」

「……っ！」

アスカは諦めたらしく、ISを解除した。

「明日も来なさい。明日こそ決着を付けてやるんだから！」

「はいはい……」

レイは明日休もうと決めた。

「本当、セカンドは面倒ね……」

レイはシャワー室を出て、自室へ戻ろうと歩いていた。すると向こうからシャルルがやってきた。

「あ、えっと……綾波さんだっけ？」

「ええ、デユノア君」

「ちょうどよかった。購買行きたいんだけどどこか分からなくて…

…」

「いいわよ」

「ありがとう」

シャルルはニコツとレイに笑顔を見せた。しかし、レイはときめかない。

「……………」

「どうしたの？」

「貴方、女の子ね」

続く

第貳拾貳話 永遠のライバル！（後書き）

ペリーヌ「え！？あの変装が見破られた！？」

ルッキーニ「あ、まだ出てないぺったん眼鏡」

ペリーヌ「一応ES学園にはいますわ！」

ルッキーニ「何組？」

ペリーヌ「三組ですが何か？」

次回「共通点」

ルッキーニ「シャーリーと一緒に寝たい〜！」

第貳拾參話 仏国代表候補生（シャルル・デュノア）（前書き）

芳佳「今回ちょっと説明ばかりですみません」

レイ「仕方ないわ」

第貳拾參話 仏国代表候補生（シャルル・デュノア）

「ただいまー、って誰もいないか」

シンジはいち早く部屋に戻ってきた。現在この部屋はシャルル、シンジ、一夏の三人で使っている。

『デュノア一人部屋というのも織斑、碇のどちらが一人部屋というのも不公平だ。なので特別に三人部屋にした。有り難く思え』と千冬の采配により三人部屋へ移動することとなった。これには三人とも有り難く思った。

「とりあえずシャワー浴びよう、と」

シンジは制服を脱ぎ、シャワールームに入る。

蛇口を捻り、身体を洗い流す。

しばらくしてシャワーを止めボディークリームを手に取るが軽い。

「あ、切れてたんだ」

シャルルが昨日使った際、空になったと言っていた。そして先程、購買でシンジが買ってそのまま靴に入れたままだ。

裸で行くのも恥ずかしいがシャルルと一夏は帰ってきていない。取

ってきてもらうこともできない。
仕方ないのでシンジはシャワー室を出た。

「し、シンジ!？」

「へ……!？」

脱衣所兼洗面所に半裸のシャルルがいた。だがシンジが驚いたのはそこではない。

女性のように胸が出ていて、隠すように下着が見える。

「!?!?！」

「あ、あ、ああああ!？」

シンジも状況が分からず目を白黒させるがシャルルのほうがテンパっている。

シャルルはとりあえずシンジを説得しようとかみ掛かるが勢い余

って押し倒してしまった。

ゴンという音と共にシンジの意識は途絶えた。

「ただいま」

一夏は部屋に戻ってきた。山田先生に呼ばれアリーナ内のシャワー室を使うことが出来ず、制服が若干べたつく。いち早くさっぱりしようと脱衣所の扉を開ける。

「お、シャ……………」

「あ……………」

一夏が見たのは想像できないシーンを目撃してしまった。

全裸で気絶しているシンジ。

半裸でシンジを押し倒しているシャルル（女の子？）。

「あわわわわわわわわわ！！」
「す、すまん！！」

一夏は急いでドアを閉めた。

しかしシンジを取り残したことに気付いたが開けることを躊躇った。

「しゃ、シャル！シンジは大丈夫なのか！？」

「ただ大丈夫だけどただ大丈夫じゃない！！」

その後、シンジはシャルルが服を適当に着せ、一夏が運び出した。

シンジも目覚め、しかし三人は沈黙していた。

話を切り出そうにも自分から出る勇気が無い。

「……………」

「……………」

「……………」

「お、お茶でも飲む？」

「あ、ああ……………」

「うん……………」

シンジはとりあえずお茶を入れようと湯を沸かし急須へ注ぐ。少し茶葉が蒸れてからまた注ぐ。そして湯呑みに注いだ。少

「はい」

「はい、シャル」

「あ、ありがきやつ」

シャルルの指先が一夏の指先と触れ、シャルルは慌てて手を引つ込めた。湯呑みを渡そうとした一夏の手が緩み、急いで取り直す。が、その反動でお茶が一夏の手にかった。

「あちっ」

「あっ、ゴメン！」

「だ、大丈夫！？」

「あ、ああ」

一夏は直ぐに蛇口を捻り、火傷した部位を流水で冷やす。

「直ぐに冷やしたから大丈夫だろ」

「ちょっと赤くなってるね」

「氷もらって来るよ」

「待って！」

氷を取りにシャルルが部屋を出ようとするがシンジはそれを制止した。

なんとかシンジが持っていたヒヤ○ンで手を冷やすことにした。

「ここまで冷やせば大丈夫だね」

「ああ、水ぶくれもできてないし」

「うん……」

シャルルは改めて入れ直したお茶を受け取り一口啜った。漸く落着きを取り戻し、シンジは再び話を切り出した。

「ところで、なんで男の子の格好してたの？」

「実はね……」

シャルルは包み隠さず全て話し出した。

シャルルの実家はデュノア社というIS生産をしている会社で、量産機製造のシェアは世界第三位。シャルルの乗るリヴァイヴを造っているがそれらは全て第二世代。しかも開発には莫大な費用が掛かり、国からの支援が頼りの綱である。更にフランスはEUの統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されており、国防面からしても第三世代の開発は急務である。以前セリアもイギリスの第三次イグニッション・プランのためにデータ収集でIS学園に来たと言っていた。

しかしデュノア社は遅れを取っており、何もかも不足状態であった。更に追い撃ちを掛けるようにフランス政府からの予算削減、そして次期トライアルで落選すれば予算を全面カット、おまけにIS開発許可も剥奪されてしまう。

そのためにシャルルは一夏の『白式』とシンジの『初号機』のデータを集めるために男装してIS学園へ転入してきたのだ。

だがそれはシャルルの意思では無く、父親からの『命令』であった。シャルルはデュノア社の社長である父と愛人の間に出来た子だった。本妻には泥棒猫と罵られ酷く傷ついたこともあった。

その状況を見兼ねた友人、ペリーヌ・クロステルマンは何度かシャルルを保護しようと話を持ち掛けたがシャルルは断り続けた。ペリーヌの家もIS開発系列の会社であるがデュノア社よりもかなりの小規模。もし保護が発端でいざこざが起きればペリーヌの親の会社は買収、または圧制されてペリーヌにも迷惑をかけてしまうと思っていた。

IS学園へ行くためにフランスを発つ時まで何度もしつこいくらいペリーヌにシャルル保護の受け入れを懇願されていた。

「でも一夏やシンジにはばれちゃったし、多分僕は本国に強制送還されて会社も、潰れるか子会社みたいになくなるか……でも僕にとってはどうでもいいかな。ペリーヌに迷惑は掛けてないし……」

「……………」

「……………」

「話したらスッキリしたよ、聞いてくれてありが」

「それでいいの？」

シンジはシャルルに尋ねる。

「え？」

「お前はそれでいいのか？」

「子供は親の所有物じゃない。自分にも自由に行動する権利はあるんだよ！」

「一夏、シンジ？」

シャルルは二人の言葉に驚き戸惑っている。だが二人は止めない。止まらない。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。だけどな、親が子供に何してもいいってことはありえねえだろ！」

「生き方を選ぶ権利は誰にだってある。親に邪魔される権利も無いんだよ！」

「ど、どうしたの二人とも？」

「あ……その」

「悪い、つい熱くなって……」

シャルルの言葉に一旦落ち着き我に返った。

「いいけど、本当にどうしたの……？」

「俺は、俺と千冬姉は両親に捨てられたから」

「僕も母さんは早く亡くなって、父さんにはいろいろ命令されてただの他人扱いにされてるから……」

「あ……」

前もって資料が何かで知っていたのか始めて二人の『両親不在』の意味を理解し、気まずそうに顔を伏せた。

「ゴメン……」

「気にしないでいいよ、縋^よりを戻そうとしたけど無理だって分かったし……」

「俺も家族は千冬姉だけだし、今更両親に会いたいとも思わない」

「そう……」

「それよりシャルルはどうするの？」

「どうって…… 時間の問題かな？ フランス政府に知られたら黙ってないだろうし、代表候補生も剥奪されて、拘束されちゃうかな」

「それでいいのか？」

「いいも悪いも僕には選択権は無いから仕方ないよ……」

シャルルは微笑みを見せているが目が潤んでいるのが二人には分かった。最早諦めしか無いとシャルルは自虐的に自嘲する。

「だっ たらここにいろ」

「え？」

「特記事項第21、本学園に於ける生徒はその在学中においてありとあらゆる国家組織団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、そ

これらの外的介入は原則として許可されないものとする」

一夏はシンジに教え込まれたIS学園の特記事項55の中の一つを全て言えたことに自分も驚く。

「そうだよ、つまりIS学園にいれば三年間は大丈夫ってこと。それだけ時間があれば方法なんていくつも見つけれられるよ」

「う、うん。一夏」

「なんだ？」

「よく覚えられたね、55個も特記事項はあるのに」

「僕もびつくりだよ」

「シンジのおかげさ」

「そうなんだ、ふふっ」

シャルルがやっと見せた偽りなき笑顔。屈託の無い純粋な笑みにシンジと一夏は見とれてしまう。

「ま、まあ、最終的にはシャルルが決めるから考えてみてね」

「うん、そうするよ」

二人もようやく笑顔を取り戻した。

コンコン

「「「！」「」」」

『碇君、夕飯の時間かなり過ぎたけど大丈夫？』

『シンジさん、一夏さん、シャルルさん、具合が悪いなら治しますよ？。』

シンジ達を心配してレイと芳佳がやってきた。だが今開けてしまえばシャルルの正体がばれてしまう。それだけは絶対に避けたい。

『入りますよ』

「ど、どうしよう！？」

「とりあえず隠れて！」

「え、あ、じゃあここに」

シャルルは隠れ場所にクローゼットを選ぶ。が二人はそれを制止した。

「なんでクローゼットなの！？」

「ベッドだ、ベッド！布団で大丈夫だ！」

「あ、う、うん！」

小声でやり取りしながらバタバタと慌ただしく動き回る三人。

ガチャ

ドアが開く音がして二人が入ってくる。

「やあ綾波！どうしたの？」

「……………」

「何してるんですか？」

二人が目にしたのはベッドで布団を被っているシャルル、の上に一夏とシンジが覆いかぶさるような形になっている。レイは怪しく睨み、芳佳は首を傾げる。

「シャルルが風邪気味だっというから布団掛けてあげたんだよ！」
「それなら風邪薬ありますよ、はい」

芳佳はポケットから薬を取り出した。

「く、薬ならもう飲んだから大丈夫だよ！」

「これはちよつと特殊な薬で、飲む薬じゃなくて身体に塗る薬なんです」

「くく！！」

更に危機的状況に追いやられる三人。ここで塗るために布団を剥げば二人にばれてしまう。
だが断つてしまえば逆に疑われてしまう。

「あ、ありがとう！」

「塗りますよ？」

「じ、自分で塗れるから大丈夫だよ！」

「でも……」

「いいわ、彼に塗らせましょう」

レイが芳佳の薬を取りシャルルに手渡す。

「これ以上風邪をこじらせるのも困るし、食堂も時間が迫ってるから出た方がいいわ」

「そ、そうだな！」

「そうだね！」

「僕のことは気にしないでいいから行ってきていいよ！」

「彼もこう言ってるからいいわね」

「はい、ではお大事に」

「ありがとう芳佳」

（なんとかなったな）

（だね）

（うん、ありがとう）

一夏とシンジはホッとして食堂へ向かった。

続く

第貳拾參話 仏国代表候補生（シャルル・デュノア）（後書き）

カヲル「よく考えたら三人共似た境遇なんだね」

レイ「そうね」

芳佳「あの薬、実は塗りながら魔法で治療しようと思ったのに」

第貳拾肆話 ドイツ式スパルタ訓練（前書き）

芳佳「ドイツの人って強いですね。何が違うんでしょうか？」

アスカ「バームクーヘンよ」

ラウラ「バームクーヘンだ」

ゲルトルト「断然バームクーヘンだ」

エーリカ「軍用色もバームクーヘン」

レイ「……」

第式拾肆話 ドイツ式スパルタ訓練

翌日

エーリカはアスカ、ラウラ、ゲルトルトと共にアリーナで訓練していた。

だがあまり気が進まず彼女だけダラダラと怠けている。

「もう終わりにしよー」

「まだ始めて1時間だ」

「ホント、退化しちゃったわね」

「何たる為体だ^{ていだらぐ}」

「……もしかして、三人共に私が嫌いなのか？」

エーリカはまさかと思い怪訝そうに尋ねる。

「「「好き」」」

「ならなんで」

「日本の諺で『かわいい子にはサバイバルさせよ』というものがあつてな」

「つまり愛が故にたくましく育って欲しいって訳」

「母親でも無いのに……」

それに、とエーリカは思う。

ドイツ銃士団の中ではエーリカが一番強い。故にドイツ代表に最も近い候補生である。

しかし、強いものの生活面はずばらでだらしく、式典等にも真面目に出席しない。その度に厳罰を受け何度も代表候補生の座を剥奪されそうになった。三人が何とか取り持ち首が繋がっている、が当の本人はあまり気にしていない。

「私は強いのに……」

「ウサギとカメって物語を知っているか？」

エーリカのつぶやきにゲルトルートが尋ねる。はて？と彼女は首を傾げる。

「最近クリスに読んだことがある絵本の話だ。ウサギとカメが丘の上まで競争して」

「そりゃウサギの圧倒的勝利じゃん」

「だがな、勝ったのはカメだ」

「えっ？」

「ウサギは途中まで走ったが勝利を確信して寝てしまった。カメはその隙にウサギを抜かし勝負に勝ったという訳だ」

「つまり、エーリカはウサギだと言っことか」

「怠けているとトーナメントで初戦敗退ね。そんなことがあったらドイツ軍人の名折れよ」

「うっ……」

三人からのプレッシャーにエーリカはたじろぐ。

「あーもう分かったよ！」

「そうだ、その気だ」

「そう来なくっちゃ」

「せいぜい頑張れ」

しばらく練習していると誰かがやってきた。

「やー」

「ルッキーニと……鳳だったか？」

「そうよ、中国代表候補生の鳳鈴音よ」

「『甲龍』に『アツチエンディーノ』。第三世代共の割には脆そうだな……」

「な？」

ボソッとラウラが呟くがルッキーニと鈴はは挑発と受け取った。

「何か言った？」

「馬鹿にしたわよね」

「まさか、ただこんな機体で国家代表候補生とは思っただけだ」

「それが馬鹿にしてるっていうの」
「ドイツ人だから日本語難しいかなー？」

鈴とルッキーニも負けずと挑発する。だがラウラは表情一つ変えずただ二人を見下すように立つ。

「言語や言語に頼るコミュニケーションなど必要無い。そこから勝ち誇るとはこれはまた滑稽だ」

「日本語が下手だって痩せ我慢してるのがまる見えだよ」

その罵り合いを三人は若干ハラハラしながら見守る。

「なあ、アスカ。ラウラはあそこまで好戦的だったか？」

「あたしの知る限りだと問答無用でフルバースト。挑発なんて見たことは無いわ」

「日本に来るまでに何か変なもの食べたのかな？」

「いや」

エーリカのジョークも真剣に受け止め、だがゲルトルートは首を振った。

「織斑の所為だろう」

「そうね、それしか無いわね」

「止めないの？」

「確かに止めた方が」

プツン

何か切れた。いや、二人がキレた。

「ああもう！徹底的に打ちのめしてピザと一緒にペタンコにしてやる！！」

「もう卑怯とでも何とでも言いなさい！二対一でぶっ潰してやるんだから！！」

「二対一でも百対一でも変わらん。まとめてかかって来い」

「上等だ！」

「上等よ！」

「今日も練習するか」

「そうだね」

「確か第三アリーナが開いてたわ」

一夏、シンジ、シャルル、レイはアリーナへ向かっていた。

もうじき学年別トーナメントが行われるため、多くの生徒がアリーナを使用している。

だが何やら慌ただしい。廊下をバタバタと走っている生徒が目立つ。

「何だろう?」

「更衣室行く前に観客席行ってみるか」

四人は観客席へ出た。

ドゴンッ!!

重い何かが激しくぶつかり合う音が響く。四人はアリーナに視線を向けた。

「あれは鈴さんとルッキーニ、それとあの黒いのは……」

「シュヴァルツェア・レーゲン。転校生の機体よ」

『シュヴァルツェア・レーゲン』に乗るラウラは余裕を見せないが表情に苦しさは見えない。逆に鈴とルッキーニは追い込まれ、焦りと苦しさを感じられる。

ISもラウラのものはダメージはほとんど無いが二人のISはかなりのダメージを受けていてアーマーの一部は欠落していた。

「くらえっ！」

鈴は『龍咆』を放つ。一発でも威力はあり、場合によっては一撃で相手を沈めることもできる。だがラウラに届くことは無い。

「無駄だ。シュヴァルツェアレーゲンの停止結界の前では無意味だ」
「ならっ！」

ルッキーニは背後からラウラに襲い掛かる。だが突き出した拳は龍

咆を受け止めた停止結界に阻まれ、動きが止められた。

「愚策だな」

「っ！」

「ほら、動きが止まってるぞ」

「あんたもね!!」

鈴はがら空きになっているラウラの背中に回り込み、青龍刀を振り落とす。だが、肩から射出したワイヤーが飛び出し、逆に搦め捕られる。

「このっ!!」

ルツキーニは停止結界から抜け出し、ラウラから一旦距離を取る。取りながら鈴を助けようと武器を選択する。

だがラウラはその僅かな隙すら見逃さなかった。

一瞬で加速しルツキーニに詰め寄る。

一夏はその加速方法に見覚えがあった。

イグニッションブースト
「『瞬時加速』！」

それは一夏の十八番とも言える必殺技だった。

ラウラの両手首のパーツからプラズマ刃が展開され、ルツキー二に左右から挟み込むように襲い掛かる。

ルツキー二は何とか躲し、漸くライフルを手にする。だがラウラの攻撃は止むどころか増え、雨のように降り注ぐ。だがルツキー二は全てを躲した。

元タルツキー二のIS『アツチエンディーノ』は比較的小柄で機動性に優れている。故に回避性能も他より高い。

プラズマ刃の猛攻をぐり抜け、後ろでワイヤーと格闘する鈴を助け出した。そのまま安全地帯へ逃げる。無駄だということは百も承知、とにかく離れた。

「ルツキー二、一斉に叩き込むわよ」

「うん」

「はたして出来るか」

「出来る出来ないじゃない、やるのよ！！」

鈴は衝撃砲を展開し、エネルギーを溜め込む。

「甘いな、この状況でウェイトのある空間圧兵器を使用するとは」

ラウラは鈴に狙いを定め突進していく。

「もらった！」

「！」

ラウラが振り返ると至近距離で手を突き出し構えるルッキーニが立っていた。

「アツチエンディーノ！！」

「無駄だ」

「それはどう？」

横目で見ると鈴が衝撃砲のチャージを終え、発射しようとしていた。だがラウラの停止結果は一つに対してのみ有効だ。二つ三つは不可能だ。

回避も出来ず、ラウラは挟み撃ちに遭う。

更に二つの攻撃がぶつかり爆発した。至近距離にいたふたりは爆発に吞まれ、アリーナの床に突き飛ばされた。

「どうかしら……？」

「当たった筈、回避する隙すら——！」

煙が晴れ、ラウラが現れる。

だが攻撃する側の二人がかなりのダメージを受けているのに対して攻撃される側のラウラはほとんどダメージが無かった。ラウラ自身も苦痛の表情は見せない。

「終わりか、ならこちらから！」

ラウラは『瞬時加速』で近づき、近距離から砲撃を浴びせる。更に止まることなく攻撃は続く。
ワイヤーで二人を引きずり込み、拳を叩きつける。

「っあ……っ！」

「ぐっ……がつ！」

二人は苦しみに悲鳴を上げるがラウラは止まらない。機体維持警告^{レッドゾーン}域から操縦者生命危険域へ到達する。このままラウラの攻撃が続けば二人の命が危ない。

だがラウラは止めるどころか、口元を歪め笑みを作り更に叩き込む。危険を感じた一夏は白式を展開し、アリーナへ突入しようとする。

「っ」

「……やりすぎ」

突入する前に誰かがラウラを吹き飛ばした。壁にたたき付けられたラウラは直ぐに起き上がり割り込んだ人物を見る。

「エーリカか……」

「オーバーキルだよ。本当に殺る気だったの？それとも」

エーリカは横目でゲルトルートとアスカを見る。

「これも愛情のためだと言うの？」

「邪魔するな、お前は関係無い」

「違うならいい、とでも言わせる気？」

「邪魔だ！」

ラウラは邪魔するエーリカを退かそうとワイヤーを伸ばす。だがエーリカの攻撃が一步速かった。

「シュトルム」
「っ！」

アリーナに突風が吹き荒れる。強風は暴風となり、ラウラに襲い掛かる。だが、ラウラ以外の四人には当たることなく弱い風が流れている。

「そんなに戦いたいなら私が相手になる」
「エーリカの相手ならラングレーかゲルトルトにしろ」
「弱いものイジメは格好悪いよ」
「邪魔するなら……お前も潰す！」

暴風に逆らいラウラはエーリカへ特攻を仕掛ける。暴風を突破していることに驚きエーリカも身構える。

「やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」
「っ！」
「っ!？」

突然千冬が割り込み、二人を止めた。

だが二人が驚いたのは千冬が来たことではない。

千冬はISを展開していないにも関わらず軽々とISのブレードを操り、二人の間へ割り入っていた。

怪力を使えるゲルトルトやドイツ最強のエーリカですらIS無しで武装を扱うなど難しい。流石『モンド・グロッソ』優勝者といったところだ。

「模擬戦をやるのは結構だが、アリーナにダメージを与えるまでやるのは教師とて黙認しかねる。命を賭けた真剣勝負なら学年別トーナメント、各学年のトップのみ他学年と戦えるがそこでつける」

「教官がそうおっしゃるなら」

「了解しました」

ラウラとエーリカは素直に頷き、ISを解除する。

エーリカが振り向くと既にアリーナのシールドを破って入ってきた一夏達が二人を救出していた。

「では、学年別トーナメントまでの私闘の一切を禁ずる。以上！」

続く

第貳拾肆話 ドイツ式スパルタ訓練（後書き）

暴風の中

エーリカ「弱いものイジメは格好悪いよ」

ラウラ「じゃゴローも」

エーリカ「聞こえない」

ラウラ「だからビューーならゴローもつゴロー」

エーリカ「風うるさいなあ」

ラウラ「きさゴロービューーめろー!」

芳佳「もし誤字脱字を見つけたらすぐに感想で報告してもらえるとありがたいです」

第貳拾伍話 開幕、学年別トーナメント（前書き）

アスカ「あんだ、あのフランス美男子を脅してるそうじゃない」

レイ「いいえ、忠告と確認だけ」

アスカ「何を言ったのよ」

レイ「トーナメントで優勝したら言う」

アスカ「ちっ」

第貳拾伍話 開幕、学年別トーナメント

「大丈夫、ルッキーニちゃん？」

「ありがとう、芳佳」

鈴とルッキーニは直ぐさま医務室へ運ばれ芳佳の治療を受けた。致命傷は無いものの、ダメージは大きく包帯だらけ。致

「別に助けなくてよかったのに……」

「でもハルトマンさんの助けが無かったら……」

「大丈夫大丈夫、あたしは結構じょいたっ！」

「こんなの怪我のうちに入りたい！」

ちよつと動いただけでも激痛が身体を襲う。ラウラの攻撃の凄まじさがよく分かる。

「とりあえず落ち着いたら戻っていいぞ」

騒ぎを聞いてやってきた美緒はやれやれといった表情でため息をつく。

ドドドドドドドドドド

遠くから地響きが聞こえる。やがて近付いていき、徐々に大きくなる。

そして音が止んだ直後、ドアが吹き飛び人が雪崩の如く迫ってきた。保健室はあつという間に人で埋め尽くされた。

「織斑君！」

「碇君！」

「デュノア君！」

三人に向かって手が伸びる。まるで地獄に引きずり込もうとする死人の手のように差し出される。

「な、何なんだ!？」

「みんな待って待って！」

「とりあえず落ち着いて」

「」「」「これ!」「」「」

女子生徒が一斉に差し出したのは告知が書かれた申込書だった。

『今月開催する学年別トーナメントではより実践的な模擬戦闘を行うため、二人一組での参加を必須とする。なお、期限までにペアが出来なかった者は抽選でペアを組むこととなる』

と書かれている。他にも締切や詳細が書かれているが我先にと手が伸びてくる。まさしく地獄絵図。

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、碇君！」

「私と組みなさい、デュノア君！」

しかし、困ったことがある。一夏シンジはいいとして、問題なのはシャルルである。

シャルルは本当なら女子である。もし事情を知らない誰かと組めば^{たちま}忽ち知れ渡ってしまう。

それだけは避けたい。だがどちらかがシャルルと組めば残った一方はバーゲンセルの争奪戦如く揉みくちにされ、最悪の場合も起こり得る。

だが考える猶予は無い。

どうすべきか焦る中、シャルルが前に出た。

「僕は学園に来る前からペリーヌとコンビネーションも組んでるんだ。だから僕は無理なの、ゴメンね」
「……………」

シャルルはばつが悪そうに、だが微笑んだ。
一瞬静まり女子一同は視線をシャルルから一夏とシンジに向けた。
その視線はまるで獲物を見つけた猛獣のように鋭く光っている。

「えっと……………」
「あの……………」

(今ね)

(今しか無いです)

(今よ)

後ろから様子を伺っていたレイ、芳佳、アスカはここがチャンスだ
と思い、声をかけようと決心する。

だが

「だ、だから僕は一夏と組むことになったんだ！」

「あ、ああ！シンジと組むことにしたからスマン！」

二人は肩を組み仲良くしているように見せた。女子生徒達はしばらく
沈黙し、そして理解した。

「そう、三人共決まってるなら仕方ないね」

「数少ない男同士なら尚更ね」

「織斑君×碇君、悪くは……ゲフンゲフン」

「ならペリーヌとやらを消……ゲフンゲフン」

諦めた生徒達はゾロゾロと保健室を出て、新たなメンバー探しに向
かった。

「ふう……」

「ねえねえ、あたしと組まない？」

何故か怪我人のルッキーニがいきなり二人にアプローチをかけてきた。

「ダメよ！一夏はあたしと組むのよ」

「あたしが先に声をかけたからいいでしょー」

「ダメだ」

美緒はきっぱり断言した。

「さっき二人のISの状態を確認したがダメージレベルCを超えている。当分は修復に専念しなければ後々重大な欠陥が生じる。ISの休養と意味でもトーナメントの参加は許可できん」

「うじゅじゅ……はい」

「わ、わかりました……」

あっさりと二人は引き下がった。

レイはアスカを連れて廊下に出た。

「何よ、あんたと組む気なんて更々無いわ」

「知らないの？優勝したら碇君と付き合え」

「今すぐ教えなさい」

アスカは直ぐに食いついた。

IS学園ではトーナメント優勝の暁にはシンジ、一夏と付き合うことができるといふ噂が流れていた。
最初はトーナメントのモチベーション向上を目的とした口実だと思
う生徒もいたが確かめる術は無い。

「ふーん、で何故に依怙贖とあたしが組む訳？」

アスカは怪訝そうにレイを睨む。

「宮藤さん、知ってるでしょ？」

「あの豆狸がどうしたのよ？」

「この世界に来た時、碇君と最初に出会ったのよ」

「ふーん」

「そこで宮藤さんは碇君に惚れたらしいの」

「なんですって!？」

アスカの怒りのメーターが一気に振り切れた。

「それに弱そうに見えて宮藤さん一人で使徒を倒したのよ」

「あんの豆狸め……」

「貴方も料理のことで敵意を向けたわね？なら話は早い筈よ」

アスカは暫し黙って考え込み、結論を出した。

「豆狸とその他諸々の優勝を阻止するのね」

「そうよ、貴方は強いから他の専用機持ちは簡単でしょ」

「まあね」

かつてEUの代表候補生同士で戦い合い、アスカは難無く優勝した。エーリカやゲルトルートとは学年が別なので今回も優勝は容易いと思っっている。

「あんたはどうなの」

「今のところ坂本先生にだけ負けてる。あとは全勝」
「なら申し分無いわね」

アスカは手を差し出す。レイはアスカの手を取りしっかりと握手する。

「言っただけには絶対優勝するわよ」
「ええ」

シャルルは一人、夜中に目が覚めた。月光が部屋に差し込み輝く。

「う……ん……」

起き上がり辺りを見回す。一夏とシンジは既に寝入っている。その寝顔に思わず見入ってしまう。

「……シンジには手を出すな、か……」

あの日、初めてレイに男装を見破られしつこく問い詰められそうになった。

しかし、聞いてきたのは一つだけ。

『碇君に手を出して無いわね？』

『え、うん……』

『ならいいわ。これ以降も手を出さないなら黙ってるから』

『わ、分かった……』

『あ、織斑君なら別に構わないけど織斑君の方が敵は多いわよ』

そう言われた意味は分かっている。だが、

「そんなこと……できないよ」

一夏とシンジは優しい。他のクラスメートが惚れるのも分かっている。

レイがシンジを独り占めしようとしていることを思うと狡いと思ってしまう。嫉妬に似たような感情だ。

『ここにいればいい』

初めて言われた自分の居場所。
無為に過ごしていた時は居場所なんて関係無かった。
それを二人は認めてくれた。

「狡いよね、一夏とシンジは……」

二人の魅力に惹かれ、シャルルは見つめる。
レイとの約束なんて構わない。好きになってしまったのだから。
シャルルは二人の額にキスをした。

「おやすみ、一夏、シンジ」

数日後

とうとう学年別トーナメントが始まった。観客席には各国政府関係者や研究員、企業エージェントなど様々な来賓の人々で埋まっている。

開会式を終え、三人は男子更衣室へ入っていた。反対側にある女子更衣室は人口過密に対して男子更衣室はだっ広い。四分の一に縮めても広いくらいだ。

「凄い人だな」

更衣室のモニターから観客席を見る。今までの試合とは違い、こう

もギャラリーが多いと緊張してしまう。

「三年生は企業とかのスカウト、二年生は一年間の成果を確認するために来てるからね」

「一年生は関係無いけどトーナメント上位者は早速チェックされるらしいよ。それに」

「特に俺達か」

「そう」

一夏、シンジ、シャルル（今現在）は世界でも例を見ない男子操縦者である。どこの国も企業も喉から手が出るほど欲しいくらい貴重な存在である。

「僕達は一年生だけど男子だからやっぱりそれなりには見られてるよ」

「なんかプレッシャーだな」

「負けて大恥をかくのは御免だからね」

「でも一夏とシンジなら大丈夫だよ」

一夏とシンジがペアを決めてから人一倍と言えるくらい練習した。シャルル（&ペリーヌも）の指導もあったおかげで僅かな日数で連携を取ることができるようになった。

「ありがとう、シャルル」

「あ、え、うん……」

シャルルは恥ずかしそうに俯く。

「た、確かそろそろ対戦表が決まるはずだね！」
「そうだな」

シャルルは恥ずかしさを紛らわそうと話題を変える。二人もその話題に乗る。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目、いきなりのトップバッターだなんて運がいいよな」

「え？そう？」

「待ち時間に色々考えなくて済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ」
「そっか、真剣勝負だからちょっと学びたかったけどそういうのはあまりないからね」

「ん？」

「あ、いや、なんでもないよ。確かシャルルは二組目だよな」
「う、うん」

シンジはお茶を濁し、話題を逸らす。

そうこうしているうちに対戦トーナメントが決まり、モニターに表示される。

「「「え?」「」」

三組目 セシリア・オルコット&リネット・ビショップVS綾波レイ
イ&式波・アスカ・ラングレー

二組目 シャルル・デュノア&ペリーヌ・クロステルマンVS宮藤
芳佳&真希波・マリ・イラストリアス

だが、三人が注目しているのは一組目の組み合わせ。

一組目 織斑一夏&碇シンジVSラウラ・ボーデヴィツヒ&篠ノ之箒

続く

第貳拾伍話 開幕、学年別トーナメント（後書き）

リーネ「芳佳ちゃん余っちゃったけど大丈夫かな」

美緒「私と組んであげたいが教師とは組めんからな……」

ゲルトルート「なら私が」

エーリカ「トゥルーデは私とだよ」

レイ「安心しなさい、もう決まってるらしいから」

次回「男子の実力」

ミサト「次回もサービスサービスウ！」

第貳拾陸話 男子の戦い（前書き）

美緒「そつえばミーナの姿が見えないな」

第貳拾陸話 男子の戦い

一戦目

とうとう始まる。

四人に笑顔は無く、真剣な眼差しで相手を睨む。

「まさか一戦目で当たるとはな。待つ手間が省けて助かった」
「そりゃどうも。俺も同意だぜ」

カウントダウンが始まり両者の緊張が高まる。

3

2

1

開始

「「たたきのめす！」」

一夏とラウラの言葉が同時に重なる。

一夏は開始同時に『瞬時加速』し、ラウラへ突撃する。それに対しラウラは軽く右手を突き出す。一夏は彼女の目の前で見えないAICの網に捕まった。

アクティブ・イナーシャル・キャンセラー
AIC。慣性停止能力のことだ。

鈴やルツキー二を苦しめたのもこのAICだ。

「開幕直後の先制攻撃、わかりやすいな」

「そりゃどうも、以心伝心で何より」

「なら私が次にどうするかも伝わるな？」

ラウラは大型レール砲を構え安全装置を外し一夏に狙いを定める。白式もこれに反応し警告を発する。だが一夏は焦らない。

「させない！」

シンジは一夏の頭上を越え同時にパレットガンを放つ。レール砲の狙いがズレ、砲弾は空へと放たれる。

ラウラは後退し距離を置こうとする。がシンジは見逃さない。

「逃がさないから！」

シンジはパレットガンからガトリング砲に持ち替える。ラウラに向かって鉄の雨を浴びせる。

シャルルのように『高速切替』ができないシンジは開始直後にあらかじめ武装をいくつか呼び出し、背中などに隠していた。これもシャルルから提案された方法だ。

「私を忘れてもらっては困る」

「！」

ラウラとシンジの間に箒が割り込んで来た。『打鉄』の実体シールドを張り、シンジの掃射を防ぎ、更に切り掛かる。

「俺も忘れんなよ！」

ラウラのAICの束縛から解かれた一夏は『瞬時加速』でシンジの背後に回り込み、そしてシンジは後ろへ飛び上がり一夏と入れ替わり、箒のブレードを受け止める。

金属がぶつかり合う音と共に火花が散る。

五分五分に始まった鏖ぜり合いは一夏がやや優勢に傾く。押された箒は焦りを感じ、刀を大きく振りかぶった。

「シンジ！」
「うん！」

一夏の後ろにいたシンジはパレットガンに持ち替え、更にもう一丁パレットガンを手に構え引き金に指を掛ける。そしてどんでん返しの如くポジションが入れ替わる。箒はブレードを振り下げようと動きが一瞬止まる。

そこへシンジはパレットガンを撃ち込む。回避など到底不可能だ。

しかし、弾は当たることなく箒が消えた。

「えっ！？」
「なっ！？」

見るとラウラがワイヤーブレードを使い、箒を後ろへ投げ飛ばしていた。だが味方のためで無く箒が邪魔だと感じたからだ。

箒は抗議の怒声を発するがラウラは聞こうとしない。

ラウラはプラズマ刃を展開、左右から間髪入れずに斬り掛かる。連続的な攻撃に一夏は徐々に圧されていく。

なんとか回避、受け止め猛攻を防ぎながら後ろを一瞬見る。

『一夏、サポート入った方がいい？』
『いや、例の作戦で行くぞ』

『分かった、任せるよ』

プライベートチャネルで僅か5秒のやり取り。だがそれだけで十分だ。

一夏の言う作戦は『まず筭から倒す』。

ラウラは一对多の戦闘に特化している。更に先程のやり取りからもお互いにお互いを助ける気は更々無い。つまり一人がピンチでもフオローに回る可能性は無いのだ。

先に片方を倒し二対一に持ち込む。これが二人の作戦だ。

「ごめんなさい、ここで倒れてもらいます!」

シンジは謝りながら、しかしプログレッシブナイフを構えた。

その頃

「……………」

ゲンドウは四人の試合をリアルタイムで見ていた。
普段なら副司令であるコウゾウもいるが今日は出張していない。司令室には彼一人だけだ。つまり隠すこと無く堂々とモニターを広げて見ることができる。

「頑張れ、シンジ……」

「失礼します」

ゲンドウは即座にモニターを閉じた。
入ってきたのはリョウジだった。

「……久しぶりだな、加持リョウジ首席監査官」

「どうも、今回は急務で来ました」

「なんだ？」

「例のシステムの足が掴めました」

ゲンドウは僅かに顔を上げた。

「場所は……IS学園です」

「まさかあれが……！」

ミーナはアリーナへ急ぐ。試合開始までに間に合っつもりだったが来賓の相手をしていて手間取ってしまった。なんとしても試合前にやらねばならないことがあった。

今朝

『久しぶりね』

『ああ、久々だな』

リョウジとミーナは電話で互いの状況を報告し合った。

ミーナはドイツ銃士団が来日したこと、ラウラが危険人物だということなどを報告した。

『それと早急に頼みたいことがある』

『いいわよ』

『例のシステムの回収を頼む』

例のシステム。リョウジが告げたキーワードにミーナは笑顔を消し、無表情になる。

『貴方の仕事じゃないの？』

『生憎、実は君が一番近いんだ』

その言葉で全てを理解した。

『……なるほどね。で、どのISかは分からないかしら？』

『どの機体かは分からないが、これだけは確かだ』

「ドイツって……ドイツ銃士団しかないじゃない……」

ミーナは思い浮かべる。

ゲルトルトの『ゲルハルト』。

エーリカの『シュトルム』。

アスカの『二号機』。

そしてラウラの『シュヴァルツエアレーゲン』。

ゲルトルトとエーリカは二年の二組目、アスカは三組目なので優先すべきは一組目ラウラだ。

しかし、試合は既に始まっている。だが今中止にすれば生徒は不満を漏らし、更に来賓にも不安や疑問など不信感を与えかねない。

「でも」

あれは災厄だ。もし作動すれば何が起こるか分からない。分かるのは、破壊を産むことだけだ。

やはり試合を中止してでも止めるべきだ。

「織斑先生！」

「どうした？」

「今すぐ試合の一旦中止を」

「何故だ？」

「ボーデヴィツヒさんのISに例のシステムが積まれている可能性

が」

例のシステムと言われ、千冬は鋭い目を見開く。だが、千冬は表情を戻しミーナに向く。

「いや、大丈夫だ」

「どうしてですか！」

「危険なシステムだと言うのは分かっている。その起動条件もだいたい分かっている」

「つまり……試合中には発動しないと？」

千冬はああと頷き、モニターを見る。

「それに憶測だけで妨げるのは一番危険だ。いざとなったら、二人がやるだろう」

「そつだいいいですけど……」

ミーナは不安が消えぬまま試合を見守り続けた。

試合は終わりに近づいていた。

箒は抵抗虚しくシンジに敗れた。流石に専用機と量産機のスペックにはかなりの差がある。負けて当然だ。

そしてシンジー夏VSラウラ、二対一になり、二人が有利かのように見える。

だが一夏は一对一でエネルギーのほとんどを使い果たし、ラウラはここぞとばかりに攻撃の勢いを増していく。

シンジが不足分をカバーしようとする奮闘するも逆にシンジまで追い詰められている。

「っ!」

「遅いつ!」

ラウラはワイヤーブレードでパレットガンを弾き、シンジに叩き込む。

「っあ!」

「シンジ!」

「仲間より自分の心配しろ!」

一夏がシンジに気を取られた隙にラウラはブレードで一夏にダメー

ジを与える。

エネルギーが尽きかけた『白式』は床へ落ちる。

勝利を核心したラウラは笑う。今まで見せなかった最高の笑みを見せた。

「私の、私の勝ちだ！」

だが勝利宣言はまだ早かった。
紫の陰が高速で過ぎり、ラウラへ突撃する。

「まだ敗北は決まってるじゃない！」
「なっ、『瞬時加速』だど!?!」
「隙ありだよ」

一瞬で間合いを詰めたシンジはプログレッシブナイフでラウラに襲い掛かる。

だが、ラウラは慌てず冷たい笑みを浮かべる。

「だが、私の停止結界の前では無りよ……っ!？」

「もう一度言っよ、僕達は二人だよ」

シンジの背後にはパレットガンを構えた一夏がいた。シンジはわざとパレットガンを捨て、一夏に渡していた。一夏が床に落ちた時に気づき、シンジとの連携プレーを再構築した。

「これならA I Cは使えない！」

「この……死に損ないがっ！」

狂うように叫ぶが冷静さを失っていない。一夏の危険度が低いと判断したラウラは無視し、シンジのみ倒そうとする。

だが、目の前には銃口。いきなりの登場に目を丸くする。

「零距离は絶対に外れない」

いつの間に、とラウラは思う。複雑な構造に大きな銃身。隠せる筈が無い。

「ボジトロンスナイパーライフルは今出したからね」

「っ！」

ポジットロンスナイパーライフルが放たれた。

高出力のエネルギーに吹っ飛ばされ、アリーナの壁へ激突する。ラウラは初めて苦痛で表情を歪ませた。

ラウラは身体を起こすが遅すぎた。再びポジットロンスナイパーライフルの銃口は目と鼻の先。

「ごめんなさい」

シンジはまた謝り、低出力のエネルギー弾を放ち止めとばかりに撃った。

だが、ラウラの目の前にはシンジは映っていなかった。
彼女は黒い空間にいた。目の前にあるのは白い文字。

D
o
y
o
u
w
a
n
t
v
i
c
t
o
r
y
?

D
o
y
o
u
w
a
n
t
p
o
w
e
r
?

D
o
y
o
u
w
a
n
t
t
o
k
i
l
l
t
h
e
m
?

y
e
s
?

n
o
?

ラウラは選択肢に手を伸ばす。

——私は力が欲しい。

答えに反応し文字は崩れ、また現れる。

OK .

Valkyrie Trace System

Dummy System

Bootstrap .

第貳拾陸話 男子の戦い（後書き）

アスカ「やけにバカシンジの奴好戦的ね」

レイ「かつこいいじゃない」

アスカ「確かに……そうだけどさ」

芳佳「シンジさん……かつこいい」

次回「ダミーシステム」

ルッキーニ「頑張れ〜！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129t/>

IS <インフィニットストラトス> 女神が創成した世界

2011年11月15日16時35分発行